

「実践酪農学」の記録

(2005 年度前期)

- | | |
|--------------|----------------------|
| ① 放牧酪農について | 佐藤 智好氏(足寄町 酪農家) |
| ② 教育ファームについて | 広瀬 文彦氏(帯広市 酪農家) |
| ③ 都市近郊酪農の実践 | 百瀬 誠記氏(江別市 酪農家) |
| ④ 無畜舎酪農と季節繁殖 | 出田 基子氏(清水町 酪農家) |
| ⑤ 酪農生産法人の歴史 | 白石 康仁氏(卯原内酪農生産組合 部長) |

講義用スライド

① 放牧酪農について

足寄町 酪農家
佐藤 智好



酪農家の本当の成功ってお金儲かった、ただそれで良かったっていう風にはならないんですよね。やっぱり環境にもやさしくなんなきゃならないし、後継者も、あーこれだったらおやじの後ついでやるよ。あるいは、みなさんのように若い人達が、放牧酪農だったらやってみたいな一っていう風なものをやっぱり自分達、先輩としてやっぱりやっていかなきゃならない。その中で、自分達も、40代半ばでもって放牧酪農っていう形へ変更したんですけど、それはやっぱり今まで儲けよう儲けようってあまりにも強く思いすぎた。そうじゃなくて、自分達の時に儲けるためには何をしたらいいんだっていう風に思ったのが始まりです。まー一牛は牛らしく、人は人らしく、そういう風に原点に戻ってそして、放牧酪農をやってみようって考えました。

〈経営概況〉

経営概況なり牧場の概況なんですけども、母親が死にましたが父と母が昭和21年に、入植して、原生林を畑に耕して、そしてまー25年そこでやってきたわけです。それから牧場に昭和50年に移転してきました。今の家の構成っていうのはこうなっています。土地は全部で109ha、採草地50ha、放牧地29haということ結構面積的には恵まれてるんです。放牧酪農をするのに最低条件っていうのは、やっぱり牛舎近辺になるべく広い土地を持つてのが一つの条件ですよね。それから、放牧酪農を目指したいということであれば、やっぱり足寄町みたく他の町々回ってね、素敵な土地を見つけて、安い土地を見つけて、いい仲間を見つけて、そしてやれば、あの一成功への道のりはちょっと短くてすむのかなっていう風に思います。年間の牛群成績ですけども、乳量はこういう風になっております。脂肪とか無脂固形とかね平均産次とか、分娩間隔ありますけれども、放牧をする前はですね、この平均産次ってのが僕の場合1.7産だったんですね。で、確実にやっぱりあの平均産次も伸びたし、まー乳量も放牧を始めた時には下がったんですけども、やっぱ

りそれも徐々に回復して、やっぱり牛が本当に草地に行って草を食べることによって、効率良く牛乳になっているのかなっていう風に感じております。これ牛の歩く通路なんですよ。で、牛舎がここですよ。こっからこう行きます。こっちにも行きますし、こっちからこうも行きますよね。こう行ってこうも行きます。ここにはちょっとちいさい川があるんですけども、ここも渡ってこう行きます。平成8年にニュージーランド行って、あーなるほどこういうやり方もあるんだなと思ったんですね。みなさんこれから勉強すると思うんですけども、牧区がNo.1-No.20ぐらいまでありますけれども、一日ねここにねこう牛を放牧する。これですね、No.1ね、そしてNo.2、No.3、No.4って風に放牧するんですけども、一日目、二日目、三日目、そしてぐるーっと回って、ここにくる頃にはまー普通の適期の状態では、ちょうど草丈が15cmとか20cmに伸びている訳です。本当に牛が食べ頃の草にまたなってるわけですよ、で、天気の良い日にはまー昨年みたいに暑い日にはそれが伸びすぎたって言えますよね。で、そんな時にはこの牧区とこの牧区とこの2牧区以外は閉鎖してこれは乾草にまわそうと、そして、あとの16牧区ぐらいでもってまわそうっていういうこともできるんですよ。ですから、酪農に限らず農業ってのは常にその気象条件に左右されるってことなんですよ。だから、そこがやっぱり難しい所以



なんですけども、それをやっぱり事前に察する。特に、今年みたいに気温が低い時にはやっぱり全部の牧区を使って、途中で気温が高くなった時点でどっかの牧区を閉鎖しながら、また少ない牧区でまわせれば効率よく、放牧できます。こうすることで牛が本当に栄養のある、草を食べれるのかなっていう風に思うんですね。やっぱり放牧の大前提ってというのは、放牧からいかに栄養を取るかなんですよね。放牧からいかに、たくさん栄養を取ることによって、穀物給与を減らせるからコストダウンにつながるってことなんです。それと同時に、従来であればこの全部を大型機械でもって刈り取って、そしてサイレージなり、乾草にしなきゃいけないものを、牛が自分で来て自分で歩いて自分で収穫するんですよ。ですから、牛は、自走式のハーベスターであるし自走式のマニュアルプレッダーです。ようするに、ここに全部糞尿をばら撒きますよね。以前はそうじゃなくて全部機械でもってやっていたんですけど、あれを近代酪農って言う風に言ってるんですけども、オラに言わせれば、随分不合理なんです。燃料は、アラビアから持ってくる。穀物は、アメリカから持ってくるでしょ。そして、高い労働力を使って、ああいう形でもってやっているんです。確かに、先程言いましたように、穀物のような物も、安くて労働力も安くて、そして、オイルが安いうちはそれでも成り立つよね。そうじゃなくて、こういう方法があるんだってことをね、皆さんに知って欲しいなと思うんですよ。で、もう一つね、先程、ちょっと言い忘れたけども、これを、もし、あの牛が、自分で牧草を食べることによって、あの労働力が軽減されることになれば、コントラなり、自分で収穫しなくてもいいし、その、期間には牛舎なり、あの給餌施設で餌を人間があげなくても済むんだよね。それが非常に我々酪農家にとっては、楽だというか、まあ一朗報っていうかね、我々が目指した酪農はこれだな、これなんだなって言う風に、今、自分達、感じております。先程言いましたように、今ね、平均200頭、300頭飼ってる農家の平均産次はこれが随分低いんだよね。2.1産とか、あるいは、2.2産とかね、そして、こうなっちゃうと結局牛の寿命が短いってことだから、200頭、300頭飼ってもね、所得率が下がっちゃうんだよね。だから、若いうちに淘汰しなきゃいけないって事になってるから、その分50万、55万の若牛を補充しなきゃなんないんです。その牧場の牛乳生産ってのは、大きくすれば乳代って

う風な形での総収入は上がるけれども、他方、牛の淘汰が早まる。あるいは、機械化を多量に使わなきゃいけない、油も使わなきゃいけない。そして、人も雇わなきゃいけないって事で所得も減るし、所得率も減るから、結局は所得も意外と伸びないっていう、人も結構いる。まあ全部じゃないですけどね。だから、我々これ放牧を始める時に、皆、周りの人に言われたんだけど、「今更なぜ放牧なんだ」と、「昔に戻るんじゃないの」って言う風に言われたんだけど、昔に戻ったって、お金になればいいし、労働力が軽減されれば良いわけであって、問題は、大規模で牛を沢山飼うことが自分達の目標じゃないんだよね。自分達の目標って言うのは、あくまでも、その家族が幸せに過ごせば良いだろうし、そしてまた、時間的な余裕も欲しいだろうしね。で、やっぱりたまには、海外旅行なり、まあ国内旅行もしたい。そなると、ただただ、忙しい。でも、お金はある。そういう生活だけで、果たして良いのかって事なんだよね。我々はそうじゃなくて、やっぱり、酪農家として良かったなって、男性だけ、父さんだけじゃなくて、お母さんもそうだし、子供たちも、あー酪農家で良かったよなって言う風に思えるような、酪農家になりたいということで、こういうスタイルにしたんですよ。これが、平成8年に放牧を始めたんですよ。で、今こういう風になってます。で、そんなに乳量変わりません。でも、一番下の乳飼比なんですけれども、これがあの平成6年、7年は35%くらいだったんですよ。で、これが10%と違うとね、もう300万違う。300万~350万違ってくるんだよね。一年間にね、これ、350万プラスになるか、350万マイナスになるか、もうほとんど餌で決まっちゃうってのが、今の酪農の実能なのかなって思ってるよね。ですから、やっぱり、なるべく、牧草から栄養を取るっていうことで、これがこういう風にずっと下げれる。で、自分達の仲間では、まだまだ、乳飼比下げてる人もいますが、ただ、下げりゃ良いってのもでないんだよね。穀物の値段が今安いですから、ある程度食べさせて、そして、また青草もある程度、放牧もある程度しながら、程よい形でもって、一頭あたりの所得を増やす、そういう形が、一番望ましいですよ。これが平成8年と平成15年を比較した図なんですけども、まあ総収益でこれだけ違いがあります。自分達が一番目指すのはこれ当期純利益なんですよ。これが自分達が見えるお金、生活費プラス車買ったりあるいは

機械を購入したりってするお金なんですけども、これをいかに増やすってことです。フリーストールといますか大規模化にするのか、あるいは我々のような放牧にするのか、あるいは従来の舎飼いっていいますそういうスタイルでもって、経営を継続するののかという風なことを日々、酪農家は選択してます。そういう選択を誤っちゃうと、2億、3億の負債を抱えながらも辞めるに辞められない、そういう農家もいるんですよ。で、片方では1億、2億の貯金もある。だからその上下の差がねすごいのもまた酪農の世界なのかなっていう風を感じております。で、やっぱり、酪農をするにおいては少しねお金を借りなきゃいけない。それもまた、ある意味事業だからね、やっぱり事業資金は無けりゃー借りなきゃいけないし、その代わり確実に返さなきゃいけないってことですよね。で、その返し方が先程言いましたように、たくさん数を飼ってたくさん牛乳を搾って返すのか、あるいはそんなに飼わなくても、合理的な方法だけもって所得上げて返すのかっていうのが、それぞれの経営者の力量だと思う。

〈情報の活用〉

牧草の条件でもって変わるんだろうけれども、ただ様々のね、雑誌なり先生方の言うことを含めて活字に書いてあること、そして、先生方の言うことが全て間違っていない。あってる。それが順当だっていう風に考えてもらったら困るんだよね。で、やっぱりこれからは、皆さん疑ってかかることも必要だし、ある部分信じることも必要なんだけど、やっぱり情報ってのは、あくまでも裏と表がある。正しい情報もあるし、正しくない情報もある。その人にとっては正しいんだけど、他の人にとっては正しくない情報もあるっていう風にとらえていかないとやっぱり情報に左右されちゃうってこと。これは他の産業だけじゃなくて、我々酪農家の人にも言えるんだよね。ですから、よく言われるんですけども、一頭当たりの乳量を増やせばいいのかってことで、バンバンバンバン餌食わしちゃうと、結局は餌代だけでもって経費が増えちゃって結局は所得にならないってことですよね。所得率23%でしょこれね。で、こちらはこういう風になってる。って事になると、餌食わした割には所得にならないとしたら餌食わさんで所得になる方を考える。だから、たくさん食べて搾るのか、あんまり食べさせないで搾るのかっていうそこら辺のちょっと難しい所なんだけど、やっぱ

りこれはどうしてそういう技術を習得するかってなったら自分一人では困難なんだね。なかなか。専門家の人に聞いても教科書通りっていうか、我々に言わせればアメリカの様々な情報が意外とそういう風な方向にいつてるのかなっていう風に感じます。で、我々は仲間7人、そして今新規就農した3人っていうか3軒ですね。我々は夫婦でもって同伴でこういう技術討論会とか、色々な取り組みをやってるんですね。で、その中で、やっぱり、総収入を増やすことに苦心していると労働力は本当に足りなくなっちゃうし、何のために酪農やってるんだと。自分達が最初目指した所得も上がるし、そして時間も作れるってというような目標がずれ、いつの間にかずれちゃうってことが多々あるしそういう現実を見てます。先程、話題に出たけどやっぱり辞めるに辞められない。辞められない止まらないっていうたぶん何かそんな風なふざけたことを言う人もいますけども、もうかっぱえびせんの世界ですよ。辞められない、辞めたいんだけど辞められない、辞めさせてくれないっていうのかな。だから、あこがれじゃなくてやっぱり農業社会も、酪農社会も厳しいよ。でもやり方によっては、可能性もあるよってのが他の産業と全くまー共通していることだと思います。これが今までの自分達の経過なんです。

〈経営の経過〉

昭和21年にね、親父夫婦が入植しました。で、そこは面積が少なく、これからの経営展開にはちょっとまずいなっていう風に感じましたんで、僕が25歳の時ですね、ちょうど昭和50年に今の所に移転しております。で、そんな時に色々な施設、牛舎、尿だめ、堆肥盤、そんなもの、あるいは土地習得含めて5,000万の負債をしました。こういう風な借金っていうか投資をしますと、借金ってあまり聞こえ良くないから、投資ってことだったらね何か儲けそうな感じするけどもやっぱりこれからはみんな借金っていう風に捉えるより投資って捉えた方が良くないかね。でも借金ってのはダメだ、ちょっとみじめったらしいよね。人から借りたんだよねーうん。でも、順調に返せばこれは投資になるんだよね。で、借金したんだから投資したんだからたくさん搾れよって言う指導があったりして、濃厚飼料多給型っていう風実践するんですけども、先程言ったようにまー一事故が多くてね。先程2.7産と言いましたが、平均産次が2.7産ですね。で、

まあこれはずいぶん続きましたよね。十数年続きましたよね。あの、苦悩時代がね。で、あの91年ですけども、中標津行って三友さんってひとがおります。この人は、牛を減らす、そして牛の能力を落として所得を上げる方法があるんだよっていう風に我々に教えてくれた人なんですね。例えばグラフ書きますと、収入がこんなにあるんですけども、ね、経費がこれだけかかっちゃえばこのぐらいしか所得無いですよ。でも、この収入がこれしかなくても、これしか経費がかかってなければね、所得がある。だから、たくさん搾ればいいんじゃないじゃなくて、たくさん牛を飼えばいいんじゃないじゃなくて、やっぱり先程から何回も言うんだけど、やっぱりその牛に合理的に働いてもらうためには、損益分岐点っていうかな、程よいその数字ってのがあるんだよね。そのためには、大前提でそれを一生懸命に働いてもらわなきゃなんない時もある。でも、そういうことをただその一人で黙々と頑張ってもなかなか成果が上がらない。そして浜頓別の池田さんに会った。そして放牧した方がいいよってというようなアドバイスを。そして96年にニュージーランドに行きました。穀物をたくさん食べさせてそして、たくさん搾って所得を得るってというような流れに急速にこの時点はもう行ってらっしゃるんですよ。で、ニュージーランドはほとんど一年中放牧できるってというような土地柄ですから、そして穀物が高くてとても買えない。だから、牛乳を生産するんだってということで20円とか22~3円でもって生産者は牛乳を売ってるわけですね。でも、我々は72~3円あるいは75円の乳価でもって、北海道で牛乳生産をしている。日本の場合は乳価は高いんですね。でも乳価に比較して購入飼料が安いからどうしても購入飼料をたくさん食べさせて、たくさん搾るっていう風になっちゃう。でもニュージーランドは、穀物が乳価と比較して高いからなるべく放牧してそして、所得を得るっていう風に全くやり方が違うんですね。ニュージーランドの乳価が安い所の放牧っていう方法を乳価の高い日本で実践したらどうなるかってことになったら、やっぱりこれはもう儲かるのは当たり前なんだよね。ある程度面積持っていればね。だから、そういう酪農にも色々なからくりっていうのかな、よくよくその見極めればわかるんですけども、そういう道理っていうものが意外と酪農の指導者っていうのはわかってないっていう部分があるよね。で、我々が放牧を目指すって言った時に本当に農協とか普及所からは

何考えてんだってというようなそういう風な罵声をね随分言われたんですよ。

〈放牧研究グループ〉

だから、我々7人そして向こうが農協、あるいは役場、普及所含めて何百人っていう数字ですよ。本当に多勢に無勢なんだよね。で、挑むにはどうしたらいいかってなれば我々がやっぱり数なんだよね。だから、あのグループでもってここにありますが研究会を設立したってというのが経過なんですよ。ニュージーランドと一緒にいった人が北海道農政部の部長って人で、やっぱり今まだなかなか日本でもって放牧酪農をやるってことに対して、農協組織とか普及所は応援してくれないだろうと、でそれに立ち向かうにはやっぱり君達、グループを作ってそれでもって、短期のうちに成果を上げなきゃ潰されるぞみたいな話ですね。我々はやっぱりグループを作りそして色々な放牧の本や本当に詳しい人を講師に呼んでそして勉強、徹底的に勉強しました3年程ね。そして我々男性陣は放牧に対してはある程度知識はあるし、認識もある、でも一奥さん方は知らない。それで勉強しに行ってもらいました。で、そんな時ちょうど農林省の方でも放牧酪農に対してどういう風な放牧酪農、本当に将来性あるのかどうなのかわかんないってということで、実践するグループにはお金を貸しますよと、補助金を出しますよという制度がありましてですね、7軒で5,000万程の助成金を得ました。ここにもありますように電気牧柵、牧道、水槽、そういうようなものを整備しまして、放牧に踏み切ったわけです。

〈放牧酪農に変わって〉

放牧をしてから変わった事って言うことは、こういうことですよ。介護酪農からの脱却。これは、ちょっとみなさんピンとこないかもしれないですけども、牛を牛舎に置いておきますと、糞もしますし腹も減ります。当たり前ですよ。ですから、それは人間が、バンクリーナーっていう機械を使うんですけども、やはり、除糞をして、餌は牛の口元まで持っていくって言うようなことを、本当に365日繰り返すわけです。けれども、それは、非常に過酷な仕事なんですよ。ですから、今は、なるべくそういう物を避ける為に、大規模化の人はフリーストールや様々な機械を駆使して経営をやっております。それが、結局は経営の足を

引っ張る。過剰投資に繋がるんですけども、そういうことを無くする為に、我々の様な放牧もあるんですよ。介護酪農では我々は健康な牛に対して随分、一生懸命、労力を費やしてね、やらなくても良いようなことをやったわけですよ。除糞とか、あるいは、餌やりですよ。で、牛が放牧地に行くと食べれば、糞の量は、本当に10分の1くらいで済みます。餌も放牧地で食べてくるんですから、そういう作業も減るって事ですよ。そして牛も人も健康になったってことです。牛も本当は青草食いたいんですよ。自分で行ってね。放牧地行って、牛が青草を食べれるっていうのは、牛は自分の食べたい餌を食べるわけね。で、そうじゃなくて、施設酪農の牛ってのは、食べたくない餌も、食わなきゃいけないんだよね。だから放牧地全般を食べるような草地にしなきゃいけないっていうのが、放牧酪農家の一番の見せ所であり、難しい部分だよ。その為には、土壌を良い牧草が育つような形でもって、管理をしなきゃいけない。そんなことを徹底して勉強しなきゃいけないっていうのが、放牧酪農の一つの難しさなのかなという風に考えております。こういう形で飼うとビタミンも補強されるし、運動もするし、そしてきれいな空気も吸えるし、雨にあったらシャワーでもって、牛体もね、自分の埃も落とせるし、あるいは、土に頭を擦ったり、体を擦ったりしながら痒い所にも、快適に対処できる。そんなことも含めて、健康になるのかなと思います。で、人も健康になったって言うのは、先程言ってますように、重労働から開放されるって事ですよ。ただ、冬の場合は、そうはいきません。冬はやっぱり、人間がある程度やらなきゃいけないです。だから、そこでもって、我々これから考えるのがやっぱりなるべく、放牧に合わせて牛を分娩させる。そういうことを、これから重点的に考えれば、冬の間はなるべく牛乳を搾らないで休み、人間の方も休む、そういう風な方法をね、ニュージーランドでやってます。ニュージーランドから帰って新規就農してる人はそういう事を実践してやってるんですよ。ですから、そういう工夫で随分、変わるっていうのがまた、酪農の面白さなんだなって言う風に実感しております。餌給与ですけども、僕たちは初めは4回やったんですね。これは、穀物ですけども、で、それが放し始めてから2回に減った。そして、労働時間も減少した。これは、餌給与、あるいは、餌を生産する為にトラクターに乗る時間も減ったし、そういう調整時間も随分減った

て言うことですよ。ですから自由時間も確保できたってことですよ。日中は牛を放牧に行っちゃおうと、夜の5時位までは牧草収穫以外の時期は自由時間を作れる。そんなのもまた放牧酪農の一つの長所だなって言う風に感じております。牛が搾乳時間しか牛舎におりませんから後の20時間っていうのは草地にいます。昼夜放牧ですからね。昼も夜も牛は草地にいます。ですから、24分の4しか牛舎にいないんですから、糞尿の溜まる量も少ないって言うことで、すごく効率的なのかなって言う風に思っております。

〈放牧酪農の課題〉

問題もあるんですよ。やっぱり、第一に牛舎のそばにある程度の土地が必要だ。一頭当たり、最低やはり30aあるいは50aの土地が必要なんですよ。第二に餌計算ができない。勘は大切って事あります。飼いが餌やらないので自分で本当に食べたい餌を、食べただけ食べてくる、ですから、もし、草地が良くなければ、あんまり食べてこないって事も想定できるんですよ。そして、天候に左右される、先程、申しましたように、やっぱり今年みたいに、天気が良くない年には、牧草の生産も落ちるから、その分をどうするんだってような課題も残るんですよ。

〈季節繁殖〉

秋からね、5月の間、この時期に、分娩させれば、ちょうど、牧草時期に牛は草地でもって十分な餌を食べて、本当に低コストの牛乳を生産できる。そして、所得率が上がる。そういう風な形になっております。で、牛が出来ることは、牛に任せる。これ、非常に大事なことなんですよ。先程言ったように自分達、今まで何十年も、牛が出来ることを人がやってきた。そして、腰が痛いとかね、腕が痛いとかね。で、農業はつまらんそして、後継者にやらせれない。それが今までの我々の先輩のやってきた農業なのかなという風に思います。で、牛の力を信じる。これね、牛はただ牛乳を生産するだけの牛じゃないんですよ。やっぱり、あの本当の栄養あるおいしい牧草を見分ける力もあるし、4kmも5kmも遠い畑でも自分で行ってちゃんと牧草食べて一牛舎に戻ってきて牛乳を生産してくれる。本当にそのすばらしい能力を持ってるんですよ。でも、今の大規模農家は、ここら辺がね、ただただ牛乳を生産するだけになってるのかな。ちょっとそんな

感じますよね。

〈土づくり〉

土ってのは本当にどうなってんだってのは我々の目には見えないんですよ。窒素がなんぼだ、リンがなんぼだ、マグネシウムがなんぼだ、ケイ素がなんぼだ、これはやはり分析に出さなきゃいけない。でも一番手取り早いのは、牛を草地に出せばいい土地なのか、いい草地なのかどうかってのはわかるんですよ。やっぱり、まんべんなく牛が食べてくれるってのは、あーいいぞと。そしてミミズとかね、クモとかね色々な虫がいるとやっぱりね、そういう草地の草をよく食べられるんですよ。だから、やっぱり微生物とか、あるいはそういう昆虫とかがねいるってのは一見気持ち悪く風に思うんですけども、やっぱりそういうその生態系っていうのかな、そういう様々なクモとかねミミズとかそういうもんでもって土のバランスってのはとれてるのかなっていう風実感するんだね。ですから、別に我々の仕事ってのは常に放牧地を歩いて、土を見て、そして糞をひっくり返して色々な虫がいるな、そしてたまには、あつミミズもいるぞとそんな事を確認しながら牛がどういう形でもってどういう風に草を食べてるのかなっていう風に見ながらやるのが放牧酪農家の仕事なのかなっていう風に感じます。

〈放牧風景と食料〉

牛がこうやってこう寝るとね、まあ一牛が寝てるってのは我々すごく癒されるんだよね。北海道のチーズとかバターのパッケージってのはこれですよ。でも本当9割の酪農家はこういうスタイルじゃないよね。でも、消費者はこういう方に望んでる。だから消費者が望んでるスタイルと生産効率、生産を上げると、コストを下げたくさん搾れって部分とのギャップがBSEであり、口蹄疫でありね。過剰に生産っていうのはたくさん搾らなきゃならないってことでそして、なるべく安い餌を食わせなきゃならないってことでそんな風に牛を飼った結果がBSEって形が出たってことですよ。ですから、それは何を意味するかってことは、生産効率を追求したあまりにね、最終的には人間まで死んじゃうぞと、自分の命まで縮めちゃうぞっていう結果なんですよ。ですから農業者はやっぱり餌を作ってるんじゃないんだよね。人間の食料を作ってる。人間の食料作ってるってことは、やっ

ぱりこれから君たちが結婚して、子供生まれて、そしてその子供達の命まで責任持たなきゃいけないわけだよ。そこが非常に重要なわけで、ただただ生産する、そしてコストを下げてたくさん搾ればいいし、自分達は幸せになれば子孫はかまわんよっていうことじゃなくて、自分達の子供、孫が本当に幸せな人生を送れるかってのは、本当にやっぱりいいものを食べて、元気の源のね、そういうものが得れることによっていい仕事にもつけるだろうし、いい発想も浮かぶだろうし、いいまた伴侶にめぐり合えるだろうし、そういう風な形が我々望んでいることであるんだ。それが一旦食糧でもって躓いちゃうと、車であればねパーツを取り替えて、それでもってすむよ。すいませんでしたでもって、新聞の片隅にリコール対象車はこれですよっていう風に済むんですけども、一旦、食糧ってことになりまして肝臓やられました。あるいはBSEは脳ですよ。脳までやられましたってことになると、脳を換えることはできないですよ。そして心臓も肝臓も換えることはできないですよ。今は一部できるけどもそういうことで、一旦体の中に入っちゃうととんでもないことなるよってのが食の世界ですね。で、今アメリカの牛肉を解禁しようっていう風になってますけども、非常に恐ろしいと思うのはただただその、政治決着じゃなくて本当にやっぱり国民の将来を考える。そして日本の将来を考えると、やっぱり特に食糧ってことに対してはまだまだその、厳しいあるいは真剣に考えた中で、決断してもらわんと日本の将来、あるいは人類ってのはこれからどうなるんだっていう危惧ってのは皆さんやっぱり持つ必要ある。我々生産者もね。非常にそこら辺は考えながらやらなきゃいけない。で、そこでやっぱり今の酪農の方向性ってのは少し、ちょっと違うぞと、我々生産者がそう思ってるんですよ。

〈放牧草〉

放牧ってのはやっぱりね難しいのは牧草がね、牛の食糧ですけども、いかにいい牧草を作るかってのが命なんですよ。やっぱり、クローバーとイネ科の牧草チモシーとオーチャードとかメドフェスクとか、ペレニアンライグラスとかって色々ありますけれども、それによって、牛の栄養が充足されるか、あるいは足りなくなるかっていう部分なんですよ。で、それによって先程から言ってますように、穀物の給与量が減らせる

か、あるいは、かなり食わして放牧の酪農になっちゃうか。放牧やって、高コストになっちゃえば、放牧やった意味がなくなっちゃうわけですよ。ですから、いかにそのいい草地を作ってそして牛に食べさせ。それを半年繰り返す、そして10年繰り返す、15年繰り返すことによって経営がね上向くか、あるいはまずけりゃ一停滞する。ここら辺が我々の永遠のテーマなのかなっていう風感じております。

〈農業機械〉

こういう風な機械使ったりして、草地管理をしております。でこれは昼食べさせサイレージですよ。こんなんでね色々あの、機械を駆使しながら今の酪農頑張っております。放牧地の牧区なんですけども、これを電気牧柵といいまして、これはずすことによって、牛が入り出す。ここにちょっと水槽ありますよね、これを、こっちの牧区とこっちの牧区の牛がね、水も飲める。そういう風になってます。

〈放牧研究会〉

常にね一年に何人かこうやって友達とかね、あの色々な放牧に関心ある人が来て、これが望ましい、これがマズイとかね。どうしたらこういう牧区の掃除ができるだとか色々こう検討し合いますよね。牧道ですけどもこの通路がねある程度よくなきゃ牛が汚れて帰ってくると乳房炎とか色々な病気になる。通路も良くしておくのが放牧酪農の一つの条件なのかなっていう風に考えております。

〈放牧のきっかけ〉

なぜ放牧を始めようかっていう風なきっかけなんですけれども、十数年餌とかたくさん食べさせてそうすれば、経営が良くなるっていう風に信じてきたわけです。ですけども、そうははっきりいってならない。そういうことなんですよ。でこれは、なるべく自分の草地でできる草をたくさん食べさせることによって何回も三回もさっきから言うんですけども、穀物の使用量が減らせる。そうすることによって餌代っていう一番経費のかかる部分が減らせることによって自分たちの経営も安定するし負債も返せるっていう図式なんです。それに気づくためにはすごい時間かかったなっていう風に思います。15年も20年です。酪農の指導が放牧酪農も一つの選択肢だよっていう風なことがな

かなか認められなかった。近年は言われてますけれども、我々が始める10年前ってのはね、そんなことやって失敗するぞと、今の酪農の方向ってのはそうじゃないぞと、たくさん穀物を食わしてたくさん搾ることによって酪農家の生活ってのは安定するし、これからのそういうスタイルがおそらく主流になるだろうと、そういう風に言われたのが10年前ですね。そして今もそれは言われております。ですけども、酪農家の経営状況ってのは土地が平らで穀物食わして、やれるような酪農家ばかりじゃない。傾斜地もあるし、石がごろごろでもってあんまり機械も入っていけない畑もある。色々な条件なんですよ。だから、それぞれの酪農家はそれぞれの条件をどのように生かしたら自分たちの経営が安定するか、そして自分たちの暮らしが守れるかってことを日夜一生懸命考えてるはずなんです。けれども、それがいかんせん様々な情報なりね、指導者の夢の中で、どうもどうもたくさん搾るほうに行っちゃうってのが10年前から今の方向なのかなっていう風に思います。

〈自主自立〉

平成8年に自分達が放牧酪農研究会って始めた。そのきっかけはやっぱりね、自分達の暮らしは自分達で守るしかないぞと、人からこうだあだって言われるんじゃないで、自分達がこういうような生活したい、こういうような牧場をつくりたい。そして、こういう風にこんなかたちでもって子供たちを育てたい、そういう目標を持ちながらね、放牧酪農に変えてきたんですけれども、それで一番大事なのは自主自立っていうのかな。自分のやり方は自分で決める、そして自己責任、自分で責任を持つ。そういうものが非常に大事、これはもう酪農に限らず全ての分野で大事だと思う。まあそこら辺がぴしとした考え持ってないと、やっぱり様々な情報の中で迷っちゃうし、決断はできない。人間生まれて物心ついた時から右に行くか、左に行くか、そしてこのおもちゃが欲しいよあのおもちゃが欲しいよ、これが食べたいよっていう風に日夜、毎日が選択だし決断ですよ。で、これはもう死ぬまで続くわけですから、その決断が正しいか間違ってるかでもって自分の自分の人生はバラ色にも行こうし、破滅にも行こうしその決断の中には良い友人を持つあるいは良い師匠を持つ、そういう刺激的な人にめぐり合えるかってのも全部実社会に出れば自分で

もって求めなきゃいけない。そこら辺で二十歳代ってのは非常に大事な時代なのかなっていう風に我々感じるんですね。で、我々がもしに十代にもってこれだけの選択肢があればやっぱりまだ自分の人生も変わったと思うんですね。ですから、やっぱり今は自由なんですけども、自由な中に迷いもまた生じると思う、職業の選択の自由、あるいは恋愛。様々の彼女色々いるだろうし。そして職業もね。もしかしたら途中で自分に合わないとなれば転職なり色々ある。そういう時に迷うのは当たり前だしやっぱりプチ挫折って今なんか言われてますよね。やっぱり挫折しながら、たくましく自分の人生をどっかでもっていい形でもってね、開花させなきゃならない。それはやはり、良い話も厳しい話も色々ね。こういう風な農家のおやじの話も聞くものも良いだろうし、先生方の話も聞いて色々やっぱりあるんだよと。そして友達の話も聞き、会社の経営者の話も聞き、そして新聞も読むし、その中でそれぞれの人生が形づくられてくるだろうし、そしてそれに賛同した人が伴侶になるだろうし、そしてそれに賛同した人がまた我々のようにね放牧酪農研究会、まあ7戸で最初やりましたけれども、そういう同士が集まると意外ととてつもないことできるんだよね。先程言ったよう多勢に無勢でも自分達が結果を出して行政なり、農協に認めさせて、そして結果が出ればこういうとこでね、みんなに話を聞いてもらえる。こういう風になったってのもやっぱり真剣に今までの自分達の反省なり、希望なり、そして子供たちにこうなってほしい、そんなことを日夜その、父さん母さんと話をする。そして農協の人とも話をする、役場の人とも話をする。そういう経過がね、だんだん酪農ってこんなにすばらしいんだっていう我々酪農家自身がね、思えるようになったんだよね。だから、自分達の仕事がすばらしいと思える、そして自信を持つようになるとやっぱり自然とねお金もっていか経営もね良くなってくるし、時間も自分達がこう取れるようになるんだよね。だから自分達の研究会ってのは、放牧酪農研究会ってというのが、あるんですけども、別名ね「家族でニュージーランドに行こう会」っていうことでもあるんですね。これはメンバーがね、なんか夢のあるそのタイトルつけようや、ただただその金を儲けてどうのこうのじゃなくて、なんか成功したあかつきにはニュージーランドに家族で行こうやっという事でメンバーがつけた名称なんだけど、それでもって自分達

のメンバーも去年一昨年ですか、2メンバーが夫婦でニュージーランド行ってきました。自分達も去年本当は行こうと思ったんだけど、ちょうど母親が病気でねちょっと行けなかったんだけど、そういう風に自分達やっぱり仕事やる中でも目標持つとねやっぱり仕事にも意欲が湧いてくるし、真剣にね仕事をするようになるし、そして子供たちにもこういうこともできるんだよっていう風なこう手本見せれるようになるんだよね。だからこういう風になるまでには色々まあ一挫折もあったし、いろいろな人の忠告もあったし、罵声もあったけども、人間生きていく中ではね、挫折はつきもんだし、悩みはつきもんだしね。でも喜びもあるし、希望もある。そういうことを信じなきゃだめだし、そして信じながらやっていると、なんかね、応援する人が現れてくるんだよね。不思議とね。だから、ほんとにね自分でこんなこと、こんな人生ってあるのっていう風な感じで、今まで十年間仕事してきたんだけど、不思議な感じするんだよね。

〈経営学習会〉

だから自分達最初グループつくった時には何をしようかと思ったら、今経営苦しいよって5,000万も6,000万も負債持ってたわけですよ。そして、まず自分達の今の経営状態をあからさまにしようと、借金いくらあるんだそして儲けはいくらあるんだってことをグループ全員が公表してもいいぞというコンセンサスできたんだね。で、これを取り扱い注意ってこれちょっと前の人しか見えないけども、農協職員が資料作るんですよ。で、これが平成8年からね平成14年までっていう風にこう総収入、そして経費、そして所得っていう風にこうランク付けて。君たちの資料には無いんだよ。これマル秘だからね見せられないんだけど、こういう風に自分たちの平成8年の現状とそして、放牧でもってある程度結果が出た平成10、これはちょっとね14年なってるけども過去と今を比較しようとするために、平成8年に今の現状の数字をあからさまにしてそして我々の目標に向かって頑張ろうやっという風に頑張ったのが自分達今の結果なんだよね。だから、ただただその傷口のなめあいをするんじゃなくて、ただただもくもくと仕事するんじゃなくて今の経営の状況、乳量はどうか、乳脂肪はどうか、蛋白はどうか、そして労働時間はどうか、そして負債はどうか、色んなことをね数字に表して9年間頑張った結

果、ちゃんと負債も順調に払われてきてるし、そして先程言ったように家族でね、夫婦でニュージーランドも行ってくると、あるいは国内旅行もしてる、そんなのが今の我々のグループの現状なんです。だから、この写真いいでしょ、みんなで集まってわいわいがやがやるんだよね。悩みも喜びもね。だから自分一人でね、悩んでると、やっぱり道開けないから、たまにグループ、他のグループっていうかな、他の人も呼んでね、この人は我々の師匠である三友さんっていう人ですよ、牛を減らして所得を上げようと、この人はやっぱり適正頭数、適正規模って言ってますよね。今の大規模化ってことに対しては批判的ですし、ちょっと問題ありだよっていう風なことを唱えている人でもあります。でーやっぱりね、常にモニタリングすることが必要ですよ。草とかね、牛とかね。で、一番、モニタリングしなきゃいけないのは人なんだよね。人間がやっぱり本当に健全な経営者になるための心がまえなりをやっぱりモニタリングするためにディスカッションもするし、こういう風な数字もね、あからさまにするし、この中で自分達がそんなにねあくせく働かなくても、牛に牛らしい仕事をさせてそして所得を上げるような努力をしております。

〈放牧サミット〉

牧場見た後は今度はあのちょっと事務所なりどっかの会館集まってね、反省なり、色々トークをやります。平成8年から今まで酪農やってきましたね、放牧酪農やってきました。それで、色々な形で成果を取めたっていうことであちこち急激に注目されてですね、足寄でもって今度放牧サミットをやろうと、ね、そういう風になりましたね。で、こういう風にこうすごい人がいろいろ集まってくるのさ全道、全国からね。それはやっぱり楽しく仕事やってそして成果が上がったよっていったらやっぱり人が集まってくるんだよねこうやってね。こうやって年に一回とかねこう会うとね、話はずみずみ。やっぱり本当に楽しくそして結果が上がってるっていうのがやっぱり生きてる、あ、これが本当に自分達が目指してるもんだなっていう風な実感は出るし、非常にですね、あぁいいなっていう風に感じております。

〈今後の方向〉

今後の経営方向ですけども現状の面積と頭数のバラ

ンス。まー放牧酪農のというのはある意味土地に制約されますし、やっぱり自然に影響される。その中でそしたら将来はどうなんだと、10年後、20年後ね乳価が下がった場合どうなんだと、様々やっぱり問題あります。けども、えーそしたら大規模酪農に問題は無いかのあったらやっぱりあるんですね。やっぱりお互いに問題はある。そしたら他の企業系には問題ないかあったらやっぱりある。ですから、問題は常に付きまとうのが自分達まーみなさんもそうですけどもやっぱり生きてる人間の現状なんです。だから、これもまたやはり問題や課題もあるとしたら、仲間なり、あるいは先生方にね色々お世話になりながらまー自分達の受け入れをより以上にですね、あのーいい方向に導くような努力をしたいと思います。えーまだちょっと時間ありますけれどもちょっとね、えー右往左往しながらしゃべったんだけど、もしみんなから質問あればね受けたいと思います。

〈質疑〉

Q: 冬場の飼料形態はロールだけなんですか？

A: 食べさす物は乾草と牧草サイレージとあとはコーンサイレージ。これがほとんどです。牧草サイレージはロールサイレージがすべてですね。あと穀物、あの濃厚飼料。

Q: 最初7軒の農家さんで始められたという風におっしゃってました。今日お話した佐藤智好さんのところの経営の概況なんかはかなり詳しくお話をしていただいたんですけど、他の6軒の農家さん達（当研究会のメンバーの人達）は、皆おんなじようなやり方してるんでしょうか？

A: 放牧っていうのもね先程新名先生がおっしゃってましたように、色々な放牧まだあるんですよ。こういう風にね区切ってねワンデイグレッジって、グレイジングっていうんだけど、毎日その牧区を変えるっていうやり方もあるんですけども、一日中こういうね牧場に放しっぱなしっていう酪農家もいるんだよね。

何が違うかってなると、これはまー一次の牧区、ねこう移っていくんだけど、だいたい草の伸びってほしいこうね、だいたいあーい、いい感じで牧草があるよっていうのがつかめるんですね、ある程度確立高くな。で、ある程度やっぱりあのー安定的な牛乳、生産をしたいってことになるとやっぱりこういう風なやり方がいいのかなっていう風に思います。で、こういう風

に一面でやってる人はあんまり借金もないしね、牧区え、牛をこっちやったりあっちやったりやるのは面倒だよ、まあこれゲート開いたりしなきゃいけないですから面倒だよって言う人は、で、俺はまあ大雑把でいいんだって言う人はまあほんとにね、こういう風な形で年中やってる人もいますよ。で、それでもあの、ちゃんと経営はなりたっております。

あともう一つはですね、えー放牧これですね放牧地が少ないからたんに、こっ、ねこういう風に放牧地がこれしかないから、したらー半日ずーっと放牧するよー、この一牧区にね三日も入れるよ、あるいは四日も入れるよって言う人もいますよ。で、昼前に牛を入れて、で、昼は先程言いましたように人間あるいは機械でもって餌をやるよって言うような放牧の仕方もあるんですよ。

Q: その7軒の濃厚飼料のやり方は普通より少ないとは思いますがそれぞれやり方が違うのかなって言う気がするんですけどいかがでしょう？

A: 僕は放牧農家にしては割りと穀物は使ってる方かもしれないですよ。量的にみると2tぐらい使ってます。で、使っていない人はやっぱり1t、1,000kg切れるって言う人もいますよ。で、乳飼比でいきますと10%を切る人もいます。乳飼比って言うのは、牛乳代のうちの餌代がまあ何%になるかっていうことです。牛乳代に比較して餌代が7.9%~21%、ですからたくさん絞って乳飼比が低ければ低いほど所得は上がるってことになります。単純に言いますとね。でー我々のグループ中ではやっぱりあの、牛の乳量がね5,000、6,000kgぐらいでもって1tぐらい。乳飼比が10%ぐらいって言う人もおります。自分の主義はこうなんだって言う人もおりますからどれが良いとか悪いとかって言うのはそれぞれの考え方なのかなって言う風に思います。

Q: はい、ありがとうございます。あの、おんなじ放牧やってても多少それぞれ農家によって違うということですね。でも、あのえーさっきの乳脂比自体は他の農家に比べるとずーっと低いというあの買い餌は少ない……

A: これねやっぱりひどい人になりますと40%45%ねー、えー僕も始まる前は35%いくら搾ったってもう、こんなにいっぱい搾ったって餌代がこれねこうなっちゃえば儲けなくなりますから、だからやっぱりね、今のあのーまり、あのーなんちゅうんだらうな魔

力って言うのかな見えない部分って言うのかな、ほん、それこそね標語であるけど、赤信号みんなでわたれば怖くないって言うけどもやっぱり赤信号はやっぱり赤信号なんだよね、みんなでわたっても怖いことは怖いって言うことを認識しなきゃいけないかなとかと

Q: えーと、放牧酪農にするにあたってどんなことを勉強したらいいんですか？

A: やっぱり、放牧酪農家を訪ねることでしょうね。微妙にそれぞれ考え方違うし土地の条件も違うしね、だから何件かまわっているうちに、あ、自分の条件、自分のやりたい放牧とあー似てるなっていう人にめぐり合えると思うんだよね。それと同時に、放牧の先進地であるニュージーランドに行くとかね俺達のメンバーの息子さんが高校卒業して短大のほうかな？ 二年、卒業してニュージーランド行ったって言う人がおりますから。やっぱりそういう形で国内だけじゃなくてね外国へ行くって言う方法もあるしね。あとは、なるべく様々のね雑誌とか先生の話とかで、放牧ってのはどういうことだって言うことを理論的にもね、頭の中に入れておけば農家へ行っても話しは分かりやすいよね。

Q: 理論的な話って言うのは、栄養学とかそういった……

A: いや、そういった、そういうことまでいなくても例えばどういう牧草が放牧に向いてるとか、あるいは牧道はなぜ必要かとか、あるいは先程言ったように牧区の区分けですよ。単純なちょっとした知識があるとないとではもう全然違うからね。

Q: えーと、5つぐらい機械がでてきたんですけどその使い方って言うか用途とか……

A: いい牧草地を保つためには、二通りの方法があるんですよ。牧草地を機械で掘り起こしちゃってそして新たに牧草を播くって言う方法と牧草地の上に牧草を播く方法がある。追播って言うんですけども、そういう機械なんです。草地を耕起して新しい牧草地を作るってことはお金がかかります。ですから、なるべくお金をかけないようにするために、そして同じように牧草生産が持続するようにこういう機械を使ってね、牧区の種だけを播いてそして牧草地を蘇らせる。この追播機がシードマチック。でこれは機械なり牛なりが草地に10年も15年も入れておきますと、やっぱり、土が固まるんですよ、そうすると牧草の生育も悪く

なるということで土をやわらかくする、浮かすんでね。こういう風にやって下にこうねこういう風な爪、ちょうどあのジェット機の尾翼のような形ねこうやってもってちょっと浮かすんですよね、こんな形の機械がサブソイラっていうのがあります。これは全部ニュージーランド製ですけどもね。これもちょっと似てるんですけども、浮かすまではいかないんだけどこれは草地を切るんですね。土を切るっていうのかな、そして空気の流れとかあるいは、水の浸透性をよくする。そして牧草の根が張りやすくなって、養分の吸収よくなって牧草の成長が促進されるそのための機械です。

Q: ありがとうございます。あと、もう一つなんですけど、僕の家は府県のその酪農家のやってるんですけども、府県だとこれからどのような形態をとったらみたいなのアドバイスがほしいのですが……。

A: あの、府県のあのどういうところに住んでるかにもよるんですけどね。気温の低い山沿いであってそして牛舎近辺にある程度の農地があればね、放牧酪農も可能だと思うんですけども、やっぱり、どうしても乳牛っていうのは暑さに弱いですから30℃以上を超えますとなかなか放牧でもって牛乳を生産するっていうのはキツイ部分あるんだよね。だから、東北とかあるいは四国、九州でも本当にそのかなり標高の高いところであれば可能なのかもしれないですけどもね。で、もし内地から移転するとかね、新規就農とかね。で、僕も移転したんだけど、やっぱり人生自分の目標をね、希望通りにするためにねそういう決断もねどっかで必要なのかもしれない。でも、自分の今住んでるところでそういうことができるのであれば、その方がお金はかかかないしいいですよね。住みやすい、住み慣れている土地ですからね。

Q: すいません、あの一草地更新とかはしないんですか？

A: 原則としてなるべくしないように心がけております。草地更新しますと、土壌が変わるっていうのかな、そんなんで意外と牛が食わないとかね、そんなのもあったりしてやっぱり微生物とかそういう動きが変わるんだよね。で、あともう一つは先程言ったようにやっぱり草地更新することによってお金がかかるってことだよ、やっぱりトラクターでもって起こして、そして土を細かくしてね、そしてまた新たにあの機械を使って牧草を播くっていう作業で結構お金がかか

る。そしたら10a当たり数千円なり一万円くらいかかっちゃう。そんなこともあってなるべく起こさないでやるためにはこういう機械をつかって、牧草を追播してやるほうがむしろいいのかなという風に思います。

Q: 労働時間の減少ちゅうのが非常におおきな効果の一つだったんですけども、現実には糞尿処理の軽減だとか、飼料生産量の軽減だとかそういうのはわかるんですけど、それは大体お父さんの仕事でないかと思うんですけども、だからこの放牧酪農をやることによって一番苦労しているお母さんの労働時間はどうだったのかなっていうその変化がもしわかれば教えて欲しい。

A: 酪農家っていうのはご多忙にもれずやっぱりお母さんもね結構仕事があって、やっぱり搾乳とか餌やりそういうキツイ部分は男性陣はそうですけども女性のそういう労働もね同時にね解放されたっていうのがあるんですね。あのよく思い出さんですけども自分達があの一まあ一本当にね放牧やる前はまだ子供達小さい時代で運動会とか学芸会のときにねやっぱり、一回牛舎に帰って牛に餌をやってもう一回学芸会とか運動会見に行ったっていう覚えあるんですけども、だからそれを単純化することによってわざわざその牛舎にもう一回戻るとか、昼に仕事しなくても子供達とふれあひもてる持てたっていうのが持てるようになったっていうのがね、放牧酪農のまた一つの、こう普通の酪農と違う、違いなのかなっていうふうに思います。

生徒: そういう面ではお母さんも楽になったと、で家族の触れ合う時間が増えたと、そういう風に考えていいんですね。ありがとうございます。

Q: あの良くですね、一般的に出る質問としてですね、どのくらい農地があったら放牧はできるのかっていうのをよく聞かれるんですけども、これはまあ一先程一頭あたり30aとか50aっていうような佐藤さんのお話であったんですけども、最低どのくらいあればこの放牧は可能なのかっていうことを教えていただけませんか。

A: 一般的に言えば面積よりもむしろ草量ね。牧草生産が高い地域であれば、例えば札幌近郊であるとか、北海道内やっぱりあったかい地域であれば面積はあまり少なくても済むってことになるだろうし、天北とか別海とかね、足寄もやっぱり我々の住んでいるところは標高も高いし気温も低いからやっぱり牧草の生産量も低いからある程度の面積必要ですよ。ですから、面

積も必要だし、ある程度草量が確保できれば20aとかねそういう面積でも可能だと思うんですね、一頭当たりね。ですから、それは多い面積があればいいですけども、なけりゃー無いなりのまた放牧もできるのかなというふうに思います。

Q: それから、あのやっぱりその農地がですねやっぱり隣接しているっていうのが絶対的な条件ですね、もしそのつど離れてたらそれはどういう風に工夫したらいいんですかね？

A: えーやっぱりあの、交換分合とかねいろいろな形で行政とか農協が取り組んでおりますけれども、そんな形でやるも一つの方法ですし、例えば放牧酪農したよっていう人であれば、僕は昭和50年に移転したようにですね、移転するっていうのも一つの方法なんだよね。ですから人生なり仕事には転機ってのが訪れるしそういう選択肢も含めてね考える必要があるのかな。

Q: 僕も何回か足寄の放牧研究会の方に出させていたんですけども、男だけで話してるんじゃないかと奥さんが来てらっしゃるっていうことが随分違うような気がしてですね、満足感というのを我々調べさせてもらったら非常に満足感が高いという結果が他の牧場に比べてすごく高いという結果がでたんです。その満足感が高い理由っていうのはどんな風に佐藤さん思われてらっしゃいますでしょうか？

A: 自分達酪農家の父さんとしては、自分の奥さんが酪農家の妻でよかったよっていう風に言わせるのが、みょうりっていうか本当のあーやってよかったって、俺もやっぱり妻を幸せにしたよなーっていう風に思うときが一番の実感だと思うんだけど、そのためにはねやっぱり仕事ん中での喜びと仕事ん中での時間と家族がーこういう形態にして良かったっていう風な実感がね伴えばね、満足感ってえられると思うんだよね。だから、あの海外旅行も行けるよ、国内旅行も行けるよそして子供達も理解してくれるよ、そして何よりも夫婦が仲がいいよ、そしてグループ同士も結束が固いよ、そして行政も組織も応援してるよっていうような形がねできればね、自分達としては最高だし奥さんも納得してくれるのかなと思います。そんな風な方向に自分達のグループは今近づきつつあります。

Q: 改良草地をこういう追播の仕方でも永続性を持たしてうまく使ってこうっていうことなんですけども、これをもう一歩進めると野草だとか混雑林も使えないか

なっていうそう考えあるんですけどそこらはどうですかね？

A: そうですね、牧草って我々言ってるんですけども、牛の食べる草は雑草も食いますから、ですから牧草に限らないですよ。やっぱり食べる草は全部牛の栄養になりますよね。ですからそういうことを含めてある程度大雑把な形でもって酪農をとらえていかないとあんまり隅々まで完璧にしないでアバウトな考え方も必要なんだねこれね。

Q: 若干乳量は落とすでもいいっていう、で、所得があがればいいっていうことを考えれば使い方次第でそういう利用が可能だという考えですね。

A: 先程乳脂量とかね、乳タンパクとか様々あるんですけども、そういうものももうあまりとらわれすぎちゃうと最後には所得落ちてくるんだよね。経費をかけすぎちゃって所得が出ないっていう部分あるからやっぱり、対角的に見るっていうのかな、そこら辺がやっぱりグループでやってそれに気づいたっていうのが自分達の今の状況ですね。

Q: 冬場の牛の管理をちょっと教えていただければと思います。

A: 牛はですねあの、原則的にやっぱりあのーホルスタインは北方の生き物ですから寒さには強いんですよ。そして腹ん中で発酵してますよね、で発酵熱がでますから真冬でもねー20~25°Cある中でも餌さえたくさんね食べさせておけば、十分でそんなに体重減少もしません。ストレスも感じないで飼えることできるんですね。ですから、今結構立派な牛舎作ってますけれども、あまりにも北海道農業は施設投資して施設が立派なために経営が苦しくなってるっていう実態あるんで、やっぱりもう少し真剣に牛の身になって考えてみるとそれほど人間の思いでもってあの建物作っちゃうと、あとあと人間がまたそれで苦しむっていう現状もあります。なるべく自然の中で牛はたくましく育て欲しいっていうのが自分達の願いですね。

Q: 放牧酪農がいいところばかり強調されてますけども、放牧酪農の短所もあるんでないか思うんですけどもどんな風にお考えですか？

A: そうだねー、やっぱりんーまあどっちかあったらねやっぱりプラスのほうが多いんでマイナスのほうを探すのは大変なんだけど、世界中探しても放牧で所得があがればねこれ以上の方法ってないんだよねこれね。なんていっても自分達が欲しいのはお金でありね、

時間でありね、家族の満足でありね、そして達成感であるっていうのが、放牧できる条件があればなんかそれが達成されるんですね。ただ一つこれから乳価が下がった場合にはどういう風にその対処していったらいいのか、っていうようなことがこれからやっぱり課題としてでるであろう。ただそれは放牧酪農家に限ったものじゃないんですよ。大規模にやってる人もそう

いう部分の問題はでできます。

先生：あとなければおわりますけどもよろしいですか？

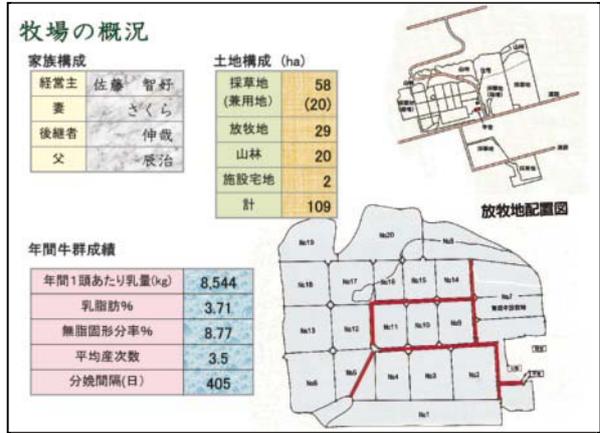
これ終わったあともですね佐藤さんがいてくださいますので、個人的にちょっと聞きたいことがあれば、聞いて下さい。それでは最後にお礼の拍手で終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

▶北海道足寄町

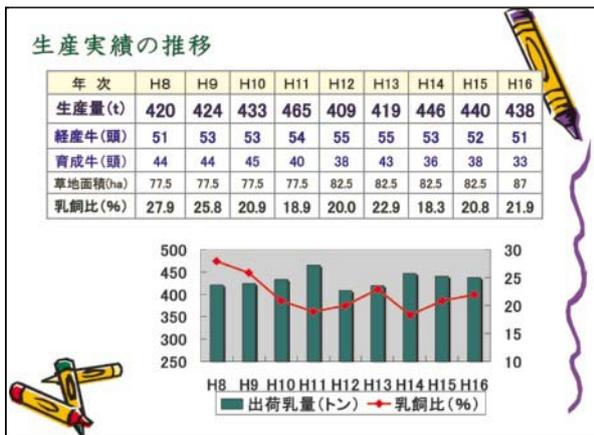
佐藤牧場



1



2



3



4

牧場の歴史および放牧導入に至る経緯

- ・ 入植 昭和21年 足寄町茂喜登牛
- ・ 移転 昭和50年 現在地
- ・ 77年に牛舎当施設規模拡大のため5000万円借金
- ・ 高泌乳、濃厚飼料多給型酪農を実践するが事故が多く、負債が減らず苦悩
- ・ 91年三友盛行氏に出会う～マイペース酪農の話を知る
- ・ 95年浜頓別町池田邦雄氏に出会う～集約放牧に出会う
- ・ 96年ニュージーランド視察～放牧への扉をくくった。
- ・ 96年早期の成功を期待して仲間を集め、放牧研究会設立
- ・ 97年放牧地の整備(電気牧柵・牧道・水槽)～昼夜放牧開始
- ・ 会員それぞれに合った放牧型酪農を目指し現在に至る
- ・ 2001年 後継者Uターン

5

放牧を取り入れて変わったこと

- ・ 介護酪農からの脱却～牛も人も健康になった
- ・ 経営収支の改善
- ・ 疾病減少・耐用年数延長
- ・ 飼料給与、牛舎清掃作業軽減～飼料給与4回/日→2回
- ・ 労働時間減少(飼料生産・牛舎管理)～日中の自由時間確保。
- ・ 糞尿処理量、時間の減少

6

放牧をする上で考えなければならぬこと

- 牛舎周りにある程度農地が集まっていること
- 餌の計算ができない～勤が大切
- 天候にされる(面積の余裕が必要)
- 11月～5月の範囲で分娩させれば効率的
- 牛ができることは牛にまかせる
- 牛の力を信じる
- 土づくりは永遠のテーマ



7



短草利用で放牧地を効率よく活かす

8



マメ科率の高い放牧草

9



シードマチック

草地の維持・改善



リローラー



サブリロー

10



採草は低水分ロールサイレージ主体

11



集約放牧に不可欠な電気牧柵

12



13



14



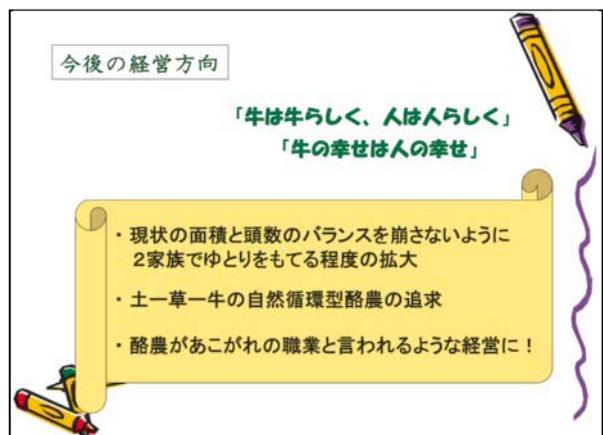
15



16



17



18

② 教育ファームについて

帯広市 酪農家
広瀬 文彦



皆さんこんにちは。今日は最後（夕方）の授業なのでだいぶ疲れていると思います。私はただの百姓です。皆さんの希望に合わない話でしたら自由に寝ていて構いません。ただ、興味がある人は、話の途中で色々質問されてもよろしいです。これから私が今まで取り組んできたことをお話したいと思います。

まず、私は帯広で酪農をしながら、ジェラートショップ「ウエモンズハート」を経営し、酪農教育ファームという取り組みをしている、広瀬文彦といます。

（私の曾祖父母の北海道への入植）

我が家は大正7年（今から80年以上前です）、岐阜県から今の十勝地方に移っております。その時、私のひいおじいさんおばあさんは47歳と42歳でした。当時は人生50年の時代ですから、結構高齢の夫婦が8人の子供を連れて、十勝に移ってきたのです。最初に女の子が3人できたので、北海道に移ってくる前に2人をむこう（本州）で嫁がせて、3番目の女の子と4番目以降の男の子をぞろぞろと、計8人の子供を連れて移ってきたそうです。北海道で暮らしている人間には、ほとんどが内地（本州）での生活を切り詰めて移ってきた方が多いと思います。北海道に移ってきたからといって、決して生活は楽にはならなかったようです。十勝管内で2度3度と転々と小作地を変えながら農業をやってきたわけなのですが、たまたま、私の曾祖父が教員の資格を持っていて、なかなか農業だけでは食っていけない中、新たに内地から開拓に入ってきた人達の子供を育てるために学校を作る、農協所を作る、そういう中で一応公務員という職を得たわけです。

（祖父母の時代）

10年、15年と経っていくと、（曾祖父母の）息子である私のおじいちゃんが（14歳で曾祖父母についてきたのですが）、20歳近くになって食べるだけは農業ができていた上、それプラス曾祖父の教員の給料があってお金が貯まりましたので、（北海道に来てたぶん14、

5年くらいの昭和の7～8年頃）中札内村に土地を買って自作農になりました。そして家も建てたそうです。しかし、それから数年経って（昭和13年）、おじいさんが結婚して子供ができて（私の父親です）、30歳になった頃です。十勝という地形を考えると、北に大雪山があって～西側に日高山脈があって～東側の方は釧路との境目にちょっと丘陵地帯がある、～十勝平野は帯広を中心に、気候は一番帯広あたりが良いのです。郡部に行くにしたがって、遅霜があったり早霜もあったり、そういう状況でした。中札内村は帯広から40kmも離れているわけですから、（おじいさんの話によれば）帯広に比べて半月遅く霜が降りる可能性がある村～秋は帯広より半月早くまた霜が降りる、作物は同じ十勝の中でも春と秋で1ヶ月違っていたのだそうです。いくら自作農になったからと言って、なかなかそこで営農を続けるのは大変だと考えたわけです。ひいおじいさんにしてみると、もう70歳近くだし、せっかく自作農になったのだから、そんな所（中札内村）に移りたくない。でも、その息子であるおじいさんは“これからはしっかりした農業をやらなければいけない”と考えて自作農になったのですが、それ（中札内村の土地）を人に貸して、（今は帯広市になっている）その地（現在地）へ小作として入り、そして現在に至っているのです。



(酪農をはじめた経緯)

酪農を今やっているわけなのですが、私の父親が終戦後（皆さんは終戦後と言ってもいつの話かわかりますか？ 私は第二次世界大戦が終わって6～7年後の昭和27年に生まれたのですが）、戦後北海道では有畜農業を推進するために道の貸与牛制度がありました。道が希望する農家に子牛を貸して、赤ちゃんが生まれると次の希望者に渡し、最初に生まれた雌牛は自分のものになる、というようなシステムで、うちも昭和23年に酪農を始めたそうです。1頭から始めて、今現在に至っているわけなのです。

(広瀬ファームの概況)

皆さんにお渡しした資料をめくっていただくと、現在の家族構成とか、経営の内容、私や家族の年齢が書いてあります。今、酪農は私と長男(25歳)（皆さんの先輩で、酪農学園の経済学科を卒業し1年間酪農実習をしてきました。そして今は家で仕事しています。そろそろ年頃なので早く嫁が欲しいなと僕は思うのですが、いたって本人はのんびりしています）と、今3年目になる実習生の3人でやっております。土地は帯広の街に近いこともあって、自作地は27～8ha位しかありません。その他に借地があり、36.9と書いてありますが、約45haの飼料畑としてデントコーンと牧草があります。飼養頭数はここ7～8年は経産牛100頭前後で推移していたのですが、16年に大きく減っています。なぜかという、去年2月に大雪で牛舎が潰れてしまいました。搾乳牛が100頭近くいたのですが、16頭がだめになってしまって、ちょうど折しも若牛の値段がすごく高い時期だったので、買って増やすことはしませんでした。そういうわけで、15年度からみると50頭以上減ってしまい、所得も大きく落ちて……、そういう経営となっています。

(十勝農楽校～酪農教育ファーム)

次のページの「十勝農楽校」……、私が帯広農業高校を卒業しているものですから、昔は「十勝農学校」「勝農」（かちのう）なんてよく言ったものです。特に勝農を愛しているとか愛校精神というわけではなく、自分はこの学校を出たんだ～そんな意味（で同じ呼び方にしたわけ）なのです。まあ、楽しんでもらって、農業を知ってもらいたいな、そんな意味で、教育ファームを「十勝農楽校」と名づけて受け入れているのです。

平成3年からずっと続けております。当初はミルクイングパーラーの2階に見学室を併設しました。当時の大工さんには「人の仕事が見えるような形で作ったって誰がそんな見に来るんだ？ そんな奴いねえよ」なんてよく言われたのですが、自分自身も全然、誰かが来てくれるなんて思ってもみなかったのです。ですが、見学者は除々に増えて、平成12年以降～酪農教育ファームという言葉が皆さんの口に上るようになってからは、なおいっそう増えてきたことが数字に現れております。様々なグループが来てくれます。教育ファームというとか何か子供達だとか学生に教えなければいけないのかな、そういう風を感じるわけなのですが、そうじゃなくて、消費者のグループも相当あるのです。昨年変わったところでは長野県警の警察学校の生徒さんたちが体験に来てくれました。何を勉強しにきたのかな？と僕は思うのですが、ただ搾乳体験をやりたい、アイスクリーム作り体験、そして私の酪農の話聞いてみたい、ということで来てくれました。盲学校や聾学校だとか、そういう子供達も体験に来てくれたり、様々なニーズがあるわけです。見学は5月から9月あるいは10月くらいまでに集中します。もう農作業もすごく忙しい（北海道は半年間雪に埋もれちゃいますから）、そういう時期に集中するということもありまして、本当に大変なことも多々あります。そういうわけですが、まあ、好き好んでやっているというわけです。

(ジェラートショップウエモンズハート～その名の由来)

次の3ページ目に「ジェラートショップウエモンズハート」とあります。「ウエモンズハート」とはどういう意味か？ 英語でこんな言葉があるのか？と聞かれます。うちの先祖（ひいおじいさん）は広瀬初次郎といいますが、その親までずっと8代～約300年にわたって「うえもん」という名を名乗ってきたのです。その「うえもん」の名をいただいて「ウエモンズハート」としました。なぜこの「ウエモンズハート」が思いついたかという、我々は若い頃フォークソングとかエレキギター、そういったグループサウンズがよく流行ったのです。その中であの「コンドルは飛んでいく」とか「明日にける橋」を歌っていたアメリカのサイモンとガーファンクルがありました。たまたまその歌を聞いていた時に、サイモンとウエモンって、よ

く似ているなど、ピンときたのです。そこで先祖の名前をいただいて「うえもんの心」としました。漢字でもアルファベットでも何だかださるので、カタカナで「ウエモンズハート」としたところがミソなのです。「これはどういう意味なんだ？」と、学のある人ほど一生懸命辞書で調べるのです。お年寄りには「名前だろうな」とよく言ってくれるのですけど。

(ジェラートショップウエモンズハートの概況)

ウエモンズハートは平成11年4月30日にオープンしました。大して手持ちのお金がないのに約4,400万円投資しました。建物・機械・その他とありますが、その他は開業資金です。例えばテーブルとか小物とか色々な物を入れて約4,400万円かかりました。どうやってお金を調達したかということ、自己資金はわずか700万円ですが、機械のリースで1,700万円、そして農協から土地を担保に2,000万円借りて、そして何とかスタートしました。ジェラートは首都圏では300円くらいで売っているのですが、この田舎で300円というと、そんなに高いお菓子もなかなか無いので、250円に値段を設定しました。損益分岐点というものがありまして、大体1日200個〜5万円の売上……、借金を返す・リース代金を払う・それから人件費・電気水道料金などを含めて1日5万円の売上がないと経営していけない、そういう計算が成り立つわけです。まあ3年ぐらいは赤字でも仕方ないかな、と思いながら始めたのですが、ここに書いてある通り、初年度(4月30日からですので約8ヶ月間の営業です)から黒字にさせていただきました。そして今現在の16年度は初年度の2倍以上に売上が伸びております。こんなかたちで始めた時はひょっとするとこれでうちの酪農は終わりかな、と思いながらスタートしたのですが、おかげさまで家内が商売のやり方にすごく才能がありまして、私はたまにちょっと顔を出しては「どうだ、お客さん来てるか？」という程度なのです。

自分の農業高校時代には8桁農業を目指そう、という先生のお話がありました。8桁農業とは1,000万円を売り上げる農家になりたい、それを目指そうというスローガンがあったわけなのです。酪農とアイスクリームを合わせて、今我が家は9桁農業になっています。ただ、問題はいくら残っているかということで、先ほどお話しましたように、去年牛舎が潰れて酪農の方は大赤字でした。そのあたりはアイスクリームの方

で補綴していただいて何とか年が越せたかな、そんなような経営をしております。

(私の半生〜幼少時代)

酪農教育ファーム、これはきつと目新しい言葉ではないかと思いますが、少しずつ学校の先生方に理解されています。この教育ファームについて今日はお話したいと思います。なぜ教育ファームなの？というところから始まるのですが、その下に「私の半生」を書いてあります。実は私、子供の頃はすごく「いい子」でした。頭がいいとか顔がいいのではなく、家の手伝いをよくする「いい子」だったのです。当時(僕は昭和27年生まれですから第二次世界大戦直後)は、まだまだ農業は馬でやっている時代でした。本当にことわざにある通り、猫の手も借りたい、というような農作業をやっていたわけです。男の子が生まれたら、それはもうすごく家族は喜んで「稼ぎ手が増えた」と。そんな形で畑の作業〜種を播く・草をとる・そんなことを小学校の小さいうちから手伝っていました。それから当時、燃料は薪だとか石炭を焚いていました。薪などは買ってくるわけにいかないわけで、それは自分達で切って・割って、家の壁や軒下に積んでおく、そういう作業もありました。それから水も……、うちは帯広市西23条という場所でありながら6歳位になるまで電気が通っていなかったのです。ですから水道なんてありませんし、地下水を汲み上げるポンプも無いわけですから、水を汲む、あるいは子牛に水をやる、そのような、ともかくありとあらゆる仕事があったわけです。“手伝うのが当たり前”という時代でした。じゃあ率先して手伝ったのか？ということ、そうではなくて、言われたからきつとやってたんだろうな……、と今思うわけです。

(私の半生〜中学校時代)

中学校位になれば1人前なので、例えば秋に脱穀した60kgの俵を地面からしょって馬車に積んで、そして運んで行かなければいけないと言われるのです。あるいは、牛屋の息子なんだから、搾乳中の搾りくらいできなければだめだ、と。そこで朝、学校へ行く前に1頭の牛を預けられて手搾りして、それから学校へ行くようなこともありました。ともかくその家の手伝いが優先なわけです。中学校に入ってクラブもやりたいなあ、プラスバンドなんか見ていると、楽器が吹けて

いいなあ、先生に聞くと、土日によく練習するよ、放課後ももちろんやるし……、それじゃあ家の手伝いがあるから、クラブはあきらめよう、と思ったわけです。とにかく学校が毎日あればいいな、土日なんかなくてもいいな、毎日学校があつて毎日好きな事ができたらなあ、などとよく思っていたのです。そんな意味では消極的にたぶん「いい子」だったのでしょう。中学校3年生になり、いよいよ自分で進路を決めなければいけない時代になってくると、そこでもやはり「いい子」の本領発揮です。ある時親父に「俺、帯広農業高校行こうかなあ」と言ったんです。そしたら親父は「それいいなあ、おう、そうすれ、そうすれ！」。もうそれで決まってしまったのです。でも、自分の気持ちの中では、まだ14歳の子供に進路を決定付けられるなんて思っていなかった。「まだまだ若いからね、おまえ、好きな学校選んで、好きなことやってから、まあ酪農でも選べ」とでも言ってくれるのかなと期待して、甘い考えで「農高行こうかなあ」といい子ぶって言ったから、「そうだな」なんて言われて、決まってしまうと農業高校に行ったのです。

(私の半生～高校から短大時代)

農業高校は1年生の時は全寮制で、1週間おきに農場の仕事、それから寮の掃除とか牛舎の仕事・豚の仕事・鶏の仕事、そんな感じで、1週おきに朝と夕方、早く起きて仕事がある実習場の生活でした。その中で、先輩が学校に尋ねてきてくれて、海外で酪農実習をしてきたお話をしてくれたのです。その頃の昭和41～42年は東京オリンピックが終わったばかりで、まだまだ我々庶民が海外に出て行こうだなんて、ちょっと考えられない時代でした。でも酪農やると海外に行けるんだ、そんな風に思いまして、これは絶対もう海外に行きたいな、海外に行くにはどうしたらいいんだ？ 当時は、ブリーダーと呼ばれる酪農家へ実習に行き、そこで2年3年実習して認められると、アメリカとかカナダのそういう酪農家に派遣してもらえることができました。そうやってアメリカに行けるのなら実習に行かなきゃ。そんな感じで何か1つ自分の目標ができたと思い、一生懸命勉強しました。そして、高校が終わってこちらの当時2コースという冬だけの短大に来たわけなのですが、夏の間、千歳市の（当時は早来）牧場に実習に入りました。そして、1年2年と実習して海外に行くつもりだったのですが、結局、家の方が大変

だから「もうよその実習はいいから、家に戻って来い」と……。まあ親父にそう言われても、まだ18、19歳ですから、まだまだ人生そんなに慌てる事ない、いつでも行ける、と思いつつ家に戻ったのです。

(実家に戻ってから)

海外に行きたい、という想いは募るわけなのですが、若い稼ぎ手が家に入ってくると、そういう歯車を親はもう外したくないのです。結局、経営の柱の歯車の中にどんどん取り込まれて、何か……日々あがくのですけれども、結局何ともしようがない……。そこでついに私は「いい子」をやめて「悪い子」になったのです。どう悪い子になったかと言ったら、ただふてくされていただけなのですが、とにかく家では仕事はしよう、でも夜は家にいたくない。当時はシャワーとかありませんから、水で顔をばーっと牛舎が終わったら洗って、毎晩のように出て行く。悪い友達がいたものですから、毎晩誘われるし、毎晩出て行く。まああの頃はお金が無くても結構飲めたなど、今思うのですが、そんな感じで3年4年と夜遊びばかりでした。家に帰ってまじめに仕事をしているとは言うのですが、昼間トラクターに乗って畑に行けば、(眠くて)トラクターが崖から落ちそうになったりするものだから、トラクターの上で昼寝したりなんかして……。ある時帰りが遅いから、親父が飛んで来て「なんだお前トラクターの上で寝ているのか」と。まあ、本当に心配したような親父の顔は初めて見たなと思ったのですが、それくらいふてくされた時期を送っていました。

(女房との出会い～結婚)

そんな時に今の女房と出会ったのです。大勢の彼女に振られ、5人6人と振られっぱなしだったのですが、歩止まりは悪かったけれども、最後にいいクジ引いたわけです。22歳の時に会って、少しずつ付き会いを始めるようになって、彼女が洋裁学校に通って、教師になった頃に、色んなことに興味をもってくれました。牛の話をするとき「えっ？ 牛って赤ちゃん生まれなきゃ乳出ないんだ！ 乳牛って成長しておっぱい大きくなれば、お乳出すのかなと思ってたよ」とか、家へ遊びに来てなすびなんか見ると、「へえー、なすびって、花から何から全部紫なんだ」……こっちにしてみたらそんな事は当たり前だろう、そんなことにも感動してくれて……。あるいは当時すいかも作ってしまって、

黄色い大きい花が咲いて受粉すると小さな実ができますが、それを見て「すいか、こんなちっちゃいうちから一人前に縞があるんだなあ」……ともかく、わけわからんでもすごく楽しんでくれているわけです。自分は子供の頃からずっと手伝っていますから、何でも分かっているので、本当にこいつは分からん奴だな、みたいな感じで色々教えてあげました。ある春に、雪解けでその周りが乾いた時に、防風林の下から小さいプチプチした丸いどげの卵みたいなのを拾ってきたのです……手に載せて。それ、ウサギの糞だったんですよ。おまえはどういう子じゃ！ そんな感じで見ていたわけです。そんな彼女と2年3年と交際して、ようやく26歳の時に結婚の運びになりました。

(小豆が与えてくれた感動)

結婚当時はまだ小豆を作っていたので、あずきの草とりに家内と母親が行きました。私はそういう仕事が嫌ですから、トラクターに乗る仕事ばかりやっていたのです。ある時家内が帰って来て「小豆ってすごいね」と突然言うのです。「何がすごいんだ？」と聞いたら、我々の畑はちょうど南北の方向に植付けをするわけで、小豆は種を蒔いて双葉が出て本葉がでてくる、そういう時に雑草に負けられないよう草とりするのですが、朝行ったら小豆が一生懸命葉っぱを広げて、東に傾いているのです。そして昼間はもちろんまっすぐになっているし、午後・夕方になると、西へ傾いているのです。自分は子供の頃から手伝っていたのですが、そんなの見た覚えがないのです。まさかひまわりじゃあるまいし「お前、何言ってるんだ、小豆がそんな馬鹿な話ないべ！」と言ったら女房に「ウソだと思うなら明日きて草とってごらんよ」とひっぱられて、小豆の草とりに行きました。すると、見たら本当に感動しましたね。小豆は本当に朝、一生懸命東にと傾いているんです。夕方になると本当に西に傾いているのです。本当にその時は何かガンと自分の甘えを殴られたような、そんな感じがしました。今までは一生懸命やってきたつもりだったけれども、結局何も見てなかったのですね。そんなことに気がついて、そして、ぐれたのも止まりまして、普通の子に戻ったわけなのです。

(教育ファームをはじめたきっかけ～東京の小学生)

いよいよ教育ファームの元になる話になるのです

が、結婚して1年目くらいの時に東京のある6年生の男の子から電話があったのです。「牛乳についてちょっと聞きたい」と言うから、「いいですよ」と話をしたら、「コーヒー牛乳って、牛にコーヒーを飲ませたら出るのですか？」と聞くのです。「えっ！」と思ったのですよ、何をこの子言っているのかな、と。「何でうちが牧場だって分かったの？」と聞いたら、東京都内の学校の授業で農業とか酪農の勉強をしていたら、子供たちの仲間で「コーヒー牛乳ってどうやって作るのだろう？」という話になったのです。その中の誰も家で酪農をやっているわけではないですから、その経緯がわかりません。そこで先生が「牛屋さんに聞いてみよう」と、たまたま帯広市役所の電話番号を調べて、クラス代表の子に教えて電話をかけてきたらしいです。市役所に電話したら「それは農協に聞いてくれ」と農協の電話番号を教えてくれたそうです。農協にかけてみたら「それは牛屋さんに聞いてくれ」というわけでうちにかけてきたそうなのです。本当に知らないのだなと思い、「じゃあ君は、赤ちゃんの頃お母さんのおっぱい飲んで育ったよね？」と聞くと、その子は「いや覚えてない。でも弟が飲んでいるのを見たことがある」と言うので、「君のお母さん、コーヒー飲んだらコーヒー味のおっぱい出るかな？」と聞くと、「出ないと思う」と答えたのです。「じゃあ、牛がコーヒー飲んだら、コーヒー味の牛乳出るのかなあ？」と聞いたら、「分からない」と言うのです。お母さんからはコーヒー味のおっぱいは出ないことがちゃんとわかっているのに、牛では分からないのです。何で分からないのかなと考えつつ、待てよ！ と思い「牛乳って何か分かる？」と聞いたら、「よく分からない」と言うのです。「結局、人間も哺乳類というくくりの中で考えれば、子育てのために出すお乳、これが牛乳とか母乳と言われるものなんだよ」と教えました。そこで初めて、コーヒー飲んでもコーヒー牛乳は出ないことが理解できたみたいです。

(教育ファームをはじめたきっかけ～地元の人たちの知識)

家族の中では「いやいや東京の子供っていうのはほとんどないことを言うんだな」と笑い話になっていたのですが、結婚して子供が出来て、子供がだんだん成長してくると、PTAの集まりがあるのです。PTAの集まりで、うちの家内がさっきしたような話ですが、十勝という農業地帯にある中核都市の帯広の住人であ

りながら、乳牛は大きくなったらお乳を出す～赤ちゃんを産むのとは関係ない、と思っている人が結構いるのです。また、自己紹介で「酪農をやっています」と言うと、みんな異口同音に初めて会えば「いやいや大変な仕事をやっていますね」とねぎらってくれるのです。自分でも大変だと思ったから最初は気にならなかったのですが、何が大変だと思うか？聞いてみると、「朝早くて休みがなくて」と言ってくれます。でもそんなことは毎日やっていて慣れているし、それだけの話じゃないのです。乳を出すために赤ちゃんを産まないといけなく、ということも知らない。ただ朝早く休みがなくて大変だ～そういう裏にある仕事を全く理解していないわけです。ある時保育園の父母会の集まりで、親子レクをやろうという話になりまして、一番下の子が年長だった時で、新しい保育園なのでまだグランドも整備されなかったのです。どこでやろうという話になった時に、あるお母さんが、そこの街外れのちょっと行った所に「いい原っぱがある」と言うのです。よくよく聞いてみたらうちの牧草畑なんですよ。「あれは牧草畑だしまだ草刈ってないからちょっと無理だな」と話したら、「牧草畑って何？へえー、ただの原っぱじゃないんだ」と言うのです。あるいはもっとひどいのは、青年会議所に僕なんかが入ってた時があるのですが、街場の色々な商売をやっている経営者の人たちには、牛乳に対する補助金や補助金のことを、例えば農作物が取れないとか、そういうことに対して、国が生活補助をしていると思っている人が結構いるのですよ。全く農業に理解がない。これがまだ東京とか本場に都会の人なら、まあ仕方ないかなと思うのですが、とにかく帯広という立地条件で社会的に色々活躍している経営者達がそんなことを言う。本当に消費者は農業のこと全く知らないのだな、と気がついたわけです。ちょうど時代が昭和から平成に変わる頃、昭和60年半ばぐらいです。

(教育ファームをはじめたきっかけ～農業者が伝えるべきこと)

その頃から農業新聞や何かを見ていると、たとえば食料自給率の問題とか環境問題、あるいは人口爆発とか異常気象、そんな話がどんどん報道されるようになってきました。あんまりそういうことって、自分自身興味は無かったのですが、たまたま農業新聞の中で、アメリカにあるワールドウォッチ研究所の所長をや

っていたデスターブラウンという人が地球白書を出しているのを買って読んだことがあるのです。その中で昔のイギリスの経済学者のマルサスという人が人口論の中で、人は幾何級数的に増える、どんどんすごい勢いで増えていく、でも食料生産はそんなすごい勢いで増えていけないから、最終的には人口の増加に食料の増産は追いつかない、ということを書いていました。そういう話を聞きながら、本を読みながら色々調べて、人口はどういう風に増えてきたかを調べたら、キリストが生まれた西暦の始まりでおよそ1億人、それから1,000年経って2億人くらいになり、ちょうど江戸時代末期の1800年代の頃には10億人くらいになった、そして第二次世界大戦が終わった頃には25億人、そのあとは皆さん記憶にあると思いますが、21世紀になる頃2000年にはとうとう60億人を越したと言われていました。そして現在63～64億。2025年には79億人、2050年には93億人になっている、こんなような予測がされております。どうして第二次大戦後に人がどんどん増えたかという、衛生指導の普及だとか、一番大きいのは抗生物質が一般庶民にもどんどん使えるようになった、そんなことで人が増えてきたということのようです。また、食料の自給を考えると、本来的には、例えば自分の子供が今日肉食べたい、と言ったら、お父さんお母さんは弓矢を構えてキツネを獲りに行くか、熊を獲りに行くか、そういうものを獲ってこなければ肉は食べられないわけです。あるいは魚を食べたいと言ったら釣りに行かなければならないのです。とにかくそうやって、狩猟とか採取をするのが基本でした。そうやって駆けずり回って集めて来るから、日本語では“ごちそう”という言葉が生まれたようですが、そういう時代があり、生き物や食べ物がとれないだとか、そういう時代があって種畜、家畜の飼育とか作物の栽培が始まってきたわけで、これが農業の始まりです。またある人に言わせると、環境破壊の一番の始まりは農業から……と言われてちょっと愕然としたことがあるのですが、これも第二次大戦後の化学肥料だとか農薬とかそういうものをどんどん上手く使えるようになって、農作物もすごくたくさん取れるようになったわけです。人口爆発と言われますが、人口は農業と一緒に伸びてきました。我々には毎日食料が口に入るので、その反面、発展途上国では何億という人が、食料が全くあたらない、あるいは日々飢えたような形で暮らしているという話もあります。今現在の穀物の

生産量は地球上で19億tから20億tと言われていますが、もうそれぐらいが限度ではないかとも言われています。その中で、我々日本を含めて、世界の主要国の食料の自給率はどうなっているのか？を調べると、1970年・昭和45年と、2000年頃の対比ですが、約30年の間にアメリカが113%から132%になり、カナダが110%から152%に伸ばし、オーストラリアは205%から287%に、ドイツも68%から97%、フランスも105%から139%、イギリスは46%から77%、一方、日本だけが60%から41%に落ちているわけです。つまり高度経済成長と反比例するように自給率はどんどん落ちていったのです。自由貿易だとかWTOそれからグローバルスタンダードといった言葉のもとで、何かアメリカの戦略に振り回されているのではないかと感じます。では、我々が食料を頼っている国はどうかというと、アメリカは地下水の汲み上げ過ぎで地下水位がどんどん下がって何年も農業をやれない地域が出ている、あるいは塩害の問題など、我々が頼っている食料の生産国にも障害が起きているという現状もあります。そんなことを色々聞いていくと、十勝・北海道は農業を生産して自給率何%であるとか、十勝は本当に日本の食料庫だと、我々十勝の人間は自負しているのですが、でもそこに生活している人達は、そういうことをまったく考えないで生活しているし、24時間好きな時に好きなものを食べられる中で生活しているので、身近に感じろといっても無理があります。このことを我々の側から伝えていかなければならない、そう思い（教育ファームを）始めたのです。

ある仲間が子供達に話していたのですが、「君達にとって一番大切な宝物って何だ？」と問いかけていました。皆さんは人に譲れない絶対大切な宝物ってなんだと思いますか？ ガールフレンドとかそういうのではないですよ。命なのです。命だけは絶対に人に譲れないのです。あの人かわいそうだから、私の命あげるわ、なんてわけにはいかないし、命というのは両親からいただいています。両親もまたその親からいただいているわけです。何代にも渡ってこの命をつないで、この命を続けていくにはどうしたらいいのか？ 他の命をいただかなければならないのです。それは動物の命でもあるし農作物という植物の命でもあります。その命とは、我々が代々受け継いでいると同じように、一朝一夕にできるものではないのです。種を蒔いて、作物であれば3ヶ月4ヶ月、ケアして育てて初めて食

べられるのです。食料というのは自分達の口に入るまでに時間がかかる、我々生産者はただ作って農協やホクレンに売ればいだけじゃなく、そういうことも伝えながら、本当にこの自給率でいいのか？ 自分達の食に対してもっと考えることがあるのか？ あるいは現場から伝えていかなければならないのでは？と、だんだん思うようになりまして、見学できるミルクングパーラーをつくったわけです。先ほど話したように、大工さんに笑われましたけれども、本当に大勢の人に来ていただけるようになりました。

ここで、グリーンアグリチャンネルという所で作ってくれたビデオがありますので、10~15分見ていただいて、続きをお話したいと思います。

(ビデオ放映)

帯広市内の酪農家から、夏の間、放牧のために牛を預かる、八千代公共育成牧場。ここに預けられた牛達も、山を降りて里帰りする時期になりました。夏の間、たつぷりと牧草を食べて過ごした牛達を引き取りに、酪農家の人たちがやってきています。帯広市内で酪農を営む、広瀬さんも、そんな中の一人です。今日は広瀬さんの牧場で働く、酪農実習生の布瀬川さんと一緒に、夏に預けた10頭の牛達を連れて帰ります。これから向かう、広瀬さんの牧場には誰でも気軽に酪農家の仕事を見学できる、ちょっとしたアイデアが隠されているのです。今日はそのアイデアを探りに、広瀬牧場に伺います。

帯広市の中でも、市街地に近い場所にある、広瀬牧場。平成3年に牛舎をフリーストールにして、新しく建てたミルクングパーラーには風見鶏ならぬ、風見牛がついています。現在、広瀬牧場ではおよそ150頭の乳牛を飼育し、年間、およそ850tの生乳を出荷しています。一時期、乳房炎の多発などに悩まされましたが、今では軌道に乗り、年々生産量も上がっています。ここは広瀬さんご自慢の搾乳室。パラレルと呼ばれるこの搾乳方式は牛のお尻の方から搾乳機を取り付けます。搾乳機の取り外しも自動。一度に16頭の搾乳が出来て、作業の能率も抜群です。奥さんが心臓の病気を患って、牛舎での作業が難しくなった事も設置の理由の一つと広瀬さんは言います。そして、このミルクングパーラー最大の特徴は2階の見学室から牛の動きや搾乳の様子をじっくりと見る事が出来るところにあるのです。

広瀬さんはなぜ、搾乳室を見学できるようにしようと思ったのでしょうか。「うちの長男坊が小学校に上がった頃に、女房がPTAの集まりに行き、その中で牧場の話が出て、乳牛はただ餌を食べていれば、年頃になったらおっぱいが大きくなって、餌を食べてれば乳が出るようになるんだよ、という感覚の意見が多くて、お産とかそんなことは関係なしに。そういう部分というのは全然消費者に分かってもらってないというか、その辺を知ってもらいたいというのが一番のスタートですね」。「他の人達も、農業を知らない人達に分かってもらえたらいいなと常々思っていました。で、私自身も農家っていうものを知らなかったんで、お嫁に来てすごく面白かったんですね。面白かったって、今も面白いんですけども、その、面白かった事が、他の人にすごく分かってもらいたいという気があったので」。「まあ、興味があれば、来て欲しいなっていう事ですよ。現実には最初建てた時は、親父も賛成してくれましたし、女房も面白いからやってみようよと、一緒になって楽しんでくれたから、こういう形になった。その次誰々に見に来てもらおうとかね、こう言う人に来てもらいたいという、そういうものは漠然としてるんだけど、何も無かったんですね。それがここ2～3年も、1,500～1,600人で、小学生を中心としてですね、すごい数で集まってきてくれます。目的は少しは達成されたかなという感じです」。広瀬さんのミルクパーラーを一目見ようと、搾乳時間以外でもお客さん達がやってきています。今日は都市農村交流の勉強をしている、農家の方々がやってきました。奥さんとファームインを学びに、フランスに行った経験のある広瀬さん。いずれは、ファームインにも取り組んでみたいと考えています。「ファームインとか、その辺にも興味はあるんですけども、なかなか行動力もありませんし、今後、自分の考えとしては、まず一つの酪農的経営を作って、その上で、出来れば学校とか、そういう事をやって、一つ軌道に乗れば、その次のステップとして……、自分ではそういう風に思っています」。ファームインや消費者との交流について、広瀬さんはどんな考えをもっているのでしょうか。「本当に、我々は消費者あつての農家ですから、やっぱり理解してもらおう、これが第一ですよ。そしてまた、興味をもっただけであれば、焼肉でもしながら1時間でも2時間でも話しようよとか、そういう事からホームステイとかファームインとかそういうのをやってみようか

な、という、感覚ですよ」。

広瀬牧場では、昔から数多くの酪農実習生を受け入れています。去年の5月から広瀬さんの牧場で働いているFさんもそんな中の一人です。北海道の自然や農業に憧れて、遠く、埼玉県からやってきました。広瀬さんをパパさんと呼ぶ彼女は、広瀬さんの事をどのように思っているのでしょうか。「自分の仕事に誇りをもってやっているというか、すごい好きな事を……、あ、たぶん好きだと思うんですけど、酪農が。それを仕事にして成功された方だからすごく憧れますね。私も今もまだ分からないんですけど、自分で好きな事を見つけて、それをずっと続けていきたいって思って、だから何にそうやって情熱を傾けたいかを今探している段階だから、パパさんはそれを酪農に向けて頑張っている姿がすごく羨ましいと思います」。「夢を追ってきて、ほんと、一週間や十日でね、やっぱこれじゃないって思って帰っちゃう人もいたけど、やっぱり、やる気があってくれて、本当に一生懸命やってくれるし、労働力が足りない家としては、そう言う意味ではすごく助かるし、なおかつ、農業に希望を持ってくれるという事が嬉しいですね。やっぱり我が家に彼女みたいな子がいてね、彼女をお嫁にもらえると幸せになれるのかなあ」。

(酪農教育ファームの実践)

(ビデオは)もう少しあるのですが、授業の終る時間までに私の言いたいことが言えなかったら困るので、止めてもらったわけですが、このFさんという今の子は、実は酪農家には嫁いでいません。搾乳に若い子がいっぱい写っていましたが、帯広畜産大学から学生のアルバイトに来てくれていたのです。そこの一人と結婚して今アメリカかどこかにいます。研究者になってその人とくっついて、向こうに行きました。幸せな酪農家はできなかったようですね。

・段取八分

次に酪農教育ファームの実践についてです。まずは「段取八分」です。この八分とは何割何分の分です。要するに教育ファームには色んなニーズがあり、小学校の最前線であったり、盲学校であったり、社会人であったり、こちらに来て何をしたいのか？ 何を見たいのか？ 何を聞きたいのか？ その事前の打ち合わせをしっかりとやって準備をすれば、だいたい成功します。全く打ち合わせもなしに、「広瀬さんは随分慣れている

から、好きなようにやってください」という受け入れをしても、子供達があっちを向いたりこっちを向いたり、全然教育ファームという感覚にならないのです。先生やグループのリーダーがしっかり内容をこちらに伝えていただけると、スムーズな教育ファームができる……、長くやっているという風に感じます。そういう意味で、事前の打ち合わせ、いわゆる「段取り八分」とは、段取りが上手くいけば話も上手くいきますよ、ということです。

・魚屋さん八百屋さん牛屋さん

次に「魚屋さん八百屋さん牛屋さん」です。話の導入で一方的にどんどん話してもなかなか面白くないのです。例えばクイズで「魚屋さんは何を売っているの？」～「魚」、「八百屋さんは何を売っているの？」～「……それは野菜だよ」、「牛屋さんは何を売っているの？」～「牛」……そしたら「ブー！」と言ってやるのです。「牛屋さんが牛を売っちゃったら乳を搾れないんだよな」と言いながら。最初に子供達をこっちに向ける作業が上手くいかないと、何か最後までグラグラと時間を過ぎちゃう、そういう事がありますので、何かこっちを向いてくれるような方法で、とにかくスタートした方がいいなといつも思ってます。

・なんでも博士・何でもチャンピオン

それから「なんでも博士・何でもチャンピオン」です。例えば搾乳体験や何かで特に上手な子がいるんです、素人でも……。そこで「君はもう搾乳チャンピオンだな」と誉めてやるのです。あるいは食糧問題とか人口の話……、例えば小学校5年生位なら「今地球上に人口どのくらいいる？」などと聞くと、中には一人くらい「今、60億」と答える子がいるんです。そこで「君はすごい博士だなあ」と誉めてやると、一人誉めるとみんな集中してくる～「俺も知ってること言ってくれないかな」みたいな感じでね。結構おだてるのも大事なのだと思っいつもやっています。

・五感の活用

それから「五感の活用」もあります。どうしても牛屋をやっていると、糞尿だとかその、臭いがやっぱりしますよね。自分は全然臭いしなくて子供達に聞いてみれば「臭いな」と言うし、雨上がりの後で天気が良くなると、自分はいつも本当に臭いなあ、なんて思うことが多々あります。ある時、ある市内の小学校の3年生が来ました。バスから一人ずつ降りるたびに「ああ臭い」「ああ臭い」と全員が「臭い」「臭い」

なんですよ。それまでは「いやーやっぱり臭いのかなあ」といつもこう凹んだ気持ちになっていたんですよ。でもその時はちょっと私もムツときまして、みんな勢ぞろいした時に「臭いか？」と聞いたのです。すると「臭い、臭い」の大合唱です。「どんな臭いする？」と聞くと、みんな「うんこ臭い」「しょん便臭い」と言うんです。でもその臭いかなと思ったら「何かすっぱい臭いする」「何か納豆みたい」だとか「いい臭い」と言う子もいるんですね。「ああ、牛屋の臭いというのは糞尿の臭いとそれから餌の臭いなんだ」、サイレージなんですね。それが分かってからは、「ふん尿はただ臭いだけでなく、有機肥料になるんだよ」と説明します。「君達のウンコはどこへ行くの？ トイレ行ってウンチしたらお尻拭けるか？」～「拭けるよー」、「拭いたその後どうする？」～水に流して終わりですね。その後どこへ行くのかは全然分かっていないのです。そこで、君達のウンコは下水道という所を流れて行って最後には終末処理場で処理してくれるんだって。例えばその学校が帯広小学校と言うのだったらね、「帯広小学校の方から流れてきたウンチ、今日は臭えなあー」と言って処理している人がいるんだよ。～そんな話をします。それからすっぱい臭い～サイレージというのは乳酸発酵ですから、皆に「ヨーグルト好きか？」と聞くのです。そして「ヨーグルトはお腹にいいよな。乳酸菌で発酵してるから」。そんな話をしながら、でも、牛の餌も実は乳酸発酵なんだよ。原料が違うから皆にとってはね、すごく違和感あって臭いかも分からないけれど、牛にとっては最高の好物なんだよ。そしたら「おじさん臭くないの？」と聞いてくるので、「おじさんここで40年、50年もやってるから全然慣れちゃって牛と同じなんだよ」、そんな話もするわけです。そういう糞尿の大切さ、有機肥料などの大切さ、それから餌の話もする、そして子供たち全員が「臭い、臭い」と言ってたことがほんの一部になるのです。その中で「あー慣れた」と強がり言う子もいれば、それでもやっぱり臭い臭いという子もいます。ぞろぞろと歩きながら、隣の子が「臭い臭い」というと、その反対側の子が「失礼だろう」とも言うのです。そうやって子供達を眺めていると、何かその……後ろにある家庭が見えてきて楽しいです。臭いもただ臭いだけで終らせるのではなく説明をするわけです。

・子供を静かにさせる技

それからもうひとつ面白い話があるのです。子供達

がなかなか言う事を聞かない、ざわざわしていることもあります。ある時、あんまりうるさいものだから、「ちょっとみんな目をつぶってくれ」～「何で何で？」～「いいからちょっと、1分でいいから目をつぶれ」。目をつぶると会話がなくなりますね。そして目をつぶった中で、「今皆の目の前に牛がたくさんいたよな。牛は何か喋ってるかな？」と聞きます。その上で「牛は全然喋らないのです。お腹がすいたとかお乳が張ったとかね、そういう時にしか鳴かない。本当に必要な時にしか鳴かないです。実は、牛はおしゃべりじゃない、必要なことしか言わないんだね。君達もこの間ちょっと我慢して必要な事だけしゃべろう」と言うとき5分ぐらいいはもつのです。まあ、それ以上になるとまたうるさくなるのですが。でもそうやって、牛は無駄口をたたかない、あるいは、我々が逆に牛を観察することで酪農という仕事は成り立っているのです。本当に言葉で「今日熱がある」とか「お腹がいたい」と言う牛はいませんね。日々の行動の中でその牛の状態を観察する、これがすごく大事なんだ、そういう風に伝えたりもします。

・盲学校の子供には

あともう一つ、盲学校の子供達が来た時に、酪農をどうやって伝えたらいいのか？ 本当に考えました。酪農の一部は運搬業なので（牛に餌を運ぶ、搾った牛乳を運ぶ）、酪農家の手は結構ごついとよく言われるんです。「よしこれだ！」と思って、子供達が来た時に一人一人握手して「おはよう、おはよう」と挨拶をしました。一通り終わってから「今おじさんと握手してみんなの両親とかね、それから先生方と何か違うところ感じなかった？」と聞いたら、6年生の女の子が「はいっ！」と手を上げたのです。何言うかと思ったら「何か汗っぽかった」と言われたんですよ。何か自分が期待していた言葉とは全然違ったのですが、そんな風にして、まずは伝えたかったのです。それから餌についても、とうもろこし、デントコーンの茎も葉っぱも全部食べると話しても、ひょっとしたらデントコーンやとうもろこしがどんな格好をしているか分からないのではないかと思ったわけです。たぶん、実は分かっているけど茎や葉っぱは触ったことがないかもしれない。そこで刈ってきて一本一本触らせて、これが茎、これが葉っぱ、皆が食べる所はこの実なんだよ、でも、牛は全部これを食べてくれるんだ。あるいはチモシーやクローバーを刈ってきて一人一人に触らせて、これ、道端に

ある触ったことのある草だね。牛はこういうものを食べて生きてるんだ。すると、その目の見えない子供達にも色々な形で伝えられるのです。

・キャッチボール

それから「キャッチボール」です。これは一方的に今みたいに話をするのではなく、対話形式みたいに「これどう思う？」で、その答えを受ける、といったキャッチボール方式でやると、すごく上手いと思ってます。

・素晴らしき広報マン

こんなことをずっと長く続けてきたわけなのですが、最後に「素晴らしき広報マン」と書いてあります。これは小学校3年生の子供達を受け入れて、最初のうちは何か一方的に伝えていれば、自分では絶対、消費拡大の効果があると思っていたのです。でもどういう形であるかが全く分からなかったのです。平成11年にウエモンズハートを始めたのですが、そこに30代くらいの若いお母さん方3人グループがアイスを食べに来たのです。ちょうど私の方も仕事サボってアイスを食べに行ったのですが、その奥さんが寄ってきて、「広瀬さんですか？」と言うので、「はい、そうです」と返事すると、「お宅のおばあちゃんは元気なんですってね」。突然知らない人に言われたので、「えっ？」と思ったら、「何日か前に、なんとか小学校の子供達来たでしょ？」と言うんです。「ああ、来ましたね」と答えたら、「広瀬さんのお話、家の息子が聞いてきてね、広瀬さんのおばあちゃん、二十歳で結婚してね、40年50年も牛乳飲み続けてるから、骨粗しょう症の検査して60代の時でもまだ20代だねと言われたんですよってね」。その奥さんの家庭ではご主人も好きじゃないので、あまり牛乳を飲む家庭ではなかったのだけれども、だんだんと一日に朝ぐらい牛乳を飲むようにしたそうです。そんな嬉しい話を聞きました。どれだけの話が伝わったか分かりませんが、例えば30人クラスの子供達を受け入れれば、その後ろに親もいるわけですし、小学校3年生の子供であっても、10年20年経てば自分で牛乳を買う、立派な消費者に成長してくれるのです。消費者様々なんだな、という風にとっても感じてます。最初は手探りでまったく状況も分からないでやってきたわけですが、こういう店を始めたことによって、少しずつ手ごたえも感じております。

・三位一体の改革

それからあと「三位一体の改革」です。これは、自分は消費者に伝えればいいんだと、ずっと思ってやっ

てきたのですが、青森県むつ市のある酪農仲間の話の中で、BSEの原因って何なんだ？粉ミルクじゃないか？ということがありましたが、それを聞いていたバイヤーさんが、お宅でつくって売ってる牛乳を、全く粉ミルクを使ってない牛から搾ることは出来ないのか？と訪ねたそうです。過去に育てられてきた親牛からはそういう乳はできませんね。これから全乳で育てて親になった牛からしかそういうものは育てられない、搾れないわけです。でも、バイヤーは明日にでも全く粉ミルクを使わない牛から搾った牛乳を出荷できないのか？と聞くのです。それには6年くらいかかりますよ～生まれてミルクやって育てて、2年経って受精し3年後に生まれて、という風にやっていくと、全体で5～6年かかりますね。そう答えると「そんなにかかるんだ」、「そんな話なんだ」というような話になりました。それからもう一つ、BSEが日本で発生した時にテレビを見てビックリしたのは、あるスーパーの店員さんが「当店では危険な国産牛肉は扱っていません。安全なアメリカ牛肉しか使っていません」などと大きな顔をして言っていたのです。日本の牛肉はそんなに怖くて、アメリカは安全なのかな？と思っていたわけなのですが、実はアメリカでもカナダ産でもBSEが出たとか色々あるわけです。同じその店員さんにもう一回徹底取材したらどうなのかなと思うわけなんです。そこで、三位一体の改革というのはどういうことかと言うと、結局我々の農産物は、一部は直接消費者に届けてますが、多くはホクレンだとか、流通業者を通じて消費者の口に行っている。つまり、「自分ら」と「流通」とそれから「消費者」、この三位一体で考えていかなければならない問題なのでは、と思うわけです。よく小泉総理が言っている三位一体の改革、これは本当に酪農教育ファームにもあてはまる、つまり教育ファームは子供達だけでなく、消費者ももちろんそうだし、バイヤーだとか、そういう人たちもどんどん受け入れて現状を話すことが大事なのではないかと思ってます。

（酪農教育ファームのメリット・デメリット）

次に酪農教育ファームのメリットとデメリットです。自分が数十年やってきた中で感じたことを簡単に説明します。

まず、酪農教育ファームというのは、今までは中央酪農会議が指導してきたわけなのですが、それは学校

の総合学習に向けてどういう形で提供したら良いか、ともかく子供達に対してどうか、という観点でした。それでは大変な部分が多くて裾野が広がらず、実施する酪農家が増えていかないのでは、という感覚を持っていました。では酪農家としてやった場合どうなんだろう、というメリットとデメリットを考えてみました。

まずメリットの方は、一番目は「投資がいらぬ」ということです。購入するための投資はいらぬし、レストランを作らなくても、観光施設を作らなくてもいいわけですし、自分の牧場を直接見せながら、酪農が理解してもらえます。

二番目は「消費拡大」につながります。さきほどのように子供たちに話をし、それが家族に伝わって来てもらえる、あるいは、大勢の消費者が家に見学に来て牛乳を飲んでみたとか、アイス、乳製品食べてみたいとか、あるいはこうやって苦労して作っているんだと、身近に感じてもらえて消費拡大につながるように思います。

三番目には「自信」です。先ほど言いましたように、自分も酪農が好きで始めたわけじゃないんです。本当に最初は自信がなくてこんな仕事一生続けられるのかな？などと思いながらやっていたのですが、消費者に「いやすごいですね、いい仕事やってますね」、そう言われて「あ、俺って、そんなすごい仕事やってんのか」と思えるのです。食料は3日も我慢できるわけじゃないし、そういうものを生産している大事な仕事なんだと、こういう事を消費者から教えられたような気がします。

それから四番目は「信頼」です。先程ビデオの中で言いましたが、これでいいかな？という作業が結構あるわけなのです。特に酪農では乳房炎も少々この位なら入れちまえてとか、体細胞の数字がここから上に行かなければ、ペナルティ取られないからいいや、とかそんな感覚でしてしまうことが多いのですが、いやいや待てよ、ああいう人達が飲んでくれる、こういう子供達が食べてくれる、そう思うことによって、もっといい牛乳、もっといい乳製品を、と考えられる様になるんじゃないかと思えます。

五番目は「人材活用」です。私も53歳になりましたし、息子が後継者として今、少しずつやっています。もう5年10年経つと「親父もういらねえ」とたぶん言ってくれるんじゃないかなと思ってるわけです。でも、長くやってきた経験はそのまま残っているので、

その経験を活かして本当に息子達が経営を一生懸命やって、そして、リタイアするような我々年代は消費者と色々な話をしながら酪農理解と農業理解を担う……歳とってゲートボールやパークゴルフをやるばかりでなく、酪農理解～そういう人材活用になるのではないかと思っています。

それから六番目は「情報収集」です。自分は酪農を伝えたいと思いミルクパーラーを建てました。見学室も作りました。すると「あいつは何であんな事をやったんだ？」もっとそれを知りたいと、色々な人が集まってきてくれるのです。そういう人たちに色々な情報をもらって、うちのウエモンズハートは出来ました。当時、帯広にある明治乳業の工場長がそういう消費者行為をやっているというので、珍しがって来てくれたのです。それから仲良くなりまして、ずっとお付き合いさせてもらっています。その人に、乳製品の加工はどのようなものなのか、経費がどのくらいかかるのか、どのくらい施設がいるのか、全く分からないものを教えていただいて、今の形になったのです。色々な形で情報を持っている人が来てくれるのです。自分が発信することによって、情報はインターネットを使ったり図書館に出かけていったり、色々な人に会って収集するものなのですが、逆に情報が集まってくるのだなということも感じました。

それから七番目は「起業」です。新たな起業ってよく言いますね。ウエモンズハートも、そういう中でこんな牛臭いところに消費者の人達は来てくれるんだな、「ひょっとしたらこういう商売やったらいいのかな」。立地条件とか様々なものを消費者に来てもらうことによって、考えあわせて間違えのない起業がやりやすくなると思います。

メリットの最後は「農業の意義」です。食料とはすぐ簡単に生産できるものではないし、逆にいえば3日と我慢できるものでもないのです。それだけ農業は大事なんだ、ということが自分はこの教育ファームという活動を通じて感じました。ひとりひとりの生産者がそのことに自信を持って農業をやっていくのが大事だと思っています。

また、その反面デメリットがあります。このデメリットというのは、一番目は「家族理解と労働過重」です。先ほど説明したように、受け入れが夏から秋に集中していて、北海道の農作業が忙しい時期に集中してしまい、家族の皆が理解してくれないとできません。例え

ば奥さんだけがやりたいって言っても、ご主人が「こんな忙しい時に、そんなもん、消費者行為なんかあるか！」という話になってはなかなかできません。だから家族理解は非常に大事です。それから、自分もやってて思うのですが、1ヶ月に10件15件受け入れている時は、昼間はそういう受け入れをやって、夜に牧草を刈っているのです。そして昼間受け入れやって、夜にフォレージハーベスターで草刈って自分で運んで、サイレージ積みをやったりだとか。そんな事をやって当初は本当に笑われてました。そのぐらい労働過重になります。

そして二番目は「事前の打ち合わせ」ですが、これも必ずやった方が良いです。学校の先生方は授業が終って4時とか5時頃よく来るんです。土日は自分の時間だから、全然来てくれないです。そうなるとやっぱり搾乳の時間に重なる。スムーズにやるためには事前の打ち合わせは大事ですが、農作業にぶつかってしまう。これに関しても家族理解がなければいけないと思っています。

それから三番目は「多様性の排除」です。これは自分でも少しあるのかもしれないと思うのですが、例えば今いろんな酪農家があります。放牧酪農もあれば、メガファームとかギガファームもあります。メガファームやギガファームだと糞尿の問題も出てきたりします。すると、自分の経営スタイルを正当化するあまり「ああいう飼い方は良くないんだ」「こういう飼い方はあんなんだ」と、消費者に誤解を与えるようなことまで言うってしまう方も結構多いのです。それは、酪農家仲間同士で話し合えば良いことであって、消費者に提議する問題ではないと思います。その辺もよく考え合わせてやらないと、逆に酪農の誤解につながる恐れもあります。

それから四番目は「貧弱な知識」です。例えば、牛に胃が4つあります。これら4つの胃の説明は、実は正確になかなか出来ないものなのです。我々はホクレンとタイアップして、札幌駅前では何年かイベントをやっていて、クイズなんかやるわけです。牛に胃が4つあります。では、一番目の胃から四番目の胃の働きは？ ある酪農実習に来ていたお姉さんが説明していたのです。「へえ、そんな働きなのか」と思ってビックリしていたのですが……それは「牛はどどん餌を食べて一胃に入れます。一胃である程度消化したら、一旦戻して反芻して二胃に入れます。二胃で消化したら、

また一回戻して反芻して三胃に入れます。三胃である程度消化したら、また反芻して四胃に入れます」……何かちょっと違うんじゃないかな?と思ったわけです。それが小学校の子供達に大して影響があるわけではないのですが、そのような類でしっかり我々が牛の体の知識を持たないで、間違った説明をしてしまうということは往々にしてあり、もっと勉強しなければいけない、という風に思います。

それから最後にこれは大きな問題なのですが、受け入れてもらう側、学校ですね、そこに「コスト意識」っていうのは全くないです~学校というのは。「一時間だとこれ位頂きたいです」「えっ?お金かかるんですか?」、そういう話になるわけです。「私どももお宅の学校一件だけならいいのですが、大勢受け入れて、そしてそのために実習生とか従業員を雇っているわけですから、その分コストは負担してください」と言いたいわけです。あるいは、搾乳体験する時も、いくらかかります?「え? 2、3回搾るのに何百円も取るの?」、こういう言い方なのです。でも、我々もさっき言ったように24時間の中で自分の生活もあり、酪農という仕事もあり、その中で、伝える仕事もやっているとってます。学校の先生方はなかなか予算がない、年度が4月から始まった中での対応になってくるので、なかなかコスト意識という意味ではお金にならない無料講師が結構多いという風に感じます。そういう意味で、酪農教育ファームというものを、よく理解していただければ、なかなか難しいとってます。

(酪農教育ファームの今後の展望)

最後に展望ですけれども、今、酪農教育ファームに対しては、中央酪農会議で平成17年から5年間大きな予算を取っていて、牛乳の消費拡大~そのためには教育ファームが大切だということで、予算づけをしております。そういう意味で今後ますます必要な活動になっていくと思ってます。時間がもうなくなって尻切れとんぼになりましたけれども、ますます酪農、牛乳消費拡大のために、そして自分達の自信のためにも教育ファームというものを進めていきたいと思ってますし、これからも広がっていくものと確信しております。あとパンフレットを見ていただければ、どんな活動をしているのかが良く分かると思えますし、裏の方に中央酪農会議とか、これを作った事務局の名前が書

いてあります。詳しい事をお知りになりたければインターネットでも電話でも詳しいことが分かりますので、見ていただければと思います。どうも最後までありがとうございました。

質疑応答

(質問)「広瀬さんのようなお考えをもっている農家が、全国、あるいは北海道でどれくらいの数があるのか?そしてその役務代はどうであるか、お話をいただきたい」。

(広瀬) 今、日本の酪農家は減りに減って2万8,000戸位だそうです。その中の1%に満たない数、約250位の牧場が地域交流牧場という形で、消費者交流を実際にやっています。教育ファームもそうですし、アイスクリームを作って販売している、あるいは、レストラン・ファームイン、色々な形で消費者交流をやっている牧場が会員となって、250名ほど集まっております。その中で北海道では75牧場位が加盟しております。教育ファームの方ですけど、これは認証制度を作っています。認証された牧場は280位あります。こういうルールにのっとって、あるいは、保険にもちゃんと加入して安全な体験ができますよ、という認証を受けてる牧場が170ほどあります。

(質問)「教育ファームということで、人を受け入れるとなると環境に対する意識も、やっぱり深いと思うんですが、何か工夫していらっしゃることはありますか?」。

(広瀬) その辺が一番答えにくいところです。なかなか環境整備は難しくですね、やはり日々、きちっとした考えでやっていないと……、明日こそはと思っけるとなかなか片付かないものです。仲間ではもちろん綺麗にしている人もたくさんいますし、うちはただ、綺麗にしようかなという程度でやっております。あまり自分に負担がかかってもまたいけないし、あるいは、逆に悪いイメージ持ってもらっても困るわけで、まあ、そこそこなやり方かな、と自分では思っています。

(司会)「時間がきました。広瀬さんはまだいらっしゃいますから、聞きたいことがあったら、直接聞いてみてください。最後に素晴らしいお話をして下さいました広瀬さんにもう一度拍手を」。

③ 都市近郊酪農の実践

江別市 酪農家
百瀬 誠記



「百瀬牧場」

みなさん、こんにちは。たぶん頭の中真っ白くなりますので、何言ってるかわからないかもしれませんけど聞いてください。宜しくお願いします。

〈建物〉

これは、古い建物ですけど、昭和30年くらいに建てた最初の牛舎です。改造を重ねながら現在に至っております。この中でも何人かうちに来られた方もいると思いますけれども、決して敷地全体も手本になるような状態ではありません。見てのとおりです(図10、115頁)。

〈家族構成〉

家族の構成ということで、子供がたくさんいます。長男次男が双子で、中学校2年生です。三男が小学校6年生、四男が小学校1年生、あとは父母がいます。

〈乳量〉

これが、ここ何年かの乳検データですが、平成7年に改築して増頭しました。平成10年から放牧を始めたのですが、それまではつなぎ飼いで飼っていましたが、放牧になってからは、1万kgになっていますけれども、特別放牧で1万kg搾ろうという意識は持っていませんでした。いかに放牧草を有効に使うかということを考えて、考えた結果がこのようになったかなと考えています。

〈所得率〉

グラフではこんな感じですが、所得率は最初の頃のほうがよくて、白色申告をしていたのですが、平成9年に突然青色申告になったんです。申告の仕方をわかってなかったのが、大変な損をしていたということもあります。だから、正確な数字ではありません。所得率は若干上がってるようにも見えますが、決してそんなにいい数字ではないですね。放牧は餌代はすごく

下がるというイメージをお持ちだと思いますけども、舎飼いのときから比べるとだいぶ下がってはいるんですけども、私の場合は食わせてる方だと思います。

〈防疫対策〉

防疫対策は特別力を入れてはいないんですが、獣医さんもヘルパーの方にも、やはりあった方がいいと言われたんで置いたっていうだけなんです。いつでも安心して来れるって言われたんで。最低限のことをやってるかなっていう感覚でやってます。

〈搾乳施設とゴムマット〉

パイプラインでユニット5台自動離脱です。ゴムマットは、古い施設新しい施設あって、いろいろ入ってはいるんですけども、ゴムマットはある程度年数がたつてみないとわからないという部分は、かなり難しいですね。農家の話はいろいろ聞くんですけど、使い方によっても随分ばらつきがでますので、自分のところに合うものも選ぶのは、なかなか難しいです。

〈堆肥舎〉

堆肥舎は約100坪くらいで、何年か前に建てました。手前に尿溜めがあるんですけど、200tくらい入るようになってます。この施設は堆肥舎に全て傾斜をつけて、



全て尿溜めに排汁が入るように作りました。建築屋さんと言ったらできないって言われたんですけども、できないんなら俺がやるという風に言って傾斜は敢えてつけてもらいました。うちの堆肥をつくるのには、排汁がすごく大事なんです。だから、排汁にはすごく重点をおいて、こだわって作りました。江別の角山に、米村さんという、堆肥に関してはすごい方がいるんですよ。大好きだし知識もたくさん持つてる方なんですけども、その人とも普段から交流させていただいて、いろいろ堆肥のことを話しています。堆肥ができてくると、堆肥作りってわりと楽しいんですよ。処理してるっていうよりも作っているという感覚でやってます。堆肥作りは、微生物が動き出すまですごく時間がかかるんですけども、一度動き出すとその環境をあえて変えない限り、ずっと動き続けてくれるんですよ。うちも、建って2、3年はちゃんと動かなかったんですけど、やっと動くようになって、手を抜いてもちゃんとした堆肥になってくれるという状況です。堆肥に限らないんですけども、自分にあったシステムっていうのがすごく大事だになって最近はずごく思います。

〈飼料作り〉

飼料はロールパックと乾草です。以前は、早刈りは栄養価が高いということで、極端な早刈りをしたり、ロールパックの質を求めて、高水分なものも作って見たんですが、すごくいいものはできるんですけども、自分に使いやすいものを考えて、今は低水分のものを作るように心がけています。

粗飼料に関しては、自分が収穫しているのは牧草しかないんで、機械も最小限しか持っていません。とてもコスト削減には役立つ気がします。あと、放牧もやっていますので、放牧期間中の乾草と冬の餌という風に考えているので、非常に少ない量で済んでいると思います。舎飼いオンリーの農家から比べるとだいぶ量は少ないし、もし余っても、使う分しか最終的には残していません。

〈放牧地〉

放牧地は12ha、採草地35ha、それと施設全体で約2haほどあります。作業は2人でやっております。最近子供も手伝ってくれるので、楽になりました。放牧地は、搾りに約9ha、育成に2ha、乾乳に1haを、全て専用放牧地として使っております。

〈以前の仕事〉

私は結婚して、30歳になってから就農しまして、Uターンです。それまでは会社員として勤めていました。こういう鉄工所や土木などの建築関係、体だけですむような仕事をずっとやっていました。あとはバスの運転手をだいたい長くやっていました。そんなかんじで、基本的には酪農をやるうって頭は一切ありませんでした。

〈以前の仕事が酪農に役立ったこと〉

酪農って、すごく牛以外の仕事が多いんです。それで、以前の仕事が非常に役立っています。一応江別酪農家の便利屋と呼ばれています。ある程度の仕事は出来るので、自分でも非常に便利だと思っています。何でもできるわけではないのですが、機械を見ていると、新しいものも古いものも、ある程度仕組みがわかるんですよ。仕組みがわかってくると壊れそうなのもわかってくるんですよ。そして、壊れそうなのもわかるとこれが壊れたらどうを直せばいいかってことも事前に考えられるんですよ。だからそういう分では非常に役に立って、壊れたらすぐ直しています。この便利な部分もあるんですけども、逆に時間がかかる部分もあって、専門の方に見てもらったほうがよっぽど早かったということも当然あるんですけども、だいたいのことなら自分でやった方が早いと思います。

〈就農の動機〉

就農した動機は、うちの親の体調がちょっと悪くなった時期がありまして、戻ってこないかと言われたのがきっかけですね。しかし、そのときにちょうど会社でも行き詰まりがあったのが、本当のきっかけだったのかもしれない。まだ皆さんわからないかもしれないけども、会社員の対人関係のストレスというのは計り知れないものがありまして、それはたぶん会社員になってみないとわからないと思います。また、このときはバス乗ってたつてもあって家にはあまり帰らなかったで、不規則な生活への不安もありました。

酪農の仕事に関しては、子供のころから手伝っていたので不安はありませんでした。しかし、私が知っていた酪農っていうのはお手伝い程度だったので、酪農を甘く見ていました。ほんとと表向きだけの酪農しか知らないんで、たいしたことないだろうと考えて、家に入りました。これは後で思ったら間違いなんんですけど

も。妻と十分な話し合いを持って結論を出したっていうことありません。なんとなくいいペーってかじで家に入りました。まあ半分騙したようなかたちにもなりましたね。

〈就農して最初の3年間〉

最初の3年くらいは、ただの手伝い状態でした。仕事も当然わからなく、責任も感じずなんとなく仕事をこなすという状態だったと思います。そのときも当然不満というのは会社員と同じでとても持っていましたね。また、休みの不足・仕事の不規則に就農当初はとまどいを感じました。最初の頃は、休みっていうものがすごくうらやましいなという風に思っていました。

〈3年後〉

だいたい3年くらいを過ぎたころから、酪農のおもしろい部分っていうのが少しずつ見えてきたかなと思います。酪農の全ては見えていないので、部分的に、なんとなくおもしろいな、種をまいたら芽が出るな、というように感じました。おもしろくなってからは、いろいろなことを試すこともできたて、どんどん入り込んでいきました。

〈5年後〉

30から入って、35くらいから、ある程度経営を委譲してもらって、自分の責任で仕事をするようになっていきました。そのころ、5年もやれば仕事は見えるし、自分で全てできるという風に勘違いしていました。しかし、自分が決断をして仕事を進めなければいけないということが、すごく難しかったです。やること全てが失敗して、自分の思った方向に進んでくれないんですよね。やはりお手伝いと経営者では、決断をしなきゃいけないっていう部分で、完全に視点が違ってらるんですよね。その視点が違うっていうことが、難しかったです。だから自分で決断して、自分のペースで仕事をするまでは、経営を譲ってもらってから3年近くかかったと思います。

〈視点と決断〉

自分で決めるっていうことはすごく簡単なようですごく難しいです。牧草1つ刈るのでも、いつ刈ったらいいんだろうって聞かれて、聞かれて失敗しても責任はないし、雨が降っても責任がないから、お前が刈れっ

て言ったからって言えるんですけども、自分で決めたら最後まで自分で責任をとらなきゃいけないんですね。これがもうすごく自分を成長させてくれた部分ではないかなと思います。

〈酪農の仕事の配分〉

ある程度自分のペースになってくると、休みとか不規則って言う部分が自分である程度コントロールできるようになるんですよ。酪農の仕事って、毎日大変だねってよく言われるんですけど、絶対に休めないっていう部分ではとても大変なんですけど、他の作業は、一つ一つ短期間で終わるんです。一番草なんかは、早い人は1週間くらいで終わるんでしょうし、うちなんかは、一番草だと2週間くらい、二番草だと1週間くらいで終わります。だから酪農家って集中してすごく忙しいんですけど、それ以外って案外暇だっただけに気がつきませんでした。後はいかに仕事を効率よくやるかっていうところが大事なんです。毎日絶対やらなきゃいけない仕事をうまくコントロールすれば、時間はたっぷりあります。あと、人に使われない自分のペースでの仕事の気軽さがあり、ストレスが大幅に減少しました。逆に人に使われていると責任がないという気軽さがあるんですけど、自分のペースで仕事できる気軽さっていうのは、やってみるといいもんだなと思ってます。

〈酪農のサイクル〉

酪農のサイクルは基本的に長いんですけども、早く結論が出る部分も多く、取り組みの結果がすぐにでたりして励みにもなります。

酪農のサイクルは基本的に、牛にしても牧草にしても、1年1回しかやってないんですよね。例えば牧草を一度失敗すると、次の年になって、そのときに原因を掴めれないとたぶんそのまま2年3年といつまでも引きずるんですよね。牛にしても早くて1年1産ですし、育成牛なんかは経産牛になるまで最低2年はかかりますし、非常に長いんです。

でも、栄養管理は、今の状態をすぐに改善してすぐに答えが出るものがあって、そういう点は大変おもしろいです。でも、うまくいった栄養設計でやっても、次の年の粗飼料が変わるとそれがすべて崩れてしまう危険性っていうのがあるんですよね。それをなんとか解決したいと思うんですけど、解決するにはほんとに時間がかかるんです。自分でもまだ決してうまくいって

るわけではないんですが、すごく楽しい部分でもありますね。長いサイクルのものと、短いサイクルのものとの関係を理解すると、先を読むことが出来て、酪農は非常におもしろいなって思います。

〈経営方針〉

こだわりは一切ありません。牛だから草っていうこだわりも全然ないし、放牧も絶対しなきゃいけないっていうこだわりもありません。都合悪ければすぐにもやめれるような感覚でもあります。そのときの条件を活かして、そのとき一番いいと思う方法をとるようにしています。酪農技術っていうのは流動性があって、こないだまでダメだって言ってたものがすごく良くなったり、次から次に新しい技術が出てくるんです。だから、あまり振り回されないように、情報をしっかりと自分の中で噛み砕いて、いいものか悪いものか、自分に合うか合わないかというのを考えることを意識しています。それを考えるのも一つの楽しみでもあります。

〈基本的に一人で作業〉

基本的には、牧草収穫は、一人で作業できるようなかたちに意識してやっています。機械もなるべく効率の良いものを使うようにしています。

酪農は家族全員が働かなければならないのか疑問がありました。普通サラリーマンは、父さんが年間何百万も稼いできて、母さんは家で待っていて、父さんの収入で家族を支えてるっていうのが、当たり前のことだと思うんですね。実際に自分もそうだったんで、それが当然だっていう感覚を持ってたんですけども、農業っていうのは家族全員で働く、で当たり前っていう感覚があるんですね。酪農の息子さんとか娘さんだったらわかると思うんですけども。俺も酪農家の息子なんですけど、それに対してすごく違和感があって、嫁さんを使って無理やり働いて、最終的にたいした収入も上がらないなんていうのは、かっこ悪いなっていう意識がずっとあったんですね。だから、自分はそうじゃなくしたいなと考えて、極力自分の気持ちだけでも、当てにしないようにしようっていう気持ちをずっと持っています。最終的には手伝ってもらってるんですけども。でもなんていうか、経営者の方からお前は働かなきゃいけないんだよっていう風には絶対言いません。お願いだから手伝ってっていうかんじで。

おんなじ働くにしてもたぶんこっちの方が心地いいと思うんで。

自分が酪農に入ったときには、結婚して、子供も生まれてからだったので、入ってすぐは、うちの嫁さんは、酪農はまるっきり関係なく、牛舎にも行ったこともないような状態だったんです。だから結局は自分と親でやってました。そんなかんじで、だいたい10年くらいはうちの嫁さんは、酪農に関してタッチしてませんでしたね。それでいいかなと思っていました。

しかし、うちの親がだめになったときに、実際に一人でできるのかって考えると、やっぱりちょっと無理なんですよ。一人でそれなりの頭数、採草地なんかも持って作業しようと思うとどうしてもできないんです。

だから、それをクリアして、自分の嫁さんや子供をなるべく当てにしないで、経営をしていかなきゃいけないなっていう気持ちを常に持ってました。でも最近では、私がいっぱいいっぱいになって働いてるのを見ると、うちの嫁さんが自然と手伝ってくれるようになりました。でも、朝の牛舎作業の時に、嫁さんがもし寝てたら絶対に起こさないですね。気がついたら来てやってくれるっていうのが今の形です。そういう姿を見て、子供たちも自然に手伝ってくれるようになってきました。だから、今はちょっと楽になってます。でもいつまでも当てにしているのはだめだとわかってるんで、アルバイトさんに働いてもらおうとは思っていません。

〈なぜ放牧を取り入れたか〉

放牧始めたのは平成10年なんですけども、それまでは普通の舎飼いだったんです。小麦作ってデントコーン作って牧草、という風に考えてやってました。でも、粗飼料の種類が多いと、毎日の手間も大変だし、まきつけなどの作業も忙しくなってきました。栄養面も、どんどん難しく複雑になってきますので、どうも自分には合わなかったっていうのはあります。それで、SRUで土壤改良をやったんです。SRUっていうこと自体みなさんわかんないと思うんですけども、土壤管理のコンサルタントをやっている方がいまして、そのコンサルタントを受けている人たちの集まりをSRUっていうんです。年に1度か2度集まって、みんなと情報交換なんかをして勉強しています。いまだに数字とかよくわかんないですけども。放牧に関しては、最初

は10 ha くらいしかないんで、できないっていう方がいたんですよ。でもいろいろ勉強してるうちに、ちゃんとした放牧じゃなくてもいいやって考えるようになったんです。ある程度の条件さえ満たされてればとりあえずは表に出すことはできるんだと考えて、やろうと決心しました。そのときに普及員のがすごく前向きにがんばっていただけだったので、半分引っ張られたような形でやることになりました。

〈注目されて〉

ある程度結果もでてくると、注目もされるようになりました。注目されるようになってくると、これをいまさらこけたらかっこ悪いなっていう考えがすごく出てきました。だから、今はだいぶ慣れてきましたが、最初のころは必死に取り組みました。でもこの注目を受けるっていうことは、自分にとっては大事だったなって感じてます。

〈放牧地の開始準備〉

平成9年に放牧地の補強を始めて平成10年より本格開始しました。草種はペレニアルライグラスを主体に、簡易牧柵を設置して秋に本格的に開始しました。あと、出入り付近の泥ねい化を防ぐために、泥ねい化防止用クリンプなんか、干場先生に大変お世話になって、試してみることができました。

あと、放牧地の土壌分析と施肥管理。あの、施肥管理というのはとても放牧にとって難しい。最初は随分失敗もしました。SRU なんかでの話でもある程度、土壌分析的にはいいという結果がでているんですけども、施肥管理によって全然変わってくるっていうのがやり始めて、初めてわかったんですけども。この土にはこれだけいれなさいっていう処方みたいなのがでてくるんですけども、でも一度にいれてしまったり、かといって今度それを、肥料がきれているのをわからずに遅れたり、という部分では、なんとなくできるようになるまで、最近までかかりました。放牧に対しては施肥管理というのはすごく大切だなとつくづく感じます。これに失敗すると、掃除刈りなどの余計な仕事っていうのが増えてくるんですよ。あとは、最初牛がなかなか食べてくれなかったんですよ。なぜ食べないのかわからず、最終的には施肥管理だったりもしたんですけども、とりあえずカルシウムをかけてみようということでかけたりもしました。あとは、糞だとか

尿のにおいじゃないかという話で、炭もまいたりもしたんですけども、これといった効果はなかったですね。あと、放牧にしてよかったこと、これはあれですね、

〈放牧にして良かったこと〉

1. 労働が楽になった

放牧にして良かったことは、労働が楽になったことです。時間的にはそんなに変わらないんですけど、牛舎内での仕事っていうのはすごく減ったんです。おんなじ時間働いても働いたっていう気もしないし、まあ雨の日なんかは大変なんですけども、天気の良い日なんかはほんとになんか、仕事っていう感覚もないんですよ。だから非常によかったと思います。

2. 堆肥処理

あと、夏期間の堆肥処理が楽になりました。水分の低い糞がぼんぼんでくるので、ほんとにいいものが作りやすいような状態で。これはいいところです。それで、夏のいいものがあることによって、冬の堆肥も多少水分混じった堆肥でも、すごく動きやすい、っていう部分もありまして、堆肥もスムーズに作れるようになってきたと思います。

3. 気楽である

先に言ったんですけども、注目を受けることで、励みにもなること、比べる事例が少ないので気楽であることです。これはもっとも大きくて、あまりまわりを気にせず自分なりにやってくつのは非常に気楽で、自分で答えを見つけると、それもすごく楽しいっていうか、嬉しい部分でもあるし。モデルが少ないので工夫するっていうのも一緒ですね。

〈放牧の問題〉

放牧をやりだすとすごく問題がおきるんです。原因を突き止めるのにも時間がかかるし、そこからどう解決してこうかって考えるのに時間がかかりました。

最初の普及員の方は行動力が素晴らしい人だったんですが、その後、その方が移動して、次に栄養管理に非常に詳しい方が来られたので、放牧の栄養管理に気をつけて、いろいろやりました。問題を大きくわけると、夏場に、有り余るタンパクをいかに有効に使うかというような問題が出てきて、次に秋にはなぜか乳量の落ち込みが激しくて、そして冬はビタミン不足が起きます。夏場には過剰なほどのビタミンをとっているのに、舎飼いになると、ビタミンが不足になりますの

で、色々問題が起こるんです。それを見つけるまでもずいぶん時間がかかりましたし、解決するにもほんと大変時間がかかりましたね。でも、それを解決してくにしたがって乳量もどんどん出たわけなんです。

また、乳成分の維持確保が難しいです。脂肪が落ちるってことは非常に乳価にとっては影響あることなんです。仕方ないと考えたほうがいいんですけど、出荷先にとって求めている牛乳っていうのがあるんです。最低乳成分が決まられていて、体細胞や細菌数も、これ以下にしてくださいっていうのがあるんです。やはり、そこに売っている以上はそれに沿った牛乳を出す義務があると思うんですよね。それで、その義務を果たすというのは放牧にとっては非常に難しく、努力しなければならないので、ほんとに大変です。

基本的に酪農ってお客さんがいない商売なんです。消費者がお客さんなんですけども、直接的じゃないんですよね。それは乳業メーカーがやることで、酪農家にとってお客さんっていうのはほんとに農協なんですけども、その農協っていうのは、自分が出資者なんです。立場が逆転しているんです。だからなんでも言えちゃうんですが、やっぱりそれは、人として言っちゃいけないと思うので、求められている物は絶対作ろうっていう意識はあります。

〈放牧管理〉

牧草の生育ステージに合わせた放牧管理は、非常に難しいんですよね。当然春はどんどん伸びますし、秋は急に伸びなくなりますし、そのばらつきをいかに最小限に抑えるかっていうのが非常に難しく、時間もかかります。最近では、なんとなく、こうすればコントロールできるってのがわかってきたんですが、すごく難しい部分だと思います。このばらつきを少なくすることによって、牛舎内での餌の管理がすごく簡単になってくるんです。だから、合わせるのは難しかったんですが、コントロールできるようになって楽になってきたし、牛の能力も安定するようになってきました。

これが、だいたいの放牧地の構図なんですけども、全てペレシクロローバーの放牧地です。うちの放牧管理のシステムはちょっと違ってて、外回りしか線をはってないんです。中は一切張っていません。中は毎日カイサクで仕切るようにしています。ここに縦線なんかも入っていますが、これもおおまかなんですけども、毎日仕切っています。草の量というか、再生

量っていうのを見ながら放牧面積を決めています。だいたい1周するのに10日から2週間くらいの間で戻ってくるというなかたちで放牧しています。

最初は施工が嫌で、真ん中釘みたいなかんじで外側しかやってなかったんですけども、これをずっと続けることによって、毎日必ず草地を歩くようになりました。面倒だからやめろと言われてたんですけど、わりとすぐなんで、いいんだなんていいながらやってるんです。毎日必ず草地を歩くってのは今思うと非常に役に立ってます。毎日歩いて、草を見て、だいたい草の状態がわかるようになりました。これは、牛を管理する上では非常に役にたっています。

それで、春早くっていうのは、ポッコを大きく区切ります。最初は区切りがなく、1つの状態で2、3週間ずっとはなしています。それで、6月、7月というのはなるべく再生力もすごく強いんで、ポッコのスペースも1つ箱小さくなります。それで、8月、9月、10月というのは再生力も鈍ってくるので、少し大きくなるんですけども、雨や気温なんかにすごく左右されるんで、そのときによってポッコを大きくしてみたり逆に小さくしてみたり、いろいろやりながら、餌の量を見ながら毎日繰り返しています。

〈共進会〉

ショーっていうのは大変体力的にはきついんですけども、牛の良し悪しっていうのは別にして、ショー仲間が家に集まって楽しむと、子供たちも楽しんでくれて非常にいいことかなあという風に思います。

〈経営における将来構想〉

経営における将来構想っていうのは、とりあえず何もないですね。規模拡大もそんなに考えてないし、多角経営も考えてません。あと、粗飼料っていうのは、今コーンサイレージである程度と、乾燥でやってるんですけども、もし条件が合えば乾燥一本でやってみたいなっていう気持ちは持っています。

〈ゆとり〉

ゆとりって自分でたいしてあると思ってないんですけども、特別どっかに家族で行くわけでもなく、ないんですけども、なんとなく天気の良い日は、突然、牧草やりながらも、ちょっと野球やろうって風を楽しむようにはしています。それで、結果だけ、できた姿だ

けを求めるのではなく、経過を楽しめるように考えてるんですよね。途中経過っていうか、をみんなでこう、いろいろどうしたいこうしたいって部分で、楽しめるように考えてやっています。でもなんか子供たちもちょっと一緒に楽しんでくれてるなっていうのをすごく感じています。結果はまあ二の次かな。結果よりも経過っていうのはすごく楽しいこと、それを楽しくどうしたら楽しく過ごせるかっていうか、どう楽しくなるかというのを考えながらやっています。

〈自宅〉

これは、何年か前に建てたんです。この家を作るにしてもテーマを自分、嫁さんと一緒に作りまして、設計したんですよね。テーマが「古い学校」って作ったんですけども、非常にこの図面作りも楽しみました。何をやっても楽しめるようには工夫っていうか、考えています。まわりからは、時間がいつでもあるように見られているんですけども、実際はないんですけども、いいよねって言われることはときどきありますね。

ばらばらな話で、ほんとにまとまりもなくほんとにあれだったんですけども、こんなところで終わらせてもらいます。どうもありがとうございます。

(干場先生) 貴重な話をどうもありがとうございました。百瀬さんらしい、全然気張らない話をさせていただいて、ほんとにどうもありがとうございました。みなさん、どんなことでもかまわないので何か質問があったらしてみしてほしいと思います。何かありますか？

(質問) 今北海道の乳検の平均は、乳量が8,500で、濃

厚飼料が3tちょっとなんですよね。それから見るとあきらかに少ない濃厚飼料で、1万kg搾ってるということになるんです。それで、今の乳量の水準でこれからもうこうとされてるのか、もうちょっと改善されようとしてるのか、そこらのお考え聞かせていただければ。

(回答) あえて伸ばそうとかは一切ないですけども、どうしても放牧しちゃうと、高タンパクになってしまうので、牛の状態を見ながら、抑えて、無駄な窒素も捨てることのないように、っていう風に考えてると、最低限今くらいのレベルの乳量が牛にとって必要なっていう風に考えています。だから将来的にどうなるかわかんないんですけど、あえて搾ろうという感覚はないです。それをやらないと、ピークの牛がどんどん痩せていくのが明らかに目で見えるので、あんまり痩せるのはかわいそうかなっていう感覚なんです。

(干場先生) こだわりを持たないから特別なことじゃないっていう風におっしゃってましたけど、こだわりを持たないというのは実はすごく難しいことかなっていう風に思うんですよね。だから、こだわりを持たずにすんでるのは、違う世界のものを見てたというところがすごくあるなと思います。だから自分に合ったやり方でやってこられています。これは実はほんとはなかなかできないことです。みなさん農家の出身の人もたくさんいて、卒業したら自分のうちにすぐ戻ろうと思ってる人もたくさんいると思うんですが、それを無理やり変えるわけじゃないんだけど、ちょっと違う世界を見てみると、またすごく違った自分のスタイルを作ることができるのかなっていうことを、今日百瀬さんの話聞いて感じました。

▶江別市 百瀬牧場



1

経営の概況

家族構成

経営主	百瀬 誠記
妻	雅代
長男	悠
2男	健
3男	琢
4男	廉
父	一司
母	乃扶子

土地利用状況

放牧地	12 ha
採草地	35 ha
施設地	2 ha
合計	49 ha

2

年次別乳検成績の推移

項目	H7	H9	H11	H14	H15	H16
生産量(t)	248.2	298.4	349.4	400.8	456.9	421.2
経産牛頭数	32.5	36.2	41.2	42.9	44	43
一頭当たり乳量(kg)	7,636	8,244	8,482	9,343	10,384	9,795
年間平均乳脂肪率(%)	3.92	3.91	3.82	4.05	3.97	4.04
年間平均体細胞数(万)	16	20	14	15	17	19
濃厚飼料給与量(kg)	2,505	2,128	1,992	2,176	2,360	2,343
乳飼比(%)	21	17	16	15	14	15

3



4



5



6

就農した動機 ①

平成4年の春にUターン就農
就農するまでの間に経験した、色々の職業が現在に役だっている。

- 鉄工所勤務・・・溶接技術の習得
- 土木事業・・・各種重機運転技能向上
- 水道工事・・・水回り工事の仕方
- 大工工事・・・住宅および建築物構造
- 大型運転手・・・職業運転手の大変さ など

7

就農した動機 ②

母の体調が悪くなり、親からの要望
従業員という立場への疑問
不規則な生活(職業的)への不安
家族が増えたことでの生活の安定
酪農に対する近親感

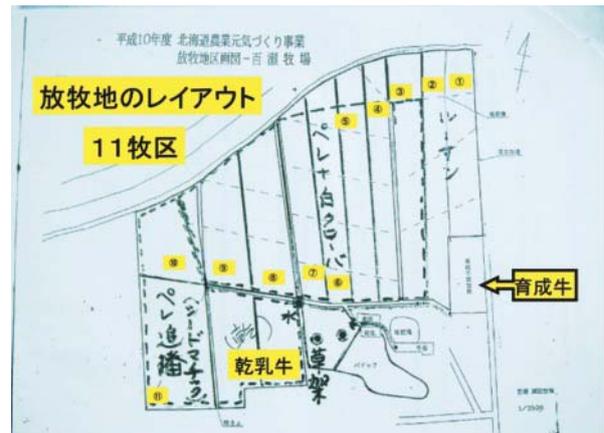
8

酪農経営の魅力は

酪農のサイクルは基本的に長いですが、早く結論の出る部分も多く、取組の結果が直ぐに出たりして、励みにもなる。

長いサイクル(遺伝改良・飼養管理システムの変更など)の物と短いサイクル(粗飼料生産・乳質改善など)のものを同調させていく事が必要。
仕事の連鎖関係が判ってきて、先を読める様になる。

9



10

放牧への移行管理

平成9年に放牧地の造成を始めて、平成10年より放牧開始

草種はペレニアルライグラスを主体に造成
放牧用簡易牧柵を設置し秋に本格的電牧敷設
出入口付近の泥濘化を防ぐために、泥濘化防止用クrimp金網を設置

放牧地の土壌分析の実施と施肥管理
放牧草にCa剤の葉面散布効果の実証試験

11



12

放牧にして良かったこと

労働が楽になった
牛舎の中の施設が長持ちする
夏期間の堆肥処理が楽になった
注目を受けることで、励みにもなる
比べる事例が少ないので気楽である
モデルが少ないので工夫をする

13

放牧は何が難しい

乳成分の維持確保・・・乳価に影響
求められる物を生産することが酪農家の
最低限の義務(売れるものを作る)
牧草の生育ステージに合わせた、放牧管
理による採食量の確保
MUN・乳成分を見ながらの牧区コントロ
ール

14



乳牛ショーを家族で楽しんで、仲間づくり

15

家族のゆとり

楽しみ・・・その時どきに来ることを家族
で楽しむ(特別な事でなくても)
生活における家族の役割がある
家族で沢山話をする
住宅を新築する時のテーマ
どうしたら楽しめるか？
快適に暮らせるか？

16



17



18

④ 無畜舎酪農と季節繁殖

清水町 酪農家

出田 基子



出田もとこといいます。清水町で酪農をしています。ホルスタインが140頭ぐらいます。今、お産の最中で季節分娩で春にお産をさせるようにしているので、帰ったらまた増えているかもしれません。

〈学生時代〉

出身は岡山県、岡山県出身の方いますか？ いませんか？ あっ岡山？ どこですか？「岡山市内です」市内ですか、あぁうれしい。私は岡山市内、後樂園の近くで生まれて育ちました。家は普通のサラリーマンの家庭で普通に小学校、中学校、(中学校のときにね、成績優秀で親は鼻が高かったらしいんですけども、)高校まではちゃんと普通の進学校に行きました。で、高校に入って友達が卓球をしてたんですね。で、その卓球をしている友達と卓球部を見に行きました。そして彼女も卓球をしていたんだけど球がもうラケットに全然あたらないのね。あっ！ これなら私にもできるんじゃないか？と思って卓球部に入りました。そしたら卓球の虜になってしまって、で、なんていうのかな？ 運動神経はそんなによいほうではなくて、苦手だったんですけども卓球を始めて、トレーニングする、走る、球を打つという訓練を毎日していくうちに、できないことができるようになった。その快感ですね。試合にも出て、勝てるようになる。で、高校3年の前

半まで卓球に明け暮れました。気がついて3年生の一学期の試験を受けたら、えっ？ こんなんじゃ、大学には入れないよ！という成績で愕然として、で、卓球で仲間も増えたし、いろんな経験もさせてもらったしスポーツってものすごく自分を鍛えることができよかったです。けども、じゃ、どうしよう。3年生後半から必死で勉強しました。で、大学にはいってもやっぱり卓球をやりたいという目標を持って、受験して地元の岡山大学に入りました。大学に入ってもまた卓球に明け暮れて、1年生の時からレギュラーになって、大学対抗にも出ましたし、全国の国公立大会で、全国優勝団体でしたのかな？ 高校と大学は、私、卓球人生でした。

〈結婚〉

その卓球をしているときに、ふっとこっちを見ている視線に気がついたんですね。おんなじ卓球部の中の先輩に出田義国って言う人がいました。出田っていうのはめずらしいでしょう？ 熊本出身なんです。九州、熊本出身の人います？ 熊本の方なら出田って聞いたことあるかもしれなけど、出入り口の出に田んぼの田って書いて出田ってすっごい読みづらい、呼びづらい。その先輩が練習相手になってくれました。で、強くなるには、私は運動神経が鈍いし、人の倍は練習するんだっていうことで、大学に入ってから早朝練習、終わってから最後まで練習していました。その相手をしてくれたのが夫だったんですけども。話をしていると自分の牧場を持ちたいっていうのが彼の夢でした。私は農業とは無縁の生活をしていましたし、農業っていうのは先祖代々の土地を持ってそこを耕している人が農業っていう職業をできるんだと思っていましたから、自分が農家をやれるとは思っていませんでしたね。彼は牛飼いにになりたい。農業じゃなくて牛飼いにになりたいと言いました。牛飼いにになりたい私も動物が好きだったし自然が好きだったから、これは面白そうだなあと思ったのが今ここでこうやって話して



いる酪農家をやってるきかけになりました。そして彼が卒業して、私も卒業して結婚ですけども、最初は岡山ですから岡山の県北のミカモ村っていうところに和牛の繁殖をやっているところに一応、就職したんですね。で、自分でやりたいって言うても学生だからお金は全くない。で、そのミカモ村っていうところの山の一角でも借りて、まず和牛を飼いたいなあと思ったけど牛一頭も飼えない。あっ、牛飼いは牛をかうお金があるんだってそのときに初めて気がついたんです。やあ、資金を作らなければどこいっても相手にしてもらえないし、っというのでそこを辞めて、町へ2人で出て、資金作りを始めました。

〈資金作り〉

で、2人でね、町で働いて資金作りをするっていてもなかなか貯まらないよね。で、最初ががんばってがんばって2年くらいかけて30年前のだから、30……もっと前かな？ 50万くらい貯めてそれを頭金にして家を買って、で、値上がりを待ったんです。したらその当時ね、400万だった家庭住宅が850万になったの。倍になったの。2年住んでローン払って、あっ、このくらい入れば自己資金になるかなって思って、で、行ってローンを返して、で、その残りでどうか探したのね、岡山とか九州とかね。だけどその家が値上がりした分、全国、日本全国の、わかるかな？ 田中角栄の列島改造でね、日本全国の土地が暴騰してたのね。で、少々の金では買えない。で、なかばあきらめてブラジルに行こうかなって思ってた頃に北海道に来てください、っていう話があって、北海道の清水町に来ました。そしてその牧場で2年間人に使われて牛を飼ってたらね、自分がこうやりたい。こういう成績を上げたくてもなかなかね、思うようにさせてもらえなくて、それで、はあ、自分でやるしかないって思ったときに酪農するって話を聞いてそこを見に行きました。まだね、ずいぶん雪が降ってる、あの、積もってるときで、ホントにもうね、山深いところだったんだけど、そこを見て夫はこれはね、酪農に最適の地と直感したと言いましたよ。で、今、今日まで28年間経ちました。ホントにね、面白くて楽しい牧場作りです。えっと、どんなところかっていうのをビデオでちょっと見てもらいたいと思います。

〈ビデオ紹介〉

『清水町に住む出田義国さんは130頭の牛を飼う酪農家。九州、熊本県出身です。広大な牧場での酪農を夢見て16年前に移住してきました。出田さんの酪農は牛舎を使わずに牛を飼う無牛舎酪農です。牛は搾乳の時を除いて、厳しい寒さが続く冬も吹きさらしの放牧地で過ごします。立派な牛舎を使った近代的な酪農とは正反対なやり方です。それでも、牛一頭当たりの年間の搾乳量は全道平均を大きく超えています。牛はもともと寒さに強い動物です。それなら牛を狭い牛舎に閉じ込めずに広い放牧地で自然のまま育てたい。そんな出田さんの思いが広大な十勝の大地でようやく実現しました。「十勝にはね、そういう可能性がまだ残ってたわけ。日本の中でもね。で、自分でやり始めて15年たった今、だいたい自分でね、考えてきた、酪農を、やれるよな。」気の遠くなる程、道は遠かった。やっと2人の農地を得、職業は農業です、っとなら言えるようになったのは12年が過ぎていた。子育てと牛飼いで精一杯だった。でも、他に何がいるだろう？ 牛が増え、ますます忙しくなるばかりだけれど、2人でこれだけのことがやれるという誇りと満足感と共に、まだ今からやりたいこともいっぱい。こんなにおもしろい生き方が他にあるだろうか？「十勝に来たおかげで、こういう自分の人生で、ね、ホントにいいところに来たと思ってますね。」出田さんが巡りあった十勝の大地。夢多き開拓者達をこれからも呼び続けるに違いありません。』『冬で冬眠してたものがさ、休んでたものが、春に、エネルギーの爆発ですよ。この十勝の自然の恵みが一気に噴き出してるでしょ。それをすこしでも、たくさん牛乳の生産に結び付ける努力をしてるつもり。それが生きがい。』北海道清水町にある出田牧場の朝です。牛追いに出かけた出田義国さんの乗るバギーのエンジン音が、草地に響いています。放牧主体で酪農を行う出田牧場には、およそ130頭のホルスタイン達が元気に暮らしています。出田さんは春から秋までの間19に分けた牧区に、牛達を隣放牧させています。牛や草の様子を見て、牛達を移動させる時期を決めている出田さん。この日、出田さんは新しい牧区へと、牛達を移動させました。広い草地で牛達は、新鮮な牧草をおなかいっぱい食べています。出田さんがこの土地に入植して酪農を始めたのは、昭和52年のことです。24haの広大な放牧地。しかし当時、酪農跡地だったこの土地は、岩石や笹、雑木林ばかりの誰もが

見放していた土地でした。当初、山地酪農を志していた出田さんは、酪農するにはこんな素晴らしいところはないと直感し、牧柵を作り、林を切り開き、一つ一つ自らの酪農をつくりあげていきました。そして、これまでの22年間、出田さんはずっと牛舎を持たずに放牧での酪農を続けています。「もちくさって言うのはねえ、あのお、ここにはないから、なかったからっていう、これにつきるんだけど、あのお、入植するときには、ホント清水町内でも五百何十戸かねえ、酪農家あったんだけど、その中でも最低の酪農家だったよね。もお、資金的にどうしようもない。まあ、借金して始めたんだけど、それでももお、限度オーバーでものすごい、今で言う不良債権になる、山腹に置かれるような所からのスタートで、その中で牛舎なんて望みがない。でもやりたいし、やれるっていう自信はあったし。」放牧酪農への熱い思いを描き続けている出田さんと、結婚以来30年間ずっと人生を共にしてきたのが、妻であり最良のパートナーである、もとこさんです。岡山大学で農業を学んでいた学生時代出田さんは、卓球部の後輩だった、もとこさんと出会いました。将来は静かな山村で牧場を持ちたいと、夢を語る出田さんに、もとこさんはこれからきっと面白い人生になると予感した、と言います。『出田牧場の牛達は一日のほとんどを、広大な放牧地の中で過ごします。6月、やさしい光が差し込む放牧地で、のんびりと草を食む牛達。牛達の時間がここにはあります。出田さんが遠くで見守るその先には、1頭の牛がいます。お産が始まっています。草地の上で自力で出産する牛達。ここでは、自然のままに命が生まれ育っていきます。出田さんは冬でも牛達を放牧させています。寒いときにはマイナス20度をこす環境の中、雪は暖かく、牛達はその上に寝そべってときを過ごします。そして、綿毛のような毛で自らを覆うことで寒さに適応できる力を身につけているのです。自然の力を大切にして酪農を続けてきた出田さん夫妻には、牛達と共に育ってきた4人の子供達があります。出田牧場の搾乳室。放牧地からやってきた牛達は、空いている場所へと、自ら進んで入っていきます。朝の搾乳を担当しているのは、もとこさんと次女の朝子さんです。両親から自然との関わり大切さを学んできたという朝さんは、まもなく地元の畑作農家の青年と結婚する予定です。「とりあえずなんか幸せを作っていけたら、いいかなと思いますね。やっぱり幸せを作るのっていうのは、やっぱり周

りのものを大事にしたりとか、そういうことなんで。」6月初旬、どこよりも早く一番牧草の刈り取りをしているのは、大学で畜産を学び、昨年からは出田牧場の後継者として働くのは、長男の大きいです。「親の苦勞さんの見てきたから、こんな牛飼いにあこがれてとか、そういうのはあんまりなかったんですけど、ここが好きですし、あと、牛乳もおいしいですし、まあここで、ある程度裕福な暮らしができて、これだけのいいところで暮らしたら幸せかなと思って。」青空の下、穂が出る前の最も栄養の高い時期の牧草を刈り取り、サイレージを作る、出田さん親子です。この土地で育ったいい草を牛達に与えることで、良質な牛乳を生産していきたいと考える出田さん。大地の恵みである牧草で、最高のサイレージを作ります。朝と夕方、放牧地にいた牛達は搾乳室へと向かいます。搾乳室の隣にある給餌場では、出田さんが丹精込めて作った最高のサイレージを、牛達がおなかいっぱい食べています。出田さん自身が築き上げてきた風景が広がっています。四季それぞれに表情が変わる美しい牧場の姿は、出田さん自身が、自ら手に入れた幸せです。ここは、たかさんの命が輝いている場所。十勝の自然が育む豊かな大地を恵みを生かして、牛も、人も幸せになれるような酪農を築き上げていきたいと願っている出田さん。出田牧場の命の糧である牧草は、出田さんの生き方そのものように輝きながら、まっすぐに天に向かって伸びています。』はい、ビデオは終わりました。で、最初のビデオはね、平成3年で15年ぐらい前の写真。で、それからその次のは、平成11年かな？ 5、6年前のだから、まだちょっと若いね。今よりね。で、あの中で、後の方に写真が何枚か、フィルムが出てきたでしょ？ あれ全部ね、私が家の中から、窓から撮った写真です。こんな風景を一年中見ながら、生活しています。それから、さっきの説明だけど、牧草の収穫体型ね、今はちょっと変わってて、あれはきつと、キャンプワゴンっていうので草を持ってきてただけだけど、今はねえ、こんなビッグヴェール、角型ビッグヴェールっていう、高圧縮のね、梱包を作って、それをバンカーサイロに詰めてサイレージを作っています。これちょっと補足説明です。

〈無畜舎酪農〉

さっき新名先生も言われたように、出田牧場には牛舎がない周年放牧。放牧って冬も雪の中に寝てたよ

ね！ あれ、放牧って言えるかどうかちょっとわからないんですけど。周年放牧です。さっき夫が言ったように最初はお金がなかったから、牛舎は建てられなかった。で、今、搾乳室も前の人が使ってた牛舎の中を改造してそのままパーラーに、今でも使っています。で、牛舎はそのうち建てるつもりだったのね。儲かったらね。何で建てないの？ 家あったしょ？ 住宅ね。それ平成元年に建てました。寒冷地住宅の決定版っていうとっても暖かい家なんですけど、人間は暖かい家に住んで、牛は寒そうでしょうって言われるんですけども、牛を見てたら牛舎があっても入りたがらないの。それを見て、あっ！ 牛は外のほうが好きなんだ。牛舎は人間のためにあるんだなっていうのを牛の行動を見て気がついたの。繋がれるのも嫌だし、建物の中にいるよりも、冬でも外で伸び伸びと寝たり起きたりしてるほうが、牛にとって幸せなんだな。というのに気がついたっていうか、牛が教えてくれたの。で、牛舎っていうのは人間が作業しやすいように、仕事しやすいように、人間が寒くないように、能率的に儲かる作業をするために、作ったものであって、牛のためじゃないんだな、っていうのに気がついたのね。牛を見てたら冬でも、あんな雪の上で寝てても、ちゃんと温かい牛乳を出してくれる。すごいね！ 牛ってね！ で、牛の適温っていうのはマイナス5度からプラスの12、3度かな？ っていうんだけど、マイナス20度くらいになってもさっきビデオでもいったように、雪っていうのは0度に保つ働きがあるのね。で、雪の上に寝てたら乳頭もちゃんと保護してくれる。初めの頃はね、凍傷とかあったんだけど、今ほとんどないね。すごい遺伝的にもだんだん強くなってきて冬でも雪の中に寝ています。

〈季節繁殖〉

今ね、お産のピーク時で、放牧っていうのと季節分娩、うちは4月から6月の末くらいで、お産のだいたい80%をお産するようにも苦風にしてるんだけど、必ず放牧と季節分娩はセットです。っていうのは、放牧で、今の草が一番栄養価が高いのね。CPで21とか22。CPってわかるかな？ 過消化タンパク。タンパク質が一番多いの。もうちょっと5月の半ばくらいから、そういうとってもいい草があるんですけど、穂が出る前の草っていうのが牧草が一番栄養価が高いの。タンパク質が高いの。で、配合飼料とか買っても21と

か18とか20とか、なんとか21とかあるでしょ？ あれは過消化タンパクのパーセントなのね。それが今の生えてる牧草は21以上23も25もあるの。で、うちは放牧で、おっぱいを出すようになったら、だんだん子供が成長するに合わせて、やっぱりたくさんでるようになるよね。2、3ヶ月、4ヶ月、5ヶ月って、だんだんだんだん、たくさん飲むようになるから増えるの。そしたら子供がいなくなったら、だんだん減っていくのね。1年周期なんだけども、牛乳の成分分かる？ 何が一番多い？ 水が一番多いよね？ 水分何%だと思う？ 水分が多いけど、その他にタンパク質、乳糖、いろいろあるよね！ ビタミン、ミネラルも入ってるし、それを仔牛の成長に合わせていっぱい出すのに、今の、すごい栄養価の高い餌が食べれるときと、ちょうどピークを同じにするのが、放牧と、季節分娩をセットにする。それをセットにしてるから、購入飼料、濃厚飼料とかいうんだけど、輸入の穀物、大豆、トウモロコシ、それから何かあるかな？ ふすまとかいろいろあるけども、タンパク質の高い穀物っていうのは、値段が高いよね？ 今いくらするのかな？ うちは、大豆使っていないからわからないけども、そういうタンパク質の高いものを、買わないで、タンパク質はうちの牧草からとる、で、牛乳の生産に結ぶついている。で、買うのは安い粕類。で、低コストにむずびついています。それと、大豆とか、トウモロコシとか、輸入穀物？ アメリカからだいたい輸入しているけども、人間食べれるよね！ で、世界中で、飢餓で、1日に、何人の子供が死んでいるのか？ 飢餓人口が何人か？ その、本当に戦争で死んじゃう人もいるし、飢餓で死んでる子供たちのことを考えると、人間が食べることのできる穀物をどんどん食べさせて牛乳を搾ることに、すごい抵抗があるよね。だから、タンパク質は自分の土地から採って、牧草からとって、で、あとを、安いもので補おうっていうのが、根本的に基本的に、うちの飼料体系のなかにあるの。それも低コストの一つになっているんだけど、で、放牧した牛が、どれだけ草から栄養を取れるか、取ることができかっていうのは、やっぱりねえ、仔牛のねえ、育成のときからの育成の仕方にもかかっているの。最初からうーんと、早期でよかったけど、うちは、だいたい35日で離乳してるんだけど。それから、放牧するまでに穀物類はあんまり食べさせないで、牧草地帯の牛にするために、牧草を仔牛が好きで食べやすい草をあげるんだけど、

それによって、もう生後4ヶ月から外に、親と一緒に放牧すんの。で、4月、5月、6月くらいに生まれた仔牛は、そのまんま4月から、4ヶ月から、えっとだから冬も外で、その～、パンフレットにもあるでしょ？ こういう風に外で仔牛が寝ているのね。で、何て言うの？ その～、かわいそうな牛が主体だっていう声もあることにはあったんだよ。でも、うちの牛の平均産次ってわかりますか？ うちの牛が平均で何産しているかっていう数字。何産まで赤ちゃん産んで牛乳搾れるかっていう数字なのね。で、今、全国平均かな？ 北海道平均かな？ 2.5産とか2.6産とかね、乳牛の2.5産とか2.6産っていったら人間でいったら30代ちょっとくらいかな？ そのぐらいが平均なの。それはどうしてかっていうと、若いときから、最初っからお乳をたくさん食べさせるために、穀物をたくさんあげるとか、牛がつつやつやしてるでしょ？ で、なんのために牛に欲求があるかっていうと、人間が食べることができない、牧草を食べてそれをタンパクに変えてくれるの。人間でさ、草を食べてもタンパクならないね。クローバーってタンパクいっぱい入ってるんだけど、あのクローバー食べても人間はそれをタンパク質に変えることができない。だけど、牛は4つの胃があるために、草を食べたらタンパク質に、牛乳にも変えてくれるしお肉にも変えてくれる。そういうすばらしい能力があるのね。で、その牛の能力を最大限に発揮しながら酪農をしています。で、放牧していると、牛が自由に歩いて考えて、いろんな季節の変化に対応できる能力があって、牛、目持ってるし、頭持ってるし、五感ていうのかな？ 嗅覚とか、全部をね、もう最大限に活かして生活できるようになるっていうのはものすごい能力なのね。で、いろんなことも乗り越えていくし、そういう牛に教わることがものすごく多くて、で、私たちが考えている以上の能力を発揮してくれます。そういう風に飼ってたら、今、うちで平均産次が4産くらいかな？ 4産っていったら人間の何歳だろう？ 何歳くらいですか？ だいたい平均4産くらいまで搾乳しています。で、搾乳できなくなった牛はお肉になるんですけどね。平均4産くらいまで。で、牛の放牧を最初からしているだけでも、いま、28年目か。で、最近放牧もいろいろ、いろんなところで取り上げられてきたし、農水省の方でもね、放柵放棄地を放牧に使おうとか、国の方でもそういう動きになってきた。それから、酪農の方でも放牧が割り合い取り上げられるよ

うになったし、ニュージーランド放牧も同じ、5、6年前から入ってきたのかな？ でも、昔から放牧っていうのは日本にあったし、日本型の放牧っていうのもあってもいいと思うのね。で、本州のほうでもずっと昔から放牧してると思います。で、ニュージーランド放牧とうちとちょっと違うのは、牛を閉じ込めないことかな？ きれいに食べさせるために牛を閉じ込めちゃうのね。けどうちは、餌場とか、お水のところと、放牧地とはいつも牛が自由に行ったり来たりするように、放牧地設定してあります。

〈子育て〉

最初、昭和52年に入植して、そのときに2人子供いて3人、4人ビデオに映ってて、娘はもう結婚したんですけども、長男はうち、手伝ってくれてます。その子供4人、子育てするのに、普通の既存の農家だったらおじちゃん、おばあちゃんいて、子供みてくれたりご飯作ってくれたりするのね。が、新規入植だから、お父さんとお母さんだけしかいないから、2人で仕事したら子供をほったらかし？とかいうのは、私には耐えられなかったの。で、お父さんは酪農を夢見て入植した。もちろん酪農は成功しなきゃいけないけども、私は、子育てというのは人間を育てる、人間をつくる。私と同じ人間を4人、生んじやったんだから、ちゃんと育てなきゃならないと思ったのね。それは大変なことだと、ものすごい責任感を感じて。で、生活を子供がちっちゃい頃は子供中心の生活にしました。で、酪農はそれができるのね。自分で仕事してたらね。昔、酪農家は朝が早くてとか、大変だっていうイメージがあるでしょ？ 皆、あるでしょ？ 早く搾乳しなきゃならないっていうイメージがあるでしょ？ あれはね、昔、朝早起きして手搾りしてね、集乳缶に入れて。で、車がきてるから持ってってたのさ。今はね、3回搾乳してるとこもあるけども、バルククーラーっていうのができて、それものすごく性能がよくなったから、いつ搾乳してもいいのね。で、私、子供ちっちゃい頃には、朝ごはん食べて、保育所とかにやって、それから朝の搾乳しました。で、夜は子供がちっちゃい時ね、子供寝かせてから搾乳したのね。夜中にね。大変だったけど、でもホントにおかげさまで、子供ちゃんと皆大きくなって。

〈酪農のおもしろみ〉

それで、子供がだんだん手を離れていって、私の手を離れてきたら、プロ意識にまた目覚めたっていうか、よし！ これはおもしろい！ 仕事をして、自然は裏切らないのね。自分がやったら自然とか動物っていうのは、やったでやっただけのことを返してくれる。で、それは、私初めから経理してるから、筆記簿記でうちの経理全部してるし、自己申告もしてるんだけど、その数字に正直に出てくるのね、自分がやったことが。それはもう、おもしろくておもしろくてしょうがない。仔牛一つでも育てるのでも、産んだときお母さんがなめ回して、やってたでしょう？ で、おっぱい飲ませてるよね？ で、あれを連れて帰ったら、今度は仔牛と分けて、で、私が哺乳するんだけど。その仔牛を哺乳するときでも、親がするようにしてやるのさ。かわいがってかわいがってね、撫で回してね、撫で回してね。そしたら、その牛との信頼関係ができるでしょ？ でもホントはね、2週間で出て行っちゃうんだけど、雌は全部そうやって育てるの。したら初めはあんなして親についてるけども、あと私にミルクもらうようになったら、今度は私をお母さんだと思ってるのね。だから育成牛になっても、若牛になっても、親になっても、私を親だと思ってるし、私は自分の娘だと思ってるのさ。140頭の牛全部。で、性格も知ってるし癖も知ってるし。で、親の癖は子供に似るしね。足上げしてしっぽを良く振る、その子供はしっぽ振るしね、コノヤロウ！ もうホントにね、遺伝っていうのは、すごいよ！ 遺伝的能力っていうのは。皆もそうだよ！ 親の、両親の、ちゃんとDNA受け継いで、今ここでこうしてるのね。で、私はそうゆう目でうちの牛を見るから、牛と一緒に生きてるっていうのかな？ 牛と一緒に生活してるっていうのかな？ 牛を飼ってるんじゃないなくて、牛に飼われてるんじゃないなあ？ 牛に生かされてるっていうのかな？ 牛のおかげで生きてられるっていうのかな？ そんな感じで毎日過ごします。

〈農業は命を育てる仕事〉

農業っていうのは命を育てる仕事。命っていうのは人間の命じゃなくて、土の命、空気の命、植物の命、水の命、動物の命。そんな全部の自然の命を全部受け入れて、受け止めて、私達の命が育ってますよね？ 私達が口にするもの、生まれてからすぐ口にするもの、

それはミルク。ミルクの中には全てが含まれているのね。パーフェクト！ その後、赤ちゃんから大きくなるまでには、食べるものを食べて、大きくなったんでしょ？ それみんな命を食べてるのね。植物にしたって、お野菜にしたって、魚にしたって、お肉にしたってね。で、そうゆうのを感じるし、自然の近くに住んでると、動物もね、植物もね、よく見たらね、自分のために生きてるんじゃないなくて、自分の子孫を残すために必死で生きてるの。命がけで生きてるの。闘ってるの。それを感じるでしょ？ たんぽぽでもきれいなあと思ったら、すぐ種になっちゃうでしょ？ で、自分枯れちゃうでしょ？ それが命なのさ。で、そういうふうに、植物でもそういうふうを感じるし、動物でも見てたらね。うち、犬、さっきいた犬と猫がね、30匹ぐらいいるんだ。猫はね、牛の餌にねずみがくるのを防いでくれて、仕事してるんだけど、猫の子育て見てたらすごいもんね！ もう必死で毎日がりがりになってねずみ取ってきて、子供に食べさせてるのね。そんなのを見てたら、あっ！ 人間なんて、動物や自然には及ばないんだなあ。なんて思ったりしています。で、農業の基本っていうのは、その土地を活かす。農家としてやらなきゃならないっていうのは、与えられた農地、大地の生産性を最大限に活かしながら、食料の生産をすることだな。それが私らの使命なんだな。と思いながら毎日酪農をやっています。

〈スライド紹介〉

これビデオ映ったよね？ 場所はパンフレットにでてますね。これもパンフレットにでてますね。これはね、家の窓から写した写真。いえのねえ、2階から写したのかな？ 家の窓から、部屋の中から写しました。こういう風景です。あっちの山は剣山です。これは逆に放牧地の一番高いところから、十勝平野を見渡しながら写しました。これだけすごい傾斜あるんですね。これは放牧地の牧草の写真です。だいたいチモシーとクローバーと、こんな割合で生えています。でこれは、家には牧場看板で、こう立ててあるんですけど、こういう放牧地。1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12……これ18まであるかな？ だいたいこれぐるぐるローテーションしてます。それは兼用地です。放牧してる場合にどんどんどんどん回していって、今の時期っていうのは、1日に10cmも15cmも伸びるのね。草がね。で、そういうときは伸びすぎるから採

草して、冬のサイレージにします。で、その18は、乾乳牛を、夏はわけて放牧している。夏は搾乳専用の放牧地では、ちょっと栄養価が高すぎるので、乾乳牛だけ向こうに分けてあります。これは離乳してから、こういうパドックに移します。これは人間でいったら幼稚園か保育園かな？ 哺乳してるときは1頭ずつかわいがって育ててるんだけど、これが幼稚園クラス。今度、群れに慣れさせるためのパドックです。こんなねえ、簡易的な小屋で、これでも酪農はできる。っていうやり方でやっています。これで、4ヶ月くらいまでこういうパドックで、群れ飼いを覚えるためにこういう一群れにしています。で、4ヶ月たったら外に出します。これは、群れ飼いにしているところから、多分除角をしてから出すところだと思うんですけども。あれが住宅ですね。で、住宅で、後ろにあるのは体育館です。体育館をねえ、造っちゃったんですよ。卓球をしたでしょ？ で、お父さんと2人で卓球をしたくて、体育館建てただけで、ここは、バスケットボールしたいとか言って、バスケのゴールを造ったり、これ、体育館ですね。で、家からつながって入れますし、こっちからも入れます。体育館なんて程のものではないんですけども、とっても私達にとってはうれしいスペースができました。これが鉄板の飼槽、餌場なんですけども、4ヶ月で親と一緒に出しても、最初は食べられちゃうのね。仔牛ね。だから先にここに線引っ張ってね、ここで最初に仔牛に、ちょっと配合飼料とか、食べさせることができる場所です。それから、その向こうのスタンションがある、中には、サイレージが入っています。冬はその中にサイレージをいっぱい詰めてあって、両側から牛が食べるんですけども、とにかく豊食です。おなかいっぱい食べさせる。牧草を、草をおなかいっぱい食べさせる。っていうのがうちの飼料設計の基本です。で、全頭並ばないので、餌パツと出したら親が最初に食べて、仔牛達はちょっと待つて。で、親が向こうへ行ったら、その後食べる。そういう全体の群れの動きもだんだん慣れてきてね、上手にね。話はそれるけども、子供のいじめとかあるでしょ？ 転校してきたらいじめられるとかね。牛だっておんなじ、ちょっとよそから入ってきたり、新しい仔牛出したりしたら、みんなでいじめるのさ。それが社会生活をする動物の当然のこと。で、それに耐えられる仔牛をつくってくの。それが私の仕事。群れでというか、社会生活をする動物。肉食動物じゃなくて、

肉食動物は1人で行動するけども、こういう動物は社会性を持っているのね。だからこんな大きい、小さい、いてもちゃんと順位が決まってしまうと、そんなかみみな平和に暮らしてます。仔牛が放牧地にいる、こんなして歩いて、高いところに上がって行くんですよ。ここは、大雪にちょっと雪降ったところで、から松が黄色になってるから、10月過ぎぐらいかな？ で、一緒に出した仔牛はね、いつも、搾乳牛になっても、ずっと同じグループですね。子供のときにあいう群れになったら、仲間です。一生仲間で、群れの中でも同じ年代の仔牛達、牛達、親になっても仲間です。これもそうですね。もう雪がもうすぐ降るっていうときですね。そして、仔牛だけかたまっています。これも、家の窓から写しました。朝、これはね、雪が降って、まだ日が昇って雪がまだ溶けてないよ。で、こういう感じで雪の中で牛達が寝ています。時間がなかったら見れないかなあと思ったけど、見てもらえてよかった。

そういうふうになんか大切にすることが、私達自分自身を大切にすることかなあ。私たちが生まれてきた意味っていうのは、ずっと引き継がれてき命の継続っていうのを、引き継いでいくことかな。そのためには食料は必要だし、食料を生産するために、農業を大事にしていかなきゃならないと思いつつ、酪農をしています。どうもありがとうございます。

〈質疑〉

Q: 放牧場で自然分娩されるって言われたんですけど、これのメリットとデメリットがあれば教えてくださいんですけども。

A: デメリットは、夜中にお産するときに再々見に行けばいいんですけども、見に行かないで難産になって、子供が死産になってることが、1年に2頭ぐらいいるかな？ 若いときは夜中でも見に行ってたんですけども、分娩房を作っていないっていうのは、普通は分娩房に入れてお産させるでしょ？ 牛舎があるところは。けどね、群れで飼ってる牛って、1頭だけ別にするとものすごいストレスなの。病気で自分が立てなくても、寝てる場所からみんなのそこ行こうとするの。で、例えば病気があって、青草食わせないほうがいいよって獣医さんに言われて、繋いどいて乾草だけ食わせなさいって言われても、そうやって繋いどくと、かえってストレスで死んじゃうの。群れで飼ってたら、で、そういうのがあって、1頭だけ別飼するっていうの

はものすごく抵抗があって、いつもみんなと一緒に安心した形で飼いたいんだけど、だいたいね、経産牛はちゃんと分娩して、あんなふうに仔牛もきれいなめて、初乳飲ませたり飲ませなかったりすることもありますけども、でも、デメリットっていうのは、年間に1、2頭死産になります。メリット？ メリットって、他の方がいいと思わないから。すいません。ありがとうございます。

Q:パンフレットに冬も放牧してあるような写真が載ってるんですけど、十勝は大雪降ると思うんですけども、そのときもこういうふうに放したままなんですか？

A:そうです。入れるとこないだもん！ 140頭も入れるとこ。

Q:大雪って1日に30cmとか……

A:90cm降ったことがあります。

Q:それで大丈夫なもんなんですか？

A:大丈夫なんです。あ、あ、あ、牛にねえ、牛いるでしょ？ その上に雪が降ってくるでしょ？ したら牛の背中の上はどうなると思いますか？（雪が乗っちゃいます。）（積もってると思いますか？ そのまんま？ どうして？）（牛寒いから動かないからとか。）（動けないから？ じゃあ人間毛生えてるよね。こうやって雪降ってきたらどうなるんですか？）（落ちる。溶ける。落ちる。）（溶けるでしょ？）（溶けますね。）（こっちは暖かいから溶けるでしょ？ そのうち凍っちゃうけど。とけるでしょ？ でも、牛の背中に雪そのまま乗っちゃうんですよ。動いたら落ちるよ。氷じゃないから。でもそれだけ断熱がすごいんですよ。っていうことは、溶けないのさ。で、自然の動物っていうのはそうだけど冬になると段々、長い毛の間にうぶ毛っていうか何って言うんですか？ ずっと細かい毛が生えてくるのね。で、びっちり毛が生えてくるの。で、それが断熱になるし、体表面の毛細血管をきゅっと縮めてね。そしたら断熱効果がものすごくあって、上の雪が溶けないってことは、熱が全く逃げないってことだから。ねっ！ 溶けるってことは、熱が逃げてるでしょ？ そしたら外で飼ってる牛は、雪がそのまんま下に落ちちゃうの。熱を全く逃がさないからだの作りになってんの。だから寒くないの。で、祖飼料をおなかいっぱい食べて、胃の中発酵するわけでしょ？ 養分あるから。で、その熱で、牛自体は暖かいの全然。で、雪がこうなって、埋もれちゃうかとかっていうん

だけど、90cm雪降ってもねえ、牛が踏んだら2cm以下になっちゃうんです。雪っていうのは。ねえ。押さえたらくうって縮まるでしょ？ だから牛が歩いたところは、雪がどんどんどんなくなっていくっちゃうの。で、寝るときは雪の中にすぽっと入るけども、さっきの表紙のような感じで、牛の寝てる場所はへっこんでるけど、手前の方はそのまま、積もったまま。わかるかな？ 背中の中はさらさら落ちてしまう。で踏みつけて歩きます。で、牛の歩いた後は、人間も歩けるけども、牛の歩いてないところを歩こうと思ったらすぽっとなっちゃう。そんな感じです。踏み固めてくれます。雪を。）

Q:もう一つ聞きたいんですけど、1つの牧区の面積はどれくらいなんですか？

A:だいたい、なんぼって測ったわけじゃないけど、地形に合わせてだいたい1haかな？ 普通のときは、朝搾乳の前に、次のところを開けて牛を全部追い出して、そこを閉じて入ってくるの、今日のところを閉じて入ってくるの。で、行けば次のところに行けるようにして入ってくるんだ。朝。したら搾乳終わったら次のところ行くし、夜搾乳しても、また次のところ。で、だいたい1日ずつ回していくの。ここに入れるときは、この通路開けんのね。で、次ここ入れようと思ったら、ここに牛がいたら、次の日は、こう開けて、これぜんぶ折り返してくると、ここ止めとけばここは入れるように、その次の日はここに入れるように、ここ止めちゃうのね、通路。4に入れようとしたら、ここストップして入れるように、5に入れようとしたら、ここストップしてこうしとくとね、だいたい1haで兼用地、ここは2ha。だから、1日半。でね、面積だいたい1haあるんだけど、そこに何日出すかとかっていうのは、草の伸びで全く違うの。で、秋なんかは朝、晩で変えることもあるし、今ならまだ残ってたなら、きれいに食べさせるために2日入れたり、だって1日に10cmも15cmも牛が食うより伸びが速い。て思うようなときもあるのさ今頃だったら。そういう時は2日入れたりします。でも足りないほどはおいとかないで、それに3日目っていったら、もうちょっとだめかかってというような日もあるし、それから、どのくらいの面積にどの牛の頭数入れて、ちょうど放牧でいいかっていうのは、まったく決めれない。っていうのは、その土地にもよるし、草勢にもよるし、どのくらい草が密度がどのくらいかっていうので、草の量まったく違って

くるのさ。うちの放牧に興味があるなら、放牧地を見てごらん？ びっちり密度あるから。草っていうのは、作物っていうのは、こう植えてて、で、だんだん密植していったら収量多くなるよね？ ぼんぼんぼんって植えるよりも。でも、ある一定のところを過ぎると収量落ちてくるのさ。密度が。ね？ 過植になると。ところが牧草は、いくら密度が濃くなっても収量落ちないの。だから裸地がなくて、密度がびっちりの方が、で、そういう放牧地にするの。牛を借りて牛のそのローテーションと、それも、その土地のソウセイにもよるだろうし、草にもよるだろうし、気候にもよるだろうし、一概には言えないの。その土地にあった草もあるし。はい、その他、何でもいいですよ。他にありませんか？

Q: パーラー前とか放牧の通路とかって、泥濘化してないですか？

A: あのー、えっとね、これが搾乳舎なんだ。昔の、まえ私より前に入った人が、牛舎に使ってたところの中をアブレストパーラーにしてるんですけども、そのパーラーにしたときにこのフォールディングエリアとこのへんの牛の通路、このへんまではべた打ちました。もう汚れたら洗うのも大変だし、牛も乳房炎になって大変だから、だから、少しずつね、これも全部ここ飼槽、さっき赤い飼槽あったよね？ これが赤い飼槽。あの、このへんから写真撮ったもんで、これが飼槽で、これがさっきサイレージ入ってたところなんだけども、牛があるところほとんどコンクリ打ってあります。で、ここずっと通路なんだけど、このへんまでやって、このへんまでやって、だんだん伸ばして行って、今このへんまでコンクリ打ってあるかな？ 通路のこのへんまで。上の方まではなっていないけど。だから、しおれてくるのは一番上。でも上の方は、行く回数がすくないからね、そんなにならないのね。もう自分の、なんていうの？ 今年はここまでべた打とう。とかいってだんだん牛の頭数が増えるにつれて、近くこうなってくるから、もう、コンクリ打ちました。途中まで。(ありがとうございます。) 通路は大切だと思います。

Q: あともう2つあります。あと、配合、薬とかあげてるそうなのですが、少ないと思うのですが、ピークでどれくらいあげてるんですか？

A: あのね、一年中6kg。産むとき、分娩時期には、分娩後10日までは少ないけど、10日経ってから乾乳

まで一律6kg。だから、配合で乳搾ろうと思ってないからまったく。ね？ 配合のCPもどのくらいだったかな？ 16くらい？ だから、配合でタンパク摂るんじゃなくて、草でタンパクを摂って、それを補うのに、カロリーとして与えてるっていう感じ？ それとパーラー入ってきやすいのと、牛の、パーラーで配合食べていかなかったら、なんかあるのかなっていう健康管理にも役立つし。だから牧草で、ちょっとその餌の話になるけども、一律6kg。ピーク時も、だからそのときの栄養は牧草で摂りなさいっていう季節分娩にしてあるのさ。で、冬もだんだん乾乳になるけども、6kg。朝晩3kgずつ。で、牧草でしょう？ さっきの草架のここに、あの、昔の夏乾草をやってたけど、今はもう全部バンカーサイロにそのビッグヴェールのサイレージ、サイレージっていてもヘイレージかな？ 乾草に近いような草なんだけども。夏も入ってます。で、そこで自由に繊維を摂りなさい。草を食べなさい。だから、放牧地で繊維足りないなー？ と思ったら自分で食べるし、で、こっちの飼槽でね、生ビートパルプを650tくらいサイレージに1年間に、その時期に。十勝はビートが採れる。で、ビートパルプ。このパンフレットにも書いてあるけども。牧草でタンパクを摂って、カロリーを粕類で摂るっていうので、1日に搾乳牛、そこにね、20kgくらい渡ってるかな？ 生のビートパルプ。水分がどのくらい？ 70くらいあるのかな？ ペレットにしない工場から出てきた生のビートパルプをサイレージしたのを、それから、でんぷん粕っていうのが6~7kg。で、こういうふうに住牛出すでしょ？ したらね、ここにでんぷん粕とかね、ビートパルプとか、トラクターでパケットでやるんだけど、どんどんどんたくさん親もやっちゃうの。したら、いくらでも仔牛は食べれるようだけど、ちゃんと自分で調節できる能力が出来るの。食べ過ぎないの。これいっぱい食べたら放牧地行って草食べれない。で、ちゃんと自分でわかるようになって、自分で飼料計算して食べれるようになるのさ。食べ過ぎないの。それは、その、牛繋いでてその前に餌持って行ってやったら、いくらでも食べるよね。おいしいものだったら。配合飼料だったら、いくらでも食べるだろうけども。自由にしとくと、そういう自分でね、調節する能力が出てくる。だから親になっても、ばーっとやるんだけども、ここで食い過ぎて、あっちで食い過ぎてっていうのはなくて、ちゃんと自分でね、バランス

とるようになるんだわ。不思議に、それが自由にしてやってるっていうことのメリットなのかな？

Q: ありがとうございます。あともう一つ。何頭か断尾してた牛が見られたんですけども、それはなんでやってるんですか？

A: あんね、アプレストパーラーって後ろにうんこ受けてないでしょ。最近のパーラーでパラレルとかいったらうんこするならうんこするなあって逃げれるんだ。さっきのアプレストパーラーね。しっぽ振るの。ちゃんとチェーンかけてしっぽ押さえるんだけど、うるさいのはうるさいんだわ。で、お父さんはうるさいなあぐらいだけど、私が嫌なのさ。女性は嫌なのさ。しっぽベターってくるのが。うんこついとるのが。で、私が切る。私が。うるさいのだけだよ。で、それも遺伝。あの親がうるさいから子供もうるさいのがいてね、でね、お父さんは反対だったの。放牧地歩くのも、しっぽはバランスをとるためだと。ね？ 走ったらだめだったの。搾乳牛は太らせちゃだめなんだけど、歩くのもしっぽはちゃんとバランスをとるためにあるんだから、太陽を追うためにあるんだから、しっぽは切るもんじゃないっていうのさ。でも私が耐えられなくて、で、ビニールテープ、あれをキューっと巻くの。巻いとく。巻いとくだけ。痛いだろうけどね。したら落としてくるの。どっかで。でも、ひと月近くかかるかな？ ごめんなさいだけどね、牛にね。分かるっしょ？ お父さんはしないのよ。私がするの。

Q: すいません、餌の話なんですけど、でんぶん粕をカロリーを取るために与えているということなんですけど、そのでんぶん粕の出元というのは工場ですよ？ その場所は地域内というか近くの場所なのか？ということ、その輸送はどのようにしているのか、ということをお教えいただけますか？

A: あのね、旭山っていったら。清水のこっち側、新得で、清水があつて芽室町、帯広になるんだけど、私は芽室町に近い方なの。農家じゃないから借金しなきゃ酪農ができないでしょ？ で、その借金を土地を買うための何千万という借金を返して、利息を払って、生活して、子供を育てるには、どうやったら低コストでできるかっていうのをずっと考えてたのね。したら放牧しかない。でも放牧だったらカロリーが足りないっていうんで、これだって思って、父さんが思ったんだよ。私じゃないんだよ。でんぶん粕だって思ったら目の前に芽室町にでんぶん工場があったの。で、十

勝は産地だしね。で、清水から運ぶよりも芽室から運んだほうが、tいくらだったかな？ tで、800円？ 700円か800円ぐらいだったかな？ で、運賃がだよ。でんぶん粕の値段が100円くらい？ 粕代は。芽室から運んでました。いつからかな？ 統合になって芽室閉鎖されて土幌で焼却処分するようになって、なにをばかなことをやってるんだらうって思ったんだけど、餌としてもものすごくね、重要な資源なのに。で、今は中札内の南工連ってところから買ってます。そこはまだ飼料用として出してます。で、そこから運ぶとtで1,500円ぐらいかかるのかな？ だから運賃も含めての餌代。ほんとはね。あの、経理のほうではこっちが餌代、こっちは運賃って言いちゃうけど、遠くなると高い餌になるけども。それでも、でんぶん粕の餌としての価値でいったらね、TDNで計算してもすごく安いね。十分の一ぐらい、普通の配合飼料とか、TDNに換算して十分の一以下ぐらいで買えるから、でんぶん粕は餌に入れたした。ただ、やり過ぎるといろんな障害出てくるんだけど、ずっと使いたいと思っています。

Q: あともう一つあるんですけども、先ほど放牧の話で、日本型放牧もあっていいんじゃないかっていうお話があったと思うんですけども、ニュージーランドの放牧っていうのがありますよね？ それとの違いっていうのを、もうちょっと詳しく教えていただきたいんですけど。

A: あっていいんじゃないかじゃなくて、あつたんだっていうんです。だから私らがやろうと思った、昭和40年、私が昭和40年入学でしょ。夫が39年入学。で、夫は牛飼いをやりたいと思って39年に岡大の農学部に入ってるから、で、そのときから、どうやったら放牧、低コストで出来るかって、放牧の勉強してたの。その当時から、ちゃんと高知の方でもちゃんと放牧してたし、オカザキカンっていう人。今の人とは違うんだけど、それから、いろんな本もあつたし、ちゃんと昔から日本の、輪換放牧？ こうちゃんと、同じところにずっと出すんじゃないかって区切って回してっていう、放牧の仕方を、夫は大学のときに勉強してるの。で、ニュージーランド放牧が入ってきたのは、もともと後でしょ？ 輪換放牧っていう、りんって、「輪」の「換」わる。輪換。林の間じゃないよ。輪して換える放牧っていう、放牧体型ってあつたし、それはだから、昭和40年頃だから、ちゃんとそういう言葉もあつた

し、っていうことは、そういう方式もちゃんとあったのさ。ちゃんと大学の先生が書いた本があったし、私も読んだし、だから、あったはずなのさ。それがだんだんなくなってきたっていうのは、やっぱりコスト競争かな？ いろいろまあ、そっちの話をしたら長くなるからまあいいや。前から日本にも放牧で、輪換放牧してた放牧の仕方わかりました。っていう話。

Q: 形態が似たっていう形ですか？ ニュージーランドの放牧と形態が？

A: 似てます。にてます。もう一つぐらい誰か質問ありませんか？

Q: 粕類のサイレージに興味があるんですけど、生パルプとか、生でんぶん粕とかって、水分が高いじゃないですか？ それって、何かと混ぜて水分を下げたりして調整してるんですか？

A: サイレージにするときですか？

Q: はい。

A: うちの原則として、餌を絶対混ぜないの。混ぜないの。草は草、配合は、配合っていうより、指定混合なのね。配合飼料って感じじゃなくて、これをなんぼ、これをなんぼ、とうもろこしと、ふすまと、なんぼ混

ぜてください。って餌屋さんに頼んで、混合飼料なんだけれども、それはパーラーでやるでしょ？ だから絶対混ぜないの。それぞれ個別にやるの。草は草、だから、水分はビートパルプも工場で脱水してきて70%ぐらいかな？ でんぶん粕も、飼料として脱水してもらって、70%ぐらいになってるとおもいます。で、それをバンカーサイロに入れて、ビートパルプはきちんと気密にして、2本つくるの。2本つくるっていうのは、発酵するまでに時間かかるから、40日以上は開けれないから、で、時期をずらしてビートパルプは2本つくって、それを数年でやっています。

Q: ありがとうございます。出田さんは、まだすぐに帰られずここに少しいらっしゃいますんで、個人的にいろいろ質問がある人は、残って聞いてください。それでですねー。もう一度素晴らしい話に、感謝の意を込めて、拍手お願いします。

友情出演じゃないんですけども、飛び込みで来週話をしてくださる、岡田ミナ子さんも今日いらっしゃっています。ちょっとお立ちいただいて、来週お話をしてくださいますけども、拍手をお願いします。

▶清水町 出田牧場

出田牧場のあゆみ

酪農学園大学
実践酪農学講義
2005.6.14 16:20～

清水町 出田基子

1

出田牧場の歩み

出田基子

1. 自己紹介
2. ビデオ ① H 3 NHK 出田牧場紹介
② H11 グリーンチャンネル
3. 牧場づくりの夢を実現するまで
4. 出田牧場の現況・特徴
5. 経営哲学
6. 伝えたいこと

2

出田牧場の現況

- ◆ 経営概況(H15)
- 土地: 放牧20ha
採草37ha
兼用 5ha
- 家畜飼養
経産牛: 70頭
未經産牛: 68頭
- 出荷乳量
570t/年
8,200kg/頭



3

出田牧場の特徴

“牛にできることは、牛にさせる”

- ① 夏期輪換放牧主体
副産物の通年給与
- ② 無畜舎
冬も牧区ローテーション
- ③ 季節分娩
4月から放牧分娩
冬期間分娩無し
- ④ 仕事の時間帯
朝食後の搾乳
- ⑤ 高乳成分



4



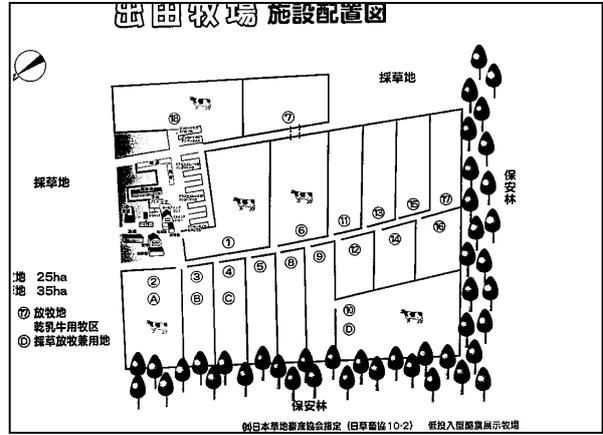
5



6



7



8



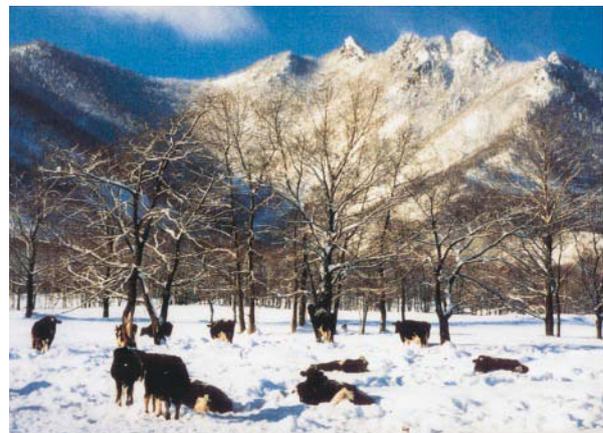
9



10



11



12

⑤ 酪農生産法人の歴史

卯原内酪農生産組合 部長

白石 康仁



卯原内酪農

(農場の概要説明)

うちの農場の概要を説明したいと思います。研修施設の1階は事務所と会議室と食堂になっています。2階の3部屋がアパートになっていて、研修生の方が自炊しています。各部屋に流しがついていて、風呂とトイレが共同の研修施設兼事務所です。これが牛舎のちょうど入口に建っております。場所は網走の能取湖のふもとに卯原内という小さな市街地があり、そこから1kmほど奥に入ったところです。サンゴ草って聞いたことがあると思いますが、このふもとに厚岸草(サンゴ草の正式名称)の群落があり、毎年秋にサンゴ草祭りがあります。農場の構成員は4戸8名です。内訳は組合長・専務と私が夫婦2人ずつで計6名、それからパンフレットの「歩み」に、平成13年構成員加入2名となっていますが、その一人が組合長の息子、もう一人は京都出身の個人の方です。どちらも結婚しておりますが、このお二人については奥さん方が構成員に入っておりません。構成員というのは共同出資者です。出資者は対等の立場になっているとご理解頂けたらと思います。

耕地面積は、畑作3品と呼ばれる甜菜・馬鈴薯・小麦でだいたい30町ずつです。大麦と大豆はそれぞれ10町、3町という小さな面積なのですが、こちらは



サッポロビールとの共同栽培です。飼料作物は37町です。もちろんこれだけで乳牛・和牛を飼うことはできません。パンフに書いていませんが、この他に60町ほどの草地があり、そこから草を買っています(土地を借りているわけではありません)。青草1kgあたり今年は1円27銭くらいで、年間にすると600~700万円を支払っています。13年度から素牛生産を始めました。肥育とは違って、だいたい8~10ヶ月育てて市場で売ります。数字についてはご覧のように、乳牛はほとんど横ばい、和牛も15年度以降は頭数を増やしておらず、50頭の繁殖牛の子供を売っていますのでだいたい横ばいです。畑作部門で凹凸がある原因のほとんどは麦です。麦が獲れたか獲れないかで、非常に大きな凹凸が出ます。トータルでだいたい2億円あれば良いかなという経営規模でございます。成績については、経産牛一頭あたりの乳量もだいたいずっと9,000kg台、昭和51年からずっとこの成績です。脂肪や無脂固形もそれほど変わっていません。ただ、乳価がちょこちょこ変わりますので、凹凸がでてくるような格好です。それから畑作の方をみるとわかるのですが、秋播き小麦が14年に大きく減収しています。要するに畑の方で、黒字になるか赤字になるかが決まる、そういう格好になっております。うちの経営の中では、牛がだいたい毎月の現金の出入りをまかなっていて、畑作は借金の返済とボーナス分をまかなっている、と考えて頂けたら良いと思います。ですから畑作が悪いとボーナスが無くなるのです。パンフレットにTさんが13年に退職とありますが、うちは60歳になると定年で辞めてもらいます。完全な給料制の法人であり、役員の名簿を出さなければいけないため、組合長と専務を名目上の役員としています。役員には給与が出せないで、役員賞与を支給しています。でも、だいたいみな給料は横ならびです。

(牛舎設計に対する自分の考え方)

これが牛舎の全景です。フリーストール牛舎の左右

と真ん中に通路があり、真ん中が餌場になっています。壁側と通路側に寝床が2列並んでいます。真ん中の餌場では機械で餌を押します。餌場から寝床まではまるっきり歩くスペースで、ここに寝床は設けていません。こういう格好の牛舎はあんまりないかも知れません。どうしてこのようにしたかという、昭和52年～ちょうど皆さんが生まれた頃に設計した牛舎なのですが、当時参考になるものは何もなく、とにかく基本的には、どうやれば牛の動線が短くすむか、人間の動線が短くてすむか、どうやれば交差しないか、ということだけ重点的に考えました。どうやれば仕事が一回で終わるか、どうやれば短時間で済むか、これが設計の基本になっています。餌やりとかふん出し・掃除に、1時間かけても30分かけても結果は同じなのです。同じ仕事の量なら短ければ短い方が良いのです。唯一、短時間で仕事を終えようとしてはいけない部分は搾乳室だけです。これは牛に合わせるべきで、人間に合わせてはだめです。搾乳室は牛に合わせるような形で考えましたが、ただし、そこで働く人間が楽な環境はつくっています。私の考え方ですが、あくまでも人間がいかに楽に効率よく仕事ができるか、それを考えてつくった牛舎なのです。ですからこれをそのまま真似すると間違えます。ちょっとした寸法～たった10cmの違いでえらい差が出ます。

(理由、正解と間違い)

皆さんこれからいろんなところに実習に行ったり牛舎を見る際には、建物もそうですが仕事にもすべて理由があるということを理解して下さい。何でそうやっているのか？必ず理由があります。そしてその地域がその理由の大半を占めるのです。要するに今ここで皆さんが教わるのは全国的なレベルの話なのです。牛はこうですよとか、機械はこうやって使いなさいとか、これらは全国的な話です。でも、東京と北海道では牛の飼い方が違います。北海道の中でも十勝と網走では全然違います。網走の中でもうちと隣は違います。飼い方というのは、100人いたら100通りの飼い方があるのです。これで決まった、というのは絶対ないです。こうだからこういう理由で、ここだからこういう格好で、という理由が必ずあります。ですから、これを見て「あ、これいいな、自分のとこでやってみるか」と、そういう単純な考え方でやれば失敗します。自分のとこで使うには、どこまでをクリアして応用できるか、

そういう考え方でやらないと必ず失敗します。この牛舎は、網走の中の卯原内というところで出来る、そういう条件なのです。そして、最低3人の労働力が前提条件です。2人でやると効率がとたんに悪くなります。1人では絶対できない牛舎なので、個人の方がこの形を真似しますと、必ず失敗します。そういうことが多々、酪農にはあります。皆さん今、いろんなことを教わっていますが、それはすべて間違いではなく、すべて正解なのです。すべて正解でも、それが全部合わさって、それが自分に合うかどうかは別問題なのです。矛盾することも正解なのです。間違いだと言われることも、その地域では正解になる、ということの頭の片隅に入れておいて下さい。「こういうことをしてはいけません」ということをこれから習うと思います。私どもが初めて北海道に来たのは1973年で今から32年前でした。その当時搾乳に対してどういう指導がされていたかという「乳房をよくマッサージしなさい」、「洗う時は乳房をそっくりきれいに洗いなさい」、「それからお湯でよくマッサージしなさい」、「それから搾りなさい」、そういう指導がされていました。その時は間違いではないのですが、今の牛で今の理論で成績を出そうとすると間違いです。その時の成績でよければ、それはそれで正解なのです。間違いと正解の差というのは非常に微妙なのです。やっていることすべてが間違いということはありません。特に今まで10年20年、牛を飼っている方が実際にやっていることに間違いはないのです。みなさんが「やってはいけません」と教わったことをやっても、そこでは間違いではないのです。例えばパイプライン搾乳で「パイプラインの立ち上げがあったら真空圧が変動するので牛には良くありません」ので間違いです……ではないのです。それでも問題がなければ問題ないのです。その上それは何故かという理由があるのです。そういう理由を無視して「あんたのとこ間違ってる」と決め付けるような考え方ではなく、何故間違いだとされることをやっても問題がないのか、ということをお勉強してみてください。牛屋というのは良いことの全てをやっても一つには出来ないのです。こうやりなさい、あーやりなさい、えき計算はこうしなさい、乾乳の扱いはこうです、哺育はこうやりなさい……全てやったら失敗します。これらは実際には組み合わせられないのです。そこだけ見たらそのやり方がベストかも知れないけれど、それを入れることによって全体のバランスが崩れる、とい

うことがあるのです。その辺りの見極めに気を付けて頂きたいと思います。

あとは写真を見て頂ければわかると思います。微妙なところでは、このネックレールの高さとか、飼槽の幅、全体の群に対するこの幅とか、こういった数字は今きれいに出ていますので、その通りつくったらほぼ間違いはないと思います。ただし、あくまでも牛のサイズによっても違うことを忘れないで下さい。だいたい言われている寸法は125 cm、130 cmです。5 cmくらいの幅できれいに数字が出ています。でも、牛のサイズが違うのに、それを一生懸命言っても仕方ないのです。ですから、もし自分でやられたり実習されたりする時には、そういうことも頭に入れながら聞いてみて、ここがこうだから〜こうなんだ、そういう理解の仕方をして頂きたいと思います。パーラー室は6頭ダブルのヘリンボーンのタイプで、うちがこれを導入した後にパラレルというタイプが出て来ました。今牛舎が建っているのは、山を一つ崩して土盛りした所なのです。泥炭（ピートモス）が積み重なったような畑なのです。畑の上につくったので、ちょっと掘れば水はいくらでも出ます。でも（泥炭中の）茶色い水なので、洗うとこういう風にコンクリートが黒くなってしまいます。

（農場の最終設計と搾乳）

非常に汚いのですが、こういう古い牛舎でやっております。もう17年経ちますので、そろそろ新しいのに替えるとメーカーは言ってきますね。ただ、私はこれを全然変える気はありません。この牛舎は162の寝床で本来200頭の設計です。都合があつてこのサイズにしたわけなのですが、農場の最終設計は400頭搾乳です。400頭搾乳の20時間搾乳が最終設計です。ですから、今これを動かす気はありませんし、新しく大きくする気もありません。パーラーに関しては動けば動くほど、コストが安くなります。搾乳器具が一番お金のかかる場所なのです。これ1セットで40〜50万円はします……ホースと搾乳するところだけで。パルセーターをつけたらだいたい40〜50万円はします……1個で。これを12頭分つくるのに、1千万2千万という数字がすぐ出てきます。これを回収するのにどうするかと言ったら、搾乳するしかないのです。パーラーを動かせば動かすほど、搾乳の量が多くなる。そうするとパーラーの投資に対するコストが安くなる、というこ

とです。ですから最終設計は20時間搾乳。搾乳しっぱなしだったら、機械的に4〜5年で交換しても合うと思います。20時間搾乳というのは、普通個人の方々は朝2時間夕方2時間のせいぜい4時間しか動かさないですが、その5倍動くのは20年使っているのと同じなのです。それで十分ここは採算が取れるという考え方です。酪農の経営に対する考え方にはそういう視点もあります。そういう考え方でなくても良いのですが、私の場合はそういう考え方でつくりましたと理解して頂きたいと思います。

（和牛のはなし）

これは和牛の牛舎です。残念ながらこの牛舎の設計に私は一切タッチしておりません。皆さんは酪農関係ですけども、和牛の勉強もするのでしょうか。私から言わせると、ホルスタインと和牛は全く別の生き物です。牛という名前がついているだけで、代謝から何から全部違う生き物です。ですからホルスタインの感覚で和牛を飼うと必ず失敗します〜特に哺育は。これは私から見れば牛ではありません。代謝もまるっきり正反対です。私は一切タッチしておりません。下手にホルスタインの知識があるとなんかにはならないです。ですからパンフレットに書いてあるN氏に一切任せてありますので、残念ながらあまり説明できないのですが、この牛舎は失敗しました。やっぱり全然知らないから、どうしてもホルスタインのイメージが絶対出てくるんですね。和牛は寒いのはだめなんです。特に哺育は寒いのがだめです。30°C超えても全然問題ない、40°Cを超えても多分こいつらは全然元気です。和牛はそういう生き物で、ホルスタインとはまるっきり逆です。本州の方がこの写真をを見て何と言ったかというところ「何で屋根を透明にしなかったの？ これじゃ日が入らないでしょ？」。夏でも日を入れるんですね。ところが、マイナス10°Cになるとこいつらは死にます。特に哺育は……それぐらい弱いんです。哺育の感覚として、ホルスタインの8ヶ月くらいの早産の牛と同じくらい……という私なりの感覚を持っていて、非常に神経を使います。ここはN氏1人にまるっきり全部任せて、やりたいようにやらせています。とにかくホルスタイン（酪農）でしたら、たとえ分娩して子供が死んでも、搾乳で元がとれるのです。ところが和牛は子供が死んだら終わりなのです。生まれるまでに10ヶ月以上かかって、その間の経費は一切全部マイナ

スになり、すごくシビアな世界なのです。本州の方もそういうことでやっておられますし、非常に難しいのだと思います。ただ、今価格がある程度安定しています。ちょっと私的に理解出来ないのですが、ホルスタインならせいぜい2~4ヶ月くらいの大きさの牛が50万円を超えています。8ヶ月~280kg以下の和牛は今だいたい50万円を超えています。買う人が何を見るかという、競走馬と同じで素牛を見ずに、一番先に見るのは名簿です。過去3代どういう系統か？血統が第一で、これでほとんど買う牛を決めていますね。それから素牛を見てどんどん競り落としていきます。わからないですね~私には。こちらが売るのはだいたい8~10ヶ月ですから、実際に肉になるのはそれから2年後なのです。30ヶ月かかるのです。2年丸まる預かった後いくらで売れるのかな、素牛が高くて採算合うのかな？本当にわからないのですが、でもやっているということは、何かあるのでしょうか。聞くとだいたい100万円くらいで、100万切ったらちょっと合わない、という話は聞きます。でも、中には50万60万という牛も出ます。それは特別な牛なのでしょうけど、要するに、バクチに近い世界のことなので、あまり私はタッチしておりません。舎内はフリーストールというカルズバーンです。給餌制限みたいな感じで基本的にはわらで飼っています。わらも枯れて2~3年経ったわらでないとだめです。青いわらを食わずと栄養が付きすぎます。私から見たらおもしろい代謝をするなと思っています。何でこんなしか食べないのにこんなに太るのかなあって、和牛はそれぐらい効率がいい生き物なのですね。

(農場の現状と将来)

将来的に農場をどういう風に進めるか、和牛の導入も考えたわけですが、畑作3品、今ビートに関しては余っている状態で、今年初めて生産調整が来ました。今までも生産調整がなかったわけではなく、作付指標と言いまして、自分の持っている畑に対して何%、畑作物のほしい30%までならビートを蒔いていいですよ、という面積の指標がありました。その代わり反あたり何t収穫しても、どれだけ出荷してもそれはOKだったのですが、今年初めて糖分は何%以上、総出荷量は何tと、今の牛乳と同じ格好になりました。そして芋はデンプンの原料ですから、でんぷんの消費は普通で考えるとラーメンとかそういう練り物などに限ら

れています。大半が異性化糖であり発酵してこれがまた糖に戻るのです。ある意味競合する品物なのですが、それも余っております。何で余っているかといっても、消費に対して100%余っている作物なんて日本にもありません。お米も足りてないのです。ただ小麦が入ってきてパンとかラーメンとか食べているから、お米が余っている、そういう状態です。何か一つなかったら、日本の状態はおかしくなります。例えばアメリカから大豆が入ってこなくなったら終わりです。そばが入ってこなくても終わりです。そばも90数%は輸入しています。大豆にいたってはもう99.数%が輸入です。それで唯一輸入されてないものが生乳です。これだけはさすがに入ってきていないです。

(北海道に来てわかったこと)

私、北海道に来て初めて牛を見ました。別に酪農しようと思って来たわけではなかったのです。ただ、私東京出身であり、その頃は高度成長時代で田中角栄さんが列島改造論をぶち上げて非常に景気のいい時期でした。今で言うあのバブルとはちょっと違った意味で、非常に活気のあった時期です。ベトナム戦争があった時期でした。その頃は、北海道と言ってもわかんなかったのです。東京から見ると全然もう日本じゃないです。北海道と沖縄は日本じゃありません。海を渡るという意味ではっきり言って外国だったのです。ただ、イメージとしては牛(肉牛ではない酪農)、牧場があって放牧されていて、タワーサイロ(ブロックのレンガサイロ)があるという、そういうイメージしかほとんどの人は持っていませんでした。札幌冬季オリンピックがあったから、少しずつイメージが変わってきたような気がします。ただ私が来た1973年当時は、こちら辺(札幌近郊)は何もなかったです。野っ原でした。確かに札幌は大きな街だと言われますが、私から見たら東京をそのまま小さくしたような街で、好きになれなかったのです。わざわざこんなとこまで来て東京の真似する必要はないと思ったのですが、ただ道庁に用事があって、何しに来たかという、道庁に酪農の盛んなところはどこか聞きに行ったのです。すると、いろいろ親切に説明してくれました。地図を出して……結局全部だっけ言われました。仕方ないのでまた苫小牧に戻りました。フェリーで苫小牧に上がったのですが、そのまま海沿いにぐるーつと回って、網走で止まってしまった……というような格好です。その頃の牛はどう

いう牛かという、5・5・5運動というのをちょうど網走のここ西網走農協でやってまして、はっきり覚えてないのですが、5,000 kg 搾りましょう、草を5 t 採りましょう、そして500万円の所得をあげよう、という運動だったと思います。と言うのも、牛はやはりそういう牛だったのです。平均乳量が3,000 kg 台、4,000 kg 出れば良いほうです。私が実習に入ったところの話では、だいたい5~6頭搾乳していれば生活ができるというわけです。その時に乳房をいろいろマッサージして、バケツミルクがあれば良いほうですね。手搾りもまだありましたし、そんな中で、初めて牛を扱いました。今、実際に私がやっている中で切実に思うのですが、同じ牛でも今の牛は全然別の生き物です。非常に人工的に改良されすぎています。あと餌のつくり方も全然違う。確かにいろんな良いことをみんなやってきていて、全てが変わりました。唯一変わってないのは人間ですね。実際にやっている方の感覚は変わらず昔のままです。ですから、良いところと悪いところが出てくるのです。100軒あったら100通りの飼い方があります。ですから、たとえ同じ施設・同じ餌・同じ牛できれいな本当に同じ状態の農場をつくっても、結果は絶対に違います。これは人が違うからなのです。牛の違いなんてないのです。平均6,000 kg 搾っている方でも、12,000 kg 搾っている方でも、牛や餌に大して違いはないのです。掃除・搾乳・給餌……やっていることもほとんど変わらないです。みんな同じことやっているのに何でこんなに違うのか？ もうこれは本当に人の差なのです。マネージャーの差なのです。

(経営者のあり方)

定年退職して脱サラして生活には困らない～年金がもらえるのもっと牧歌的なところでのんびりやりたい～そういう方は除きます……自分のところで素晴らしい経営していて今まで通りやれば何とかなるしその方が楽……そういう方も除いて、これから一生懸命酪農をやろう～何かをつくり出そうとしている方々にお話します。酪農をやるということは、法人であろうと何であろうと経営者になるわけです。経営者というのは一体何なのか？ 何のために酪農をやるのか？ 言うなればビジョンを持っていないと経営者ではないのです。将来私はこういうことをこうやりたい、こういう加工製品を作りたい、これだけの規模にしたい、こ

ういう経営したい、こういうビジョンを持っていないと経営者ではないのです。ただ単純に牛を飼っているだけで、それで生活できるのなら私は別に否定しませんし、それで自分の子供もうまく教育できるし、環境も保てる自信があるのならば私は否定しません。しかしできないのなら、勤めた方が私はいいと思います。経営者というのは、自分で責任を全部負わなければいけないのです。そこがサラリーマンと若干違うところなのです。全ての責任は全て自分に返ってきます。私がこちらで農業やって一番ビックリしたことは、その意識が欠如している方が非常に多いことでした（今はそんなでもないです）。私が来た当時は、オイルショックがあり非常に農家も大変な時期でした。子牛が7万円で売れたと思ったら、500円でも誰も持って行ってくれなかった、それくらい格差があった時期です。だから経営的に行き詰って首吊ったとか、そういう事件もあった年なのです。そこで、「農協の言ったとおり一生懸命やった、言われたとおりやった、けども上手くいかないんだ、どうしてくれるんだ」と言うのです。これはおかしいと皆さん思いませんか？ 私から見たら異常です。自分の経営は自分で決める、やることも自分で全部、指標を求めることはあっても決定権は自分なのです。自分のやったことに対して、失敗したから農協がおかしい……これは経営者としては絶対に出てこない言葉なのです。自分で責任をとっていないのです。

(昔の、企業と農家との違い)

何故私がそういう風にその時思ったかということ、30年前の話ですが、人が違うのです。都会の企業の人材と、農家に残っている人材とでは、質が違っていたのです。これを言うと農家の人にすごく怒られます。私はどっちかということ企業側の人間で育ちましたので、あの頃そのまま企業に就職してれば、多分手取りで12~3万円もらえたと思います。北海道にきてビックリしたのは、手取りで2~3万円、農協の職員が2~3万円でした。その代わり家賃が安いのにビックリしました。3,000円で一軒家借りられました。そういう違いはあったのですが、それだけ企業は金をかけて大卒者を選んでいました。そしてそれから1年間、自分の会社を使いやすいよう教育し直したのです。1年間給料払って仕事をさせていません。普通の製造業とか特に素晴らしかった企業ほどそういうことをやってい

ます。人をつくることにすごく金かけたのです。そこで農家とは何なのか、その頃思ったのですが、要するに、明治時代・江戸時代からそういう傾向なのかも知れませんが、あくまでも人のショックアブソーバーでしかなかったのです。街に対する人のショックアブソーバー～わかりますか？ 街がどんどん発展して生産性を上げます。そして人が足りないので農村から連れてくる。私の時にはまだ集団就職があって、中学生が夜行列車に乗って東京に来るんです。私がいった学校は特殊で、統計学でそういうリサーチをしていました。全部をリサーチしてみた結果、北海道は変わってるな、と思ったことがあります。東京に集団就職した方々の行き先の追跡を全部したのですが、1年続かなくて辞めて点々としても地元に戻らないのです。東京だったら東京、横浜だったら横浜で、街から出ようとしません。ところが北海道から集団就職してきた方々の90数%は北海道に帰っていたのです。これにはビックリしました。府県と全然違い北海道だけ特殊だったのです。だからどういうところなのかなと、最初から興味はありました。そういう中で、農村から人が余ってるから街に来る、勉強ができて頭がいいから農家ではなく街に住んで官庁や企業に勤める。頭悪くて勉強できないから農家の後継ぎになる、長男だから仕方なく後継ぎ。こういうことがずっとあったのです。と言うことは、農家の方は本当に農業がやりたくてやっていたわけではないのです。仕方なくやっている方がほとんどでした。そういう方々に食をつくることを任せて本当に生産性が上がるのか？と思ったわけです。企業の人材教育というのは、その頃は永久就職、定年まで間違いなし、それならその企業のために一生懸命やろう、そういう教育をするのです。一生面倒見てやるから、とにかくうちの会社で一生懸命頑張ってくれ～するとやっぱり一生懸命やるんですね。でも農家は違う～本当はやりたくない、要するに自分の子供を後継ぎにさせたくない、そういう方が多かったです。今はどうか？ そういうリサーチをしてないのでわかりませんが、私が独身で来たときには、「自分の子供にうちを何とか継いでもらいたいし嫁さんは欲しい。でも娘はそういうとこの嫁にやりたくない」、そういう感覚でした。ということは、親がやっていることに自信を持っていなかったのです。代々続けてきたから何とか続けてもらいたい、そんなことでいい経営ができるかという、絶対できないのです。

(農業の後継者の方へ)

これからみなさん実際に酪農をやる方、畜産関係の会社や農協などに入る方もいらっしゃるでしょう。みなさんにこれからどういう意識を持ってやって頂きたいか、私が思うことはまず、“人の話を聞いて下さい”、それも素直に聞いて、頭から疑わないで、それはそれで聞いて、自分で自問自答して下さい。勝手に解釈しないで、わからないことは人に聞いて下さい。自分で勝手に消化せず、まず人の話を聞いてから、それを疑問に思ってください。全てに理由があります。その人にとって、言った人にとって全部理由があります。その理由が自分にとって大事なのか大事ではないか、その判断は自分でやるものですから、良いことは取り入れるし、関係ないことは取り入れなくていいです。経営者というのは、常にそういうのを取り入れる意識を持ち、常に何かを求め、常に刺激を受けなければいけないと思います。あと、後継ぎの方は、農業の勉強なんかしない方が良くと思います。やっても意味ありません。できれば大学の4年なり高校の時間は、全然別のことを勉強した方がずっと役に立つと思います。農業というのは自然科学を相手にした総合的な職業なのです。言うなれば無駄な知識はありませんし、要らない知識も基本的にありません。どんな知識も全部応用できます。だから、自分の得意な分野から攻めることが出来るのです。ですから、自分はこっちの方が向いていると思ったら、そういうものをなるべくやってみて、それから農業やっても遅くはありません。農業にはやらないと身につかない知識がすごくあるのです。今みなさんいろいろ授業で勉強します、本読みます、でも本当に理解できているわけではないのです。農業は非常に特殊だと思います。やりながらじゃないと本当の理解が出来ない。簿記にしてもそうです。計算できても実際にはほとんど役に立ちません。牛に対する知識～生理学も多分役に立ちません。何故か？ という理由がわからないためなのです。学校では結果を教わります～こうやったらこうですよ、こうだからだめですよ、と。しかし、こうだからの理由がわかんないのです。何でここがこうなったらだめなのか？ その理由がわからないから、本当の理解が出来ないのです。ですから、基本がわからずうわべだけでやっていくと、どこかで必ず失敗します。農業というのは、やりながら失敗しながら覚えた方が早いと思うのです。農業の勉強より、その分ほかのことを～特に人に使われる～

アルバイトでもいいですから、一生懸命やってみてください。農業を経営するという事は、経営者ですから社長なのです。特に後継ぎの方は、社長のままであり、人に使われたことないままなのです。農業は一人では出来ません。周りの人といかに上手くやってくるか、これは資本主義と相反するところなのですが、1軒だけ残っても出来ないのです。そんなときに俺は社長だ！などとやっている、良いことはないような気がします。必ず、人に使われる、人と付き合うのがどうということか、農村にとってはそちらの方が大事である場合が多々あります。知識はやりながら身につけられます。今覚えて頂きたいのは、今ある知識をどうやって応用するか、これを応用するにはどうしたらいいか、その思考力を今から鍛えておいて下さい。そういうことで、大変無茶苦茶な話になりましたが、これで終わらせて頂きたいと思います。

(質疑応答)

(干場)

白石さんは東京生まれで、幾徳工業高等専門学校(神奈川県工科大の前身)というかなり珍しいところを出られてから酪農に入られた方です。そういう意味で、農業をずっとやっていた人とはちょっと違う視点でいろいろ話をして下さいました。

卯原内の生産組合を補足的に説明して頂ければと思います。通常は大きくするとメガファームになることが多いのですが、卯原内は畑作との複合にこだわってらっしゃいますね。

(白石氏)

明確に理由があるかと言われると返答に困るのですが、半分半分、50:50でやっているところがあります。それには人の配置やローテーション、思考の問題や頭の問題があります。

酪農は毎日同じ仕事の基本で、今の状態が順調なら、頭使わなくてもそのとおりにやれば出来るのです。ということは発展がないです〜頭使わないから。一方、畑はある意味バクチです。1年に1回この時期にちゃんと植えたか、防除がきちんと出来たか、半日ずれただけで結果が大きく変わります。そういう人たちと、牛屋さんが共同経営していると思って下さい。思考が違うのです。私たちはどちらかと言うと保守的なので、どうしても守りに入ってしまうのですが、牛屋さんは攻撃的なのです。当たり外れ……外れてもいい

からやっちゃおう、そういうのがあります。そういう指摘を受けると非常に上手くいくと思います。季節的な作業では牧草作業なんか私もやりますが、牛屋さんが半分以上手伝ってくれる格好ですので、私は共同経営するなら牛屋さんと牛屋さんが一緒になった方が良いと思います。牛屋さん同士と一緒に共同経営してもろくなことないような気がするのです。どうしてかと言うと、社長と社長が同じことをやっている同士だとぶつかるんです。哺育の仕方だとか、搾乳の仕方だとか、餌のやり方だとか〜俺はこういうやり方していた、私はこうやっていた、と。うちの場合は、畑は牛屋に任せるのです。牛は牛屋に任せるのです。牛の方には冬になれば畑の仕事はありませんから、組合長(牛屋)が手伝いに来ます。でもそれは私の指示なのです。私が畑に行けば、そこの担当の指示で動きます。そういうシステムにしていますので、非常にいい状態だと思っています。しばらくこれを続けて、やれる限りはやっていきたいと考えております。

(新名)

4戸8名の職員の方はどのように所得を配分していますか。

(白石氏)

年間20ヶ月給与みたいな感じです。夏に1ヶ月分、冬に8ヶ月分のボーナス、というような格好です。何等級の何号といった農協の基準を使っていて、若干何千円という単位で組合長、専務、私と金額は異なりますが、女性の奥様方は同額です。だいたい夫婦合わせて1,000万円くらいの所得です。これは給与ですから、赤字になっても保障します。借金しても払います(結局は自分らでかぶるしかないのですが)。うちの法人が少し変わっている点の一つは、個人の土地を買い上げていないことです。法人にするとたいがい土地を現物出資しますが、うちは個人資産の持込はせずに、個人と法人との間で賃貸借契約を結んでいます。ですから法人の経営者でありながら、法人と契約して土地を貸しているという形になっています。発足当時からそれを貫いています。個人経営のときの資産・負債を持ち込まないので、借金も持ち込んでいません。ですから給料で自分の借金は自分で返します。その代わり資産を取り上げず、あなたから等価で借ります、という形でやっていますので、土地がある方はその他に何百万円の土地の賃貸料が入るようになっております。

(干場)

卯原内の生産組合はもう40年やっていて、当時法人はなかったですし、今ご説明頂いたようにユニークなやり方をしてらっしゃいます。法人のどこが良くて、どういう問題があるか、法人経営で成功するにはどんな秘訣があるか、そのあたりをお話し頂ければと思います。

(白石氏)

法人にもいろいろございます。うちの場合は農事組合法人、どちらかというと農協に準じたような法人です。大抵の法人は株式会社になっていて、社長が全責任を取って、後は従業員というような形になりますね。農業生産組合法人というのは全てが経営者なのです。構成員の8名が共同経営者という形になっています。うちの場合変わっているのは、現物出資をしていないことです。普通、法人をつくる時は、わりと現物出資をして、借金も全部法人のものにして、それで出発するところ多いのですが、先ほど話したとおり、うちは出資金を積んだだけです。一人平均で約100万円、100万円積みめば共同経営者になれるのです。共同経営者というのはどういうものかと言うと、経営に責任があります。当然儲けたときは配分がありますが、赤字になったときも、当然その責任はかかります。もし何かあって解散した場合、それも同等であり、法人所有のものは同等に分配する、そういう立場の人になります。昭和37～8年頃に第1次構造改善という、(今も国の方で法人をつくりましょうと一生懸命やっていますが)国の政策にのっとって、昭和41年に法人になった当時は有限会社だったのです。気の合った仲間、じゃお前ら一緒にやるべって一緒に有限会社をつくって、解散して、そして農事組合法人という形になったのです。私が農場に入ったのは昭和56年で、その4年後の昭和60年に構成員になりました。昭和52年に今の家内と結婚いたしまして、実習生として新規入植者と似たような形で入ったので、最初から構成員ではありませんでした。例外的に条件が整って、部外者を構成員にしたのは私が初めてです。私が部外者で入って、結果としていい方向に進み、そこから方向が若干変わってきたと思っています。私が素晴らしいと思うのは、いきなり経営者にする、その発想がすごいと思います。普通は出来ません。今まで自分でつくってきた財産をやるのと同じですから。そういう意味では本当に変わった組織だと思います。日本でもうちぐらいだと思

います。ほとんどの法人は血縁関係で、兄弟なり親戚、そういうのでつくっています。最近出てきたメガファームがそういうのからはずれてやっていますが、一言言いたいのは、素晴らしい内容のメガファームはありますが、私から見ればクエスチョンなメガファームが大半です。つくるときに結構うちに視察で来るんです。私はその時に平気で言って怒られるのですが「ゴミはいくら集まってもゴミにしかならない」のです。粗大ゴミにしかならないです。自分個人の経営が出来ない方が何軒集まっても経営は出来ない～これは肝に銘じて頂きたいです。大きいところ程スケールメリットはありますが、逆にスケールデメリットもあります。細かい管理が今まで以上に出来ないのであれば、デメリットが出ます。細かい管理が出来て成績も上がるようならスケールメリットが出ます。投資になるか、ただの負債になるかの境目というのはその辺にあるのです。自分の経営の出来ない人に、共同経営の経営は絶対に出来ない～これは保障します。もしやるのなら、誰でもいいです～引っ張ってってくれるリーダーが間違いなくいるのだったら、成功すると思います。ただうちの場合はそういう形態ではありません。みんながリーダーです。これが非常に難しいのです。1人がリーダーなら、その人が思いっきり引っ張ってあげれば、その人が素晴らしかったらいい経営になります。その代わり世代交代が難しいという問題があります。その人が歳とった後の跡継ぎをつくれないうのです。世代交代の時にいい法人が潰れています。うちには「船頭多くて船進まず」みたいなところがあって、みんなが先生ですから、すごく難しいのです。それでうちでは半期に1回なり2回必ず話をする、という形態をとっています。私たち法人に何が必要かと言うと、人と付き合う、人と理解しあう、というのがすごく大事なのです。決議事項もあります～何かをやります、止めます、進めます、それは全員一致かだめかのどちらかです。一人でも反対したらやりません。その決議権は構成員全てにあります。当然、私もこういうことやりたい、といった起案をします。それでその人をどうやって説得するか、これもなかなか大変です。早い話、そこにしこり残さないよう、全員一致でしか物事を動かしません。何かあったときに「俺あの時反対した」～これがあつたらうちの法人は失敗します。そういう組織なのです。こういう形態の組織はそんなになんかと思いません。うちの組合長は「ところてん」です。定年になっ

たら次の歳の人が組合長になり、組合長とは名前だけ、部長と言うのも名前だけ、みんな平等です。一応、組合長は総体の責任者、専務は経理の責任者、私は畜産の責任者、怒られるのはそこの担当、それぐらいの違いです。営農計画をご存じですか？ 農協に毎年、一年間何を作ってどういう収支にするか、という営農計画を出します。うちの場合は、和牛は和牛の人が、私はホルの方を全部、畑は畑、機械は機械、すべて部門別に営農計画を作ります。それを総括して営農計画として出すわけです。ですから、責任はその営農計画を作った人にあります。

このような経営形態を実現するには、そういう人材

が集まるか、そういう雰囲気を持っていけるのか、その辺りが難しいところなのです。うちは出来ていますが、これから新規ではじめる法人がそう出来るかどうかは疑問です。

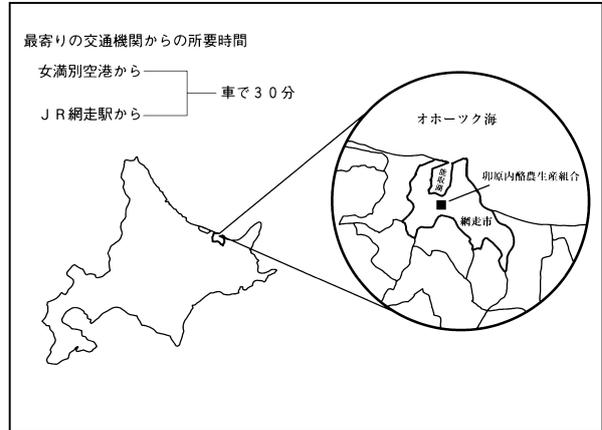
(干場)

ありがとうございました。徹底的に議論はする、でもその分協力もする、お互いの立場を認め合う、ということが守られているから、卯原内生産組合が法人として成功しているのかな、という気がします。非常に参考になるお話がたくさんあったと思います。もう一度拍手で感謝の意を伝えましょう。

卯原内酪農生産組合（白石部長）



1



2

経営概要

- 構成員 4戸8名
- 耕地面積
 - ・畑作物 99.25ha
(てん菜、馬鈴薯、秋播小麦、二条大麦、大豆)
 - ・飼料作物 37.5ha(サイレージ用とうもろこし、牧草)
- 家畜飼養頭数
 - ・乳牛: 経産牛 139頭、育成牛 101頭
 - ・和牛: 繁殖牛 58頭、育成牛 36頭

3

年次別生産高

【酪農部門】

区分	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年
経産牛1頭当乳量(kg)	9,236	9,461	9,551	9,345	9,790
乳脂率(%)	4.11	4.21	4.00	4.08	4.11
無脂固形率(%)	8.94	8.84	8.97	8.96	8.97

【畑作青果部門】

区分	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年
てん菜(kg/反)	5,913	6,040	6,310	6,250	6,555
「糖分」(%)	16.8	17.8	17.9	18.1	17.5
澱原馬鈴薯(個/反)	83.9	63.4	65.2	74.5	89.4
秋播小麦(個/反)	10.9	10.8	7.9	10.9	10.9
二条大麦(個/反)	9.0	8.7	6.4	7.7	8.7
たまねぎ(kg/反)	3,726	4,880	6,372		

4



5



6



7



8



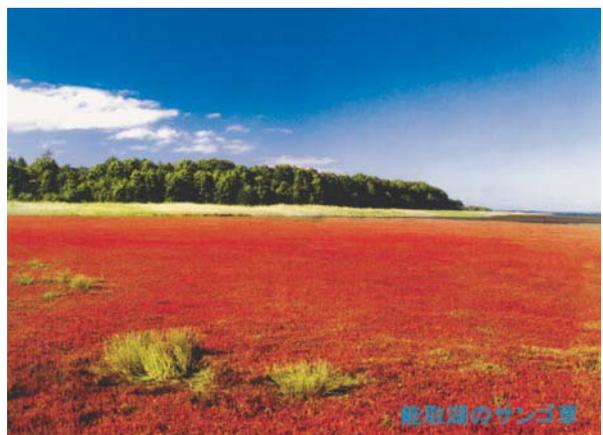
9



10



11



12